

アルマナック・ムラユ論

土 屋 健 治*

A Study on *Almanak Melajoe*

Kenji TSUCHIYA*

- | | |
|----------------------------------|-------------------------|
| はじめに | 2. 読者, スポンサー, 販売政策 |
| I 植民地政府刊行のアルマナック | (1) ブニン社の性格と広告主 |
| 1. 植民地時代のアルマナック | (2) 販売ネットワーク |
| 2. 政府刊行アルマナック | (3) アルマナックの読者層 |
| II アルプレヒト版アルマナック及びバライプスタカ版アルマナック | 3. アルマナックをめぐる時間と空間 |
| 1. アルプレヒト版のアルマナック・ムラユ | (1) 時間の区分と並列——カレンダーの意味論 |
| 2. バライプスタカ版のアルマナック・ムラユ | (2) 官僚共同体の時間と空間 |
| (1) 刊行当時の状況 | IV シャイールとその時代 |
| (2) 読者数 | 1. タン・チュック・サンのシャイール |
| (3) 読者層 | 2. シャイールの時代 |
| (4) アルマナックの性格と機能 | (1) 同時代性 |
| III ブニン社版ムラユ語アルマナック | (2) 闇の世界のかがやき |
| 1. 体裁, 内容の概観 | (3) タン・チュック・サンの時代 |
| | おわりに |

This article deals with the *Almanak Melajoe* published in Indonesia during the period of Dutch colonial rule. From the latter half of the nineteenth century various kinds of almanacs were published in the large colonial cities. These were widely circulated all over the country with the development of colonial bureaucracy and the spread of publishing firms. As far as I know, there were three main *Almanak Melajoe*, almanacs written in the Malay language of those days. One was published by Albrecht, Batavia; one by the government-sponsored Balai Poestaka, Batavia; and one by Buning, Yogyakarta.

Of these three, the *Almanak Melajoe* published by Buning is the most interesting, since it portrays vividly the events that occurred in Yogyakarta each year. These events are narrated in the style of *syair*, traditional Malay verse, and were mostly composed by Tan Tjook San, a *Peranakan* about whom we know very little. He edited the *Almanak* and composed the *syair* during the years between 1889 and 1904. The subjects of the *syair* vary from the proliferation of bandits in the city to the official visit of King Chulalongkorn to Yogyakarta in 1897, and the spread of opium firms across the country.

The first chapter of this article discusses the outline of the almanacs. The second chapter

* 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

describes the first two *Almanak Melajoe*, published by Albrecht and Balai Poestaka, focusing mainly on their readership and usage. Chapters three and four mainly discuss the *Almanak Melajoe* published by Buning. Chapter three outlines the *Almanak* from the perspective of its readership and the publisher's strategy for increasing subscriptions. The final chapter describes in particular the *syair* appearing in the *Almanak*. These have never been considered by those students of the social history of Indonesia. By examining these *syair*, a fuller picture can be obtained of colonial society in the late nineteenth and early twentieth centuries.

はじめに

アルマナック（英語表記で *almanac*, インドネシア表記で *almanak*）は、本来、暦、暦書を意味するが、転じて世界各国の国勢・スポーツ・娯楽などの記録、情報を集めた年鑑、ガイドブックの意味でも用いられる。そもそもはヨーロッパの伝統的な生活暦、日の出や日没の時刻、月相、聖人祝日、祝祭などのほか、重要な歴史的イベントや俚諺などを記載したものである。

もともとヨーロッパで生まれたアルマナックはいまや世界中に行き渡っているが、インドネシアとて例外ではない。町の本屋に入ればアルマナックという名を冠すると否とにかかわらず、年間の暦と祭事と公式行事を記したほか、さまざまに有用な情報をコンパクトにもり込み、個人の予定表や備忘録としての機能を併せ持った出版物が、幾種類も出まわっている。

それでは、現在のことはともかく、このようなアルマナックは、いつ頃どのようにしてインドネシアに出現したのか。また、アルマナックにはどのような種類のものがあり、それぞれにどのような内容が盛り込まれたのか、さらに、それらは時とともにどのような変化を示したのか。あらためていうまでもなく、人々がアルマナックになじみ始める時代とは、伝統的な年中行事や暦法の上に、別の新しい暦が提示されるとともに、時の推移が印刷物によって示される時代である。個人の生活史や季節の変化が、「客観的」な共通の尺度において計られるようになる時代であるといってもよいだろう。

これから本稿で取り扱うのは、インドネシアにおけるアルマナックの起源と展開ということであるが、とくに、19世紀末から20世紀初めの状況が重点的に扱われる。それがアルマナック、とくにムラユ語版（インドネシア語版）のアルマナックについて考える上で重要な時期であるだけでなく、オランダ植民地支配下にあったインドネシア、とくにジャワ島の社会と文化のありようとその年々の変化をユニークな視点から示していると考えられるからである。

だから以下で扱われるのは、暦とかカレンダーそのものであるよりも、「アルマナック」という名を冠されている出版物そのものであり、それが年ごとの社会と文化をどのように反映していたのかということがらである。それにしても、アルマナックそのものを考察するとはどういうことなのか。何故そうするのか。先ずそれについて述べておきたい。

筆者はこの数年来、19世紀末から20世紀初頭にかけてのインドネシアで新しいタイプの都市

文化が生まれ、それが植民地社会の各地に拡散・拡大していくことに関心を寄せてきた。新しい様式の風景画、クロンチョン音楽、新しい様式の大衆演劇などがそれであり、それらは、20世紀に先がけて時代の新しい気分を伝えるとともに、インドネシアにおける文化統合を「草の根」のレベルですすめていくものとして、とりわけ興味深いものであった〔土屋 1988; 1991〕。

筆者がムラユ語のアルマナックに出会ったのも19世紀末の文化状況にかかわる史料を渉猟している過程においてであった。このことは、植民地インドネシアにおいてアルマナックが商業出版物として出まわらようになる時期が、はからずも上に述べた新しいタイプの都市文化の誕生する時期と重なり合っていたことを示している。

なかでも、これから述べるアルマナックとくにジョクジャカルタで刊行されていたブニン(Buning)社版のアルマナックが、ムラユ語の物語やシャイール(詩編)をさかんに掲載していたことはまことに興味深いことであった。それらは、ジョクジャカルタというジャワの伝統的王都がその当時にどのようにして時代の新しい空気を呼吸していたかを生き生きと伝えていた。それはまたジョクジャカルタの時代状況を伝える稀有の作品であるというだけでなく、そのテーマと語り方において、まさにその当時(19世紀末年)から植民地支配の中心都市バタヴィア(現在のジャカルタ)を主要な出版地として出現し始めたムラユ語大衆文芸に連なるものであり、それへのユニークな寄与をなすものであった。しかし、アルマナックとムラユ語の文芸作品という組み合わせが思いがけなかったためか、これらの諸作品はインドネシア文学史の上でまったく無視されてきた。そもそも当時のムラユ語の文芸作品そのものが「正統な文学史」の彼方であって長らく問題とされてこなかったという状況にあった。これらについて関心が寄せられるのはようやく近年のことにすぎない〔Pramoedya 1982; Sumardjo 1992; 押川 1986; 土屋 1987〕。

そして筆者の知る限り、アルマナックに掲載された諸作品はムラユ語の大衆文芸を論じた近年の諸研究においてもまったく言及されてこなかった。その意味でアルマナックは思わぬ盲点であったといつてよいだろう。

従って以下本稿で中心的な課題となるのはこれらの作品群である。しかし先ずはアルマナックそのものについて論じなければならない。筆者の主要な関心は、19世紀と20世紀を断絶の相において捉えることでなく、それを連続する変化のつみ重なりとして捉えようとするのであり〔土屋 1986〕、アルマナックはそれを考えるための一つの有力な手掛りとなるからである。いうまでもなく、アルマナックこそは「年が経つ」というそのこと自体をテーマとしてこれを印刷という「書き言葉」のうちに定位するからである。

以下に本稿の扱う対象と本稿の編成について具体的に述べておきたい。

本稿は、オランダ王立言語民族文化研究所(KITLV: Koninklijk Instituut voor Taal-, Land-

en Volkenkunde) 所蔵の、植民地時代にインドネシアで出版されていた各種のアルマナックのうち、とくにムラユ語版アルマナックを対象とする。

本稿はすでに述べた通り、筆者がこれまでにこころみてきたインドネシアの都市文化の成立と展開についての研究とつながる一方、将来、アルマナックを用いてより本格的な研究を行う際の予備的考察となるべきものである。とくに、後に述べる通り、三種のムラユ語版アルマナックのうち本稿で主にとり上げるのは、ジョクジャカルタブニン社版であり、これよりは発行部数がはるかに多かったと考えられるバライプスタカ版については、その刊行主体も時代状況もさらに形式内容もブニン社版のものとは大いに異なるので、後日あらためて論ずることとする。

以下本稿の構成は次の通りである。

Iでは、KITLV 所蔵のものに限ってどのようなアルマナックが植民地時代のインドネシアで刊行されていたのが概観される。なかでも、植民地政府それ自身が刊行してきたアルマナック（オランダ語版）はもっとも基本となるものであるので、その概要が示される。

次に、ムラユ語のアルマナックとしては三種がある。それぞれ、アルブレヒト (Albrecht) 版、ブニン社版、バライプスタカ (Balai Poestaka) 版と呼ぶことができる。

IIでは、これら三種のムラユ語版アルマナックのうち、ブニン社版のものを除く二つのアルマナック、すなわちアルブレヒト版とバライプスタカ版に限ってその全容を概観する。併せて又、そこにどのような時代相が反映されているのかということについていくつかの要点を述べる。

III以下では、ブニン社版のアルマナックが扱われる。先ずIIIでは、1880年から1912年にかけての編成を年ごとに概観し、それを通じてこのアルマナックの読者層、販売ネットワーク、販売政策などを考察する。さらに、このアルマナックが暦日やカレンダーを通してどのような時間の観念を導入しようとしていたのか、そのような時間観念が植民地支配のどのような局面と関連していたのかについて考究する。

IVでは、ブニン社のアルマナックに載せられたシャイールに焦点が絞られる。先にも述べたように、19世紀末年から20世紀初めにかけて毎年のようにムラユ語のシャイールが載せられていた。それらのシャイールの多くは、さまざまなテーマを扱いながらそれぞれにその時々の世相と事件のありようをうたい上げていた。それらは、このアルマナックをきわだって特徴づけるものであった。そこで、IVではそれぞれについて概観しいくつかのものについてはやや詳しく紹介し、最後にそれらが時代の状況とその変化のありようをどのように反映していたのかについて論述する。

なお、本稿で頻出するムラユ語はマレー語ないしインドネシア語と表記することも可能であるが、ここで扱うのが主として19世紀から20世紀の初めにかけての時期であることと、アルマ

ナックのタイトルが何れも「ムラユ」と記されているのでそれに従うことにする。また、綴り字は何れもそれが記された時点での綴り方に従う。従って例えば「ムラユ」は現在の綴り字によれば Melayu とすべきだが、その当時の綴り字で Melajoe と綴られる場合にはそれに従う。

I 植民地政府刊行のアルマナック

植民地時代のインドネシアではさまざまなアルマナックが刊行されていた。KITLV 所蔵のものについてその概要を述べてみよう。

1. 植民地時代のアルマナック

植民地時代にどれだけの種類のアルマナックがどれだけの期間にわたって刊行されていたのかをすべて知ることはできない。KITLV のカタログに限ってそこから窺えるのは次のようなことである。

(1) アルマナックはそのタイトルから察する限り、いくつかの種類のものが数種の言語にわたって刊行されていた。

特にキリスト教徒向けに作られたアルマナック、中国暦を中心に編集されたアルマナック、ジャワ農民のアルマナックなどのように内容の特定されたものが、通常のアルマナックのほかにも刊行されていた。これらのアルマナックの使用言語も、ムラユ語、オランダ語、ジャワ語のほかスダ語にまで及んでいて、さまざまな読者層が想定されていたことを示している。¹⁾

(2) これらのアルマナックが刊行された時期もさまざまである。次に述べる植民地政府刊行のアルマナック (Regeringsalmanakken) はすでに18世紀初めから刊行されてもっとも長期に及んでいるが、これを別にする、19世紀の後半に入って、いくつかのアルマナックが刊行され始めたらしい。

その先鞭を切ったのは、ジャワ語版アルマナックで、1854年以来刊行され、第12巻 (1865年) 以降は、当時の著名なジャワ語・ジャワ文学の研究者であった A.B. Cohen Stuart 編と銘打たれスマランの G.C.T. van Dorp 社を出版元としていた。Stuart 編という記載は1878年当

1) KITLV 所属のアルマナックのうち、これに関するアルマナックとして次のものが挙げられる。なお記載された年度は、その所蔵年を示す。

Almanak orang Masehi pada Tahoen 1881.

Almanak dengan tafel pembijtaraan Elkitab, jang toenjoek sasaharinats bagi tahoen 1891-96 & 1898-1901. Batavia.

Almanak (Ned.-Chin.) 1861-1920. Batavia. 1908.

Almanak (Soendaneesche) voor 1900, 1903.

Almanak (Takwin) hitoengan hari, boelan, tahoen orang Masehi. 1877.

Almanak Tani. 1925-1933.

Almanak Tani Djawa 1929-30.

Almanak van het Indologische Studentencorps voor 1898-99. Delft. 1898.

時には表紙から姿を消すが、van Dorp 社の刊行物としてその後も出版され、KITLV では、第52巻1905年版まで所蔵されているので、少なくとも半世紀以上にわたって、このジャワ語版アルマナックが刊行されていたことが窺えよう。²⁾

ムラユ語版アルマナックは後に述べる通り少なくとも三種の主要なものが刊行されたが、もっとも早いものは、1877年以来ジョクジャカルタのブニン社から出版された。この版は、第36巻1911年迄のものが所蔵されている。³⁾ (以下本稿で主として扱うのは、このブニン社版のアルマナックである。)

このほかに、1896年から97年にかけて、バタヴィア (現在のジャカルタ) のアルプレヒト社から別のムラユ語版アルマナックが出されている。⁴⁾ しかしこれがその後どうなったのかは定かではない。同じくムラユ語のアルマナックで特にキリスト教徒向けに編纂されたと考えられるものが、1881年、さらに1891年から1901年にかけて刊行されている。

こうしてみると、アルマナックはつとに植民地政府からオランダ語版で刊行されていたこと、それが、19世紀後半になって先ずジャワ語のものが出され、ひき続いて1870年代後半からはムラユ語のものが出され始めたことがうかがえる。また、ジャワ語版、ムラユ語版ともにバタヴィア、スマラン、ジョクジャカルタなどに所在する民間の出版社から刊行されたことも知られる。

さてⅡ以下でムラユ語のアルマナックについて詳論するのに先立って、植民地政府刊行のアルマナックの概要をみておきたい。これが唯一公式のアルマナックであるとともに、1942年日本軍の侵攻によって植民地政府が崩壊するまで連綿として刊行されてきたものだからである。

2. 政府刊行アルマナック

現在『政府刊行アルマナック』(Regeringsalmanakken)として分類されているアルマナックのうち、KITLVに所蔵されているもっとも初期のものは、1735年版である。以後1736年から45年にかけて、47年から51年にかけて、1795年から1802年にかけての各年は散逸しているが、それ以外の各年については、1942年に至るまで所蔵されている。これらが植民地史、植民地政策史、植民地統治機構と人事等について基本的な資料となることはいうまでもないが、ここでは「アルマナック」という点に視点を限って概観しておこう。

2) 標題等は次の通りである。

Almanak (Javaansche) voor 1865-71, 78-79, 81-85, 87-89, 1891-1901, 1903-05 (12-18), 25-26, 28-32, 34-36, 38-48, 50-52, tahoen) onder redactie van A.B. Cohen Stuart. Semarang, van Dorp.

3) 標題等は次の通りである。

Almanak (Maleische) 4-7 Jaargang (1880-83) onder redactie van F.L. Winter 13-23 (1889-99) en 25-27 (1901-03) samen gesteld door Tan Tjiook San Yogyakarta (1879-1902), 28-36 (1904-12). Yogyakarta, Buning.

4) 標題等は次の通りである。

Almanak Melajoe, akan goena tahoen 1896-97 tahoen ke 1-2. Batavia-Solo, Albrecht.

(1) 先に述べた通りこれらは現在「政府刊行アルマナック」として一括されているが、実は、アルマナックの語が最初に用いられるとともにその内容に暦にかかわる情報が盛り込まれるのは、1807年のことである。それ以前は、植民地政府に関係する人々の「人名録」であり表紙にも「名鑑」(Naamregister)とだけ記されていた。例えば所蔵中もっとも古い1735年版は10×5 cm 程度の小型版でページ数も94ページ、そのなかにオランダ東インド会社及び西インド会社関係の人名が記載されている。

このスタイルは18世紀中を通して一貫しており、版のサイズが拡大したりページ数が増えたりはしても、会社設立以来の総督名、高級将校と高級役員、各職域の担当者名を記載していくことは不変である。周知の通りオランダ東インド会社は1799年に解散し、19世紀以降植民地はオランダ政府の直接支配下に置かれることになるが、「人名録」(名称は18世紀以降 Naamboek と変更)というタイトルもその内容も継承された。

(2) ところが1807年以来アルマナックとして刊行され内容もそれにともなって変化するようになった。「イエスキリスト生誕1807年のグレゴリウス方式に基づいて新しく改良されたアルマナック」という長いタイトルが表紙に記された。そしてアルマナックと改称したことにもなって次の事項が新たに記載されるようになった。それらは、西暦年、キリスト教の祝日、イスラム教の12カ月の名称、イスラム教の祝日、星座表、12カ月の暦、日の出・日の入・月のみちかけ表、バタヴィア及びその周辺の定期市、重量等の単位表、船舶運行予定(到着・出発)表、香料の値段表である。これに加えて、従来通り人名録が載せられたから、この年以来政府刊行アルマナックはアルマナックと人名録という二重の機能を併せもつようになった。

(3) ヨーロッパのナポレオン戦争の余波が植民地にも及んだ結果、ジャワは周知の通り、1811年から16年にかけて英国の支配下に入りラッフルズ(T.S. Raffles, 1781~1826)の下で統治されることになるが、その期間も引き続いて政府刊行アルマナックは出版された。1816年版をみると、英語で「ジャワ年鑑及びアルマナック1816年版」と表紙に記され、内容も英語で記載されている。その内容は従来通り暦と政府高官、各職域官吏の名簿、船舶運航予定、度量衡単位換算表、商品情報等を主とするが、新たに次のことがらが記載されている。すなわち、港湾倉庫に関わる条令、これにともなう郵送料一覧、著名なクラブ(Society)の編成、ヨーロッパ人居住者(ヨーロッパ人及びその子孫)の職業と居住地、同じくヨーロッパ人居住者の結婚、誕生、死亡者名の一覧である。ここに新たに付け加えられた事項はそれ以降オランダが植民地に復帰したのちも引き継がれるとともに、アルマナックの重要な記載事項となっていく。

ちなみに、この年約14,000名が居住者として記載され、その職業は貿易商、仕立商、床屋、靴屋、宝石商、書店主、絨毯商など、書記や役人に限らず各分野にわたっていた。また、この年にはこのアルマナックの定期購読者一覧が記載されている。それによると総計163名で全員がヨーロッパ名、その居住地はバタヴィアをはじめ、スマラン、スラバヤ、ボゴール、レンバ

ン、ジョアナなどジャワ島の各地に及んでいた。

(4) 上に述べたことは、ラッフルズ統治の時代にそれ以前のアルマナックの内容が継承されただけでなく、新たにいくつかの情報が掲載されそれがその後のアルマナックのスタイルを作り上げたことを示している。特にヨーロッパ人居住者リスト及び結婚、誕生、死亡などの動静は1865年まで続き、その人数の増加と共に多くのページがそれについやされるようになった(例えば、1863年には約270ページ、1864年には約280ページが居住者とその動静にかかわる情報にあてられていた)。

(5) ラッフルズ統治以降のアルマナックについて生じた主要な変化は次のようなものであった。

アルマナックそのもののタイトルは1817年以降、オランダ語で「オランダ領東インドアルマナック」と記され、1824年以降は「オランダ領東インドアルマナック及び人名鑑」と記され、さらに、1865年以降は「オランダ領東インド政府刊行アルマナック」と現在ふつうに用いられている呼称へと落ち着いた。名称の変化は何回かあり時とともに内容にも変化がみられたが、アルマナックと人名録を併せもつという基本的性格は継承されていった。

1834年には、キリスト教、イスラム教の月の呼称、祝日に加えて、中国月の呼称と中国の祝日が記載されるようになった。

1843年には、オランダ植民地の発展に関する簡単な年表が付されるようになり、植民地の原住民首長の名が記載されるようになった。

1854年はジャワ語版アルマナックが創刊された年であるが、この年以降政府刊行アルマナック中にも、ジャワ暦についての大変詳しい紹介と解説が付されるようになった(これだけで20ページもが割かれていた)。

1856年にはさらにイスラエル暦とその祝日一覧がつけ加えられた。つまりこの年、キリスト教(西暦)、イスラム暦、ジャワ暦、中国暦、ユダヤ暦の5種のカレンダーがアルマナックに並記されることになった。

1858年には、暦の記載部分(全部で75ページ)、人名録部分(全部で570ページ、この内政庁関係名録343ページ、残りは居住者リスト等)に加えて、66ページの補遺(bijlagen)が載せられた。補遺では当時施行されていた植民地基本法(1848年制定、以後部分的に修正)の全文が記載された。この補遺部分もこれ以後次第に分量を増やしながらアルマナックの必須部分をなしていった。

1860年版以来、1860年代を通じて、Cohen Stuart(ジャワ語アルマナックの編者)が、ジャワ暦とイスラム暦について解説を付している。

1865年以来植民地の人口統計が記載されるようになった。ヨーロッパ人、原住民(Inlander)、中国人、アラブ人、その他の東洋外国人という5つのカテゴリーが設けられ、そ

それぞれの行政州ごとの人口数が記された。このことと軌を一にしてそれまでの居住者名簿、結婚・出生・死亡者名簿が姿を消し、すべて統計で処理されるようになった。この年、植民地に居留するヨーロッパ人は33,194名であったと記録されており、それだけの数の人名を逐一記載する手間とスペースがさすがに不足していたと考えられる。しかしそれにはまた、ヨーロッパ人コミュニティー自身がお互いの名前を名簿上で確認し合う状況から、もっと分節的な単位へと変らざるをえない時代が到来したことを、併せて示しているであろう。この年以來、アルマナックに載る人名は政府各官庁の公務員、小数の原住民首長に限定されることになった。

1881年にはアルマナックは2分冊となった。補遺部分が次第に量を増してきたのに対応して、その部分を分冊としたからである。2分冊方式は82年以降も引き継がれたが、1冊目を人口統計、行政区一覧、補遺（新しい条令、法令の記載）とし、2冊目を本来のアルマナックと人名録に充てることになり、以後このスタイルが引き継がれていった。20世紀に入る頃からアルマナックは益々分厚いものとなり、第2分冊（暦と人名鑑）だけでしばしば1,000ページを越えるほどになった。そしてこのような体裁を保ちながら、この政府刊行アルマナックは植民地支配の尽きる最後の年まで、もっとも重要な政府刊行物の一つとして刊行され続けた。

それに対して、ムラユ語のアルマナックはこれよりもはるかに遅れ、また民間の出版社から出された。Ⅱでは、先ずその概要について述べることにする。

Ⅱ アルブレヒト版アルマナック及びバライプスタカ版アルマナック

上にみた通り、植民地政府が200年にわたってアルマナックを刊行してきたのに対し、19世紀半ば以降さまざまなアルマナックが民間の出版社からも出されてきた。このうち、『アルマナック・ムラユ』というタイトルの下で刊行され、かつ KITLV に所蔵されているアルマナックとしては、1877年以來のジョクジャカルタのブニン社出版のもの、1896年以來刊行されたバタヴィアのアルブレヒト社版のものが19世紀中に出され、20世紀初頭にかけて刊行されたのに続き、1919年以來植民地政府文化局がスポンサーであるバライプスタカから「フォルクスアルマナック・ムラユ（ムラユ語版民衆アルマナック）」（*Volksalmanak Melajoe*）が出版されるようになった。このバライプスタカ版はそれ以降1940年版までひき続いて出され、またほぼ同時期、ジャワ語版とスンダ語版も出版された。つまりバライプスタカは1919年以來、ムラユ語、ジャワ語、スンダ語三種のアルマナックを、さらに1921年版からはこれにマドゥラ語版を加えて毎年出版してきたのである。⁵⁾

5) KITLV に所蔵されているものは次のとおりである。

Volksalmanak Melajoe. (1919-1933, 1936-1940) Batavia, Balai Poestaka. (AMBP と略称される場合があり)

Volksalmanak Djawi. (1919, 1921-26, 1928-33, 1935-39) Batavia, Balai Poestaka.

Volksalmanak Soenda. (1919, 1921-25, 1927-33, 1935-39) Batavia, Balai Poestaka.

以下、上に述べた三つのムラユ語アルマナックつまりブニン社版、アルブレヒト版、バライプスタカ版の概要をみておこう。このうち、ブニン社版のアルマナックについてはⅢ以下で詳しく触れるので、ここでは、特にアルブレヒト版とバライプスタカ版について述べておきたい。

1. アルブレヒト版のアルマナック・ムラユ

バタヴィアのアルブレヒト社から1896年に刊行されたアルマナック (Almanak Melajoe) のうち KITLV に所蔵されているのは1896年と97年の二年分にしかすぎないが、これはアルマナック・プリヤイ (Almanak Priaji) とともに称されてひき続き刊行されていたと考えられる。それはⅠで述べた植民地政府刊行アルマナックが1898年版以降、その当時刊行されていた種々のアルマナックの名称と出版社の一覧を記載するようになり、その中に、ブニン社のムラユ語アルマナック、van Dorp 社 (スマラン) のジャワ語アルマナックなどと並んで、*Almanak Priaji (Maleisch)*, Albrecht & Co (Batavia), つまり「バタヴィアアルブレヒト社版プリヤイ・アルマナック (ムラユ語)」と記されているからである。そしてこの記載欄をみていくと、このアルマナックは1915年までひき続き刊行されていたことが知られる。しかし、1916年以降はその記載欄そのものがなくなるので、それ以後の状況はさし当り不分明であるがほぼその頃に刊行を停止したのではないかと考えられる。ちなみにまた、ブニン社版のアルマナックは1910年以降記載されていないが、アルマナックそのものはその後も刊行され続けたようである。⁶⁾

アルブレヒト版の編集者は F. Wiggers という人物であった。F. Wiggers 自身はかねてからバタヴィアでジャーナリストとして活動し、『プンブリタ・バタヴィ』 (Pemberita Betawi) などの編集に携わっていた。彼はまた親中国派としても知られていた。『ニヤイ・イサ』 (1901年)、『奴隷から王様へ』 (1898年) (翻訳)、『ジャワ銀行襲われる』 (刊行年不明) などのムラユ語の作品を残したことでも知られている [Pramoedya 1982: 17-20]。

このアルブレヒト版が当時どの程度読まれていたのか、またどのような読者層がこれを購入したのかは定かではない。ただ、1896年、97年版にさまざまな書状の文例、とくに、役所ないし会社勤務の人々に必要となるかも知れない文書の文例がいくつか載せられていることから、当時のインドネシア人下級官吏や書記などを対象としてこのアルマナックが編まれたと考えることができるかも知れない。

6) 筆者は、ブニン社版ムラユ語アルマナックの1925年版を目にする機会をえた。表紙に第49年度と記されており、このアルマナックがひき続き刊行されていたことが知られる。その体裁は1912年当時のものと基本的に同一で、「政府刊行のアルマナックに準じて作成される」と明記されているほか、後に述べるタン・チュック・サン時代のアルマナックにおいて精彩を放っていたシャイルはまったく姿を消している。(なおこのアルマナックは五十嵐忠孝氏の好意により目にする事ができた。記して謝意を表す次第である。)

そうすると、このアルマナックが前述のように「プリヤイ・アルマナック」とも称されていたとすれば、ここでのプリヤイは「ジャワの貴族」ということよりも「植民地政府の原住民官僚」というニュアンスが強いであろう。それは19世紀末頃にプリヤイという語がその意味を変えはじめた、少なくともそこに新しい意味がつけ加えられるようになったことを示す、ごく初期の例であるといえよう。⁷⁾

ところでここに挙げられた文書、文例・文案は以下のようなものを含んでいた。民法上の訴状の文例（あるイスラム教徒キダンなる人物が、商品の代金を未納にしていることを訴え出る訴状、借金未返済者の拘留を要請する訴状、差し押さえを要請する訴状）、昇進を願い出る書状の文例（すでに15年間書記として働き、何の失敗もおかさなかった、ついでには昇進をお願いしたい云々）、病気による休暇願いの文例（医師の診断書つきで、2カ月間東ジャワの高原の保養地トサリでの休暇を届け出る）及び休暇延長願いの文例、オランダ領東インドでの滞在許可を願い出る文例（このケースはあるアラブ人で税金をもっと払いますからぜひ滞在許可を下賜して下さいというもの）、逆に税金の軽減を願い出る文例などであった。

そこには、公文書を扱うことを必要とする制度と法令が次第に出来上りつつあったこと、それに呼応して公文書になじもうとする人々が確実に増え始めていたことが明示されている。それはまた、公文書とお上が結びつき、これを願い出る者は「しもべ」として振る舞うことが次第に常態化していくことでもあった。例えば訴状の冒頭はつねに「この卑しきしもべ何某は……」（“Hamba jang amat laif, …”）で書き始められ、一つの常套句（クリシェ）として確立していった。そこには、19世紀末の植民地官僚の確立が、たんに法の支配の浸透や郵便・鉄道等のインフラストラクチャーの発展だけでなく、日常生活のさまざまな局面で公文書が重要な意味をもつとともに、そこに「お上としもべ」の間の跪拝の構造があわせて進行していく時代であったことが、ゆくりなくも示されている。

このアルマナックが当時の状況を反映させているもう一つのことからは、書籍の出版広告である。アルブレヒト版の巻末には自社の出版広告が載せられている。正式には Albrecht & Rusche, Batavia-Solo とあり、ソロ（スラカルタ）にある Rusche 社と共同出版されたものである。1896年には全部で132点の出版物の広告があり、すべてムラユ語の書物である。シンドバット、アラディン（絵入り）、千夜一夜（絵入り）、サンペク・エンタイ等の物語のムラユ語訳（翻案）のほか、植民地政府の法律・法令集（オランダ語）のムラユ語訳も少なからずみられる。このうち法律・法令集の翻訳には、オランダ領東インド統治基本法、刑法、商法、警察法 (hukum polisie)、宗教法、中国人の相続等が含まれている。

7) 周知の通りインドネシア人の編集になる最初の新聞は1907年ティルトアディスルヨによって創刊されたが、それは *Medan Prijaji* と称した。ここでもプリヤイは、貴族階層と限定しているだけでなく、植民地政府の原住民官僚を含むより広い概念であると考えてよいだろう。

1897年のアルマナックにも数多くの本の広告が載せられている。前年同様の書物に加えて、料理方法を紹介した本や、さまざまな手紙の用法を集めた文例集の広告がみられる。

このほか両年にわたって裏表紙には次の二つの広告が出されている。一つは、先に述べた『プンブリタ・バタヴィ』(Pemberita Betawi)という新聞の広告で購読料は年10フローリンと記されている。もうひとつは Tambaga Kuning 製の氏名印である。これらは二つともいうまでもなくアルブレヒト社から発売されている。

これらの広告は物語をはじめとする読物と手紙の文例集のようなマニュアル物とに大別される。とくに、先に述べたさまざまな訴状の紹介を含めて、このアルマナックによって生活の智慧・マニュアルを得よう(与えよう)という傾向が認められるのである。

2. バライプスタカ版のアルマナック・ムラユ

バライプスタカは植民地政府が1917年に設立した機関で、図書の選定、出版、回覧などを通じて、原住民に良質な図書を供給することを目的としていた。そのオランダ語名はフォルクスレクテュール Volkslectuur で民衆図書館の意である。ここにいう「良質の図書」とは植民地政府から見て健全な図書ということで、植民地社会の秩序を乱すとみなされた書物は出版を拒否されたり書き直しを命ぜられたりしてつねに政府の検閲下にあったとされている。

バライプスタカからは、娯楽的な読物や農業、畜産などの知識と技術をひろめる啓蒙書が刊行されたほか、インドネシア各地の民話や年代記が編纂されたり、西洋の名作が翻訳されたり、その出版の分野は多岐にわたり、その総出版点数も植民地時代を通じて約2,000点に及んでいた。そのような出版物の一つとして、1919年版以来、ムラユ語、ジャワ語、スンダ語三種のアルマナックが刊行されたのである。このうち、ムラユ語版に限って以下に概観してみよう。アルマナックの個々の内容にわたることについては後日別に考察することとし、ここではアルマナックのスタイルやその変遷、読者層等について述べるだけにとどめたい。

(1) 刊行当時の状況

ムラユ語版アルマナックは正式のタイトルを Volksalmanak Melajoe 「ムラユ語民衆アルマナック」という。Volks は「民衆用の」という意味と共に、Volkslectuur の Volks が重ね合わされていると考えられる。

その初年度版(1919年)は、前文で次のように刊行趣旨を述べている。「ここに Volksalmanak つまり『民衆アルマナック(Almanak rajjat)』を刊行することになった。これは、オランダ領東インドのあらゆる人々、プリアイにも農民にもまた男にも女にも役立つことを目指す。ムラユ語だけでなくジャワ語とスンダ語のアルマナックも併せて刊行する。オランダでは200年を越えてひき続き刊行されているアルマナックがあるが、このアルマナックも長い寿命を保つようにと期待する。」

初年度の総ページ数は240ページ、その後年によって増減はあるがほぼ230ページから320ページ位の分量で推移している。なお初年度の定価は0.6フローリンであった。

最初のページにオランダ女王ウィルヘルミナの写真が毎号飾られた。その後につづくのは年によって異動があったが、1919年についてみると大略次のことがらが掲載されていた。

オランダの王家と王族の誕生日。祝日。暦年（西暦年、イスラム年、ジャワ年等による暦年の表示）。1919年のカレンダー。

ここまでの狭義のアルマナックに当たる部分でこの部分はその後もほぼ一貫して同様のスタイルで掲載された。これらはページ数にしても全体の1割程度、残りは実にさまざまなことから成り立っていた。その目次をすべて紹介することはできないので、主なものまたユニークと思われるものに限ってその項目を書き抜いておこう。

植民地人口統計、中央政府の機構、度量衡と換算表、郵便規則、鉄道規則、マラリヤと治療薬、眼病、料理の手引き、家畜の飼育、茶の母木伐採禁止事項、ヤシ樹の生長、コーヒー樹の手入れ、馬屋の手入れ、開田、質入れの規則、公務員規定、村長の義務、アルコール飲用、髪の手入れ、肌の手入れ、子供の躾、学校（8の公立学校、24の各種技能養成学校の紹介）。その合い間に、短詩や短編の歴史物語やことわざなどが挿入されている。

この初年度版はよく売れたらしく、1920年版のまえがき中に、初年度版はたちまち売れ切れたので再版をしたと記されている。また写真を多用したので今号は0.75フローリンに値上げしたとも記されている。

第2年度分の目次は暦を中心とする冒頭部分だけが前年度と同じで、それ以下は、病気・怪我の緊急治療法、婦人生活百科、農作業案内など構成・内容とも全く異なる記事を載せている。ただし、前年度と同じく、生活に役立つ知識や技術の手本を与えようとする編集方針は共通しており、このような性格はそれ以降もつらぬかれることになる。

(2) 読者数

それではバライプスタカ版のアルマナック・ムラユはどのような読者層によってどの程度読まれていたのだろうか。それを推察する手掛りがいくつか示されている。

先ず発行部数であるが、初年度第2年度ともたちまち売り切れて増刷がくり返され1920年代を通じて急上昇していった。1929年の発表によればそれは次の通りであった。1919年2万9千部、1925年4万8千部、1927年5万8千部、1928年8万5千部、1929年約10万部。

これは驚くべき売り上げである。それについて1924年版の序文中には、「オランダ領東インドの当時の人口は約4,000万人そのうち23%は字の読み書きができ、読み書きできるこれらの人々の約10%はわがアルマナックを読んでいる」と誇らし気に記されている。実際に計算してみるとここにいう10%とは約92万人になる。仮にアルマナック1冊を10人位が目を通すとすれば（その想定はインドネシアの読書状況を考えると比較的現実に近いであろう）、1929年当時

の発行部数においては100万近い人々がこれらのアルマナックに目を通していた可能性があるろう。まことに目を見張るようなベストセラー、そして植民地政府の主導する文化政策として大成功であったということになるだろう。⁸⁾

さてこのような成功の理由はいくつもあったであろう。第一は内容が生活に役に立つものであったことが挙げられる。政府条令の紹介をはじめ、各種の生活情報（鉄道運賃、郵便料金、学校情報、家事、健康、園芸、畜産、農作業等）がもられ、その合い間に軽い読み物と詩編が織り込まれているという体裁は、読んで利益がある、換言すれば「知は力なり」という命題を生活レベルで実現させるものであった。第二はバライプスタカという公立の出版社のもつ力の大きさによるだろう。当時の群小の出版機関に比して資金力もスタッフも全国ネットワークも宣伝力も、すべてにわたって抜きん出ている。中でもユニークであったのは「タマンプスタカ」(Taman-Pustaka) という移動図書館を設置したことである。これは車にバライプスタカ出版の書籍を積んで各地を定期的に巡回し、低額のレンタル料をとって貸し出すシステムである。このようにして貸し出された書籍数を表1に掲げる。相当な数の書物が借り出され読まれていたこと、また、ムラユ語、ジャワ語、スンダ語のそれぞれの需要の相対的な関係とその推

表1 バライプスタカ版図書の貸し出し数（移動巡回方式）

年度 言語別	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920
ムラユ語	10,132	14,809	18,533	25,297	29,063	100,652	174,668
ジャワ語	166,511	156,107	226,045	294,810	281,470	494,787	588,139
スンダ語	29,571	45,546	38,148	86,593	92,428	111,916	165,839
マドゥラ語	—	—	—	—	4,736	6,569	13,903
合計	206,214	216,462	282,726	406,700	407,697	713,914	942,549

出典：Volksalmanak Melajoe [1922: 254]

- 8) ただしここで留意すべきことがある。それはここに述べられている読者層がバライプスタカから出版されたアルマナックのうちにはたしてムラユ語版に限られていることなのか、それともムラユ語版のみならず、ジャワ語版スンダ語版の読者を含めたその総数なのかという点である。それを確認するためにはムラユ語版以外のアルマナックにも目を通さなければならないが、本稿を執筆した時点ではそのすべてについてはなお未見である。しかし1923年版、1925年版などは、各言語のアルマナックを合本して販売されていた形跡がある。1923年版は、スンダ語版、ムラユ語版、ジャワ語版に加えてマドゥラ語版のアルマナックも合本されている。(1925年版はマドゥラ語版を除く三言語のアルマナックが合本されている。)

さてこれらのアルマナックやいくつかの年度のスンダ語版アルマナックを見る限り、掲載された広告、カレンダー、政府要人名鑑などは各版共通であるが、読み物欄（シャイール、物語など）はそれぞれ独自のものが掲載されている。そのうち、後に述べる「なぞなぞ」の懸賞は各版共通で募集広告が出されている。したがって、ここで挙げられている読者層は、ムラユ語版に限らず各言語のアルマナックすべての読者層であると判断してよいだろう。その場合には、その内ムラユ語版、スンダ語版、ジャワ語版などのそれぞれの読者層がどのくらいであったのかを特定しなければならないだろう。それを特定することが、可能であるか否かということを含めて、これについては今後の課題とした。

従って以下本稿に述べるバライプスタカ刊行のアルマナックの読者層とは、ムラユ語版、スンダ語版、ジャワ語版さらにマドゥラ語版のものを含めての数であるとして論をすすめていきたい。なお以上については五十嵐忠孝氏から貴重な資料をみせて頂いた。

移がみてとれる。このようなシステムを通してアルマナックも各地に浸透しそれがまた新たな需要を喚起して購買層を増やしていったと考えられる。

第三のそしてもっとも直接的な理由はアルマナックの読者に賞品付きでクイズを当てさせたことである。クイズは「なぞなぞ遊び」の形式でたとえば1925年の問題は「私を見なさい、するとあなた自身の顔がみえます。私は誰でしょう」、それに対して読者は「鏡」という答えをアルマナック中の指定ページに住所・氏名とともに書き込んで返送するものとされた。

このクイズの賞品は大変よいものであった。たとえば、1923年は1等自転車、2等金時計、3等金メッキペン（2名）、4等辞書、5等目覚まし時計、6等『ジャワ史』の本（8名）であり、1925年には、1等は何とフォード車（この価格は1,825フローリンと記載されている）以下2等ダイヤモンド、3等自転車、4等金の腕輪、5等ミシン、6等金時計、7等時計、8等手提げカバン（3名）、9等目覚まし時計（5名）、10等ボールペン（6名）、11等事務用カバン（5名）、12等絵入り地図（6名）、13等銀のインク差し、14等『サリ・ヒンディア』（書籍）（12名）であった。

問題のやさしさに加えてこのような景品が射幸心を煽ったことは想像に難くない。1923年には正解数6,428名、1925年には回答者25,644名、正解者20,332名と報告されている。先に1925年の発行部数が4万8千部とされていたことを考えると、この応募者数は驚異的な比率である（購買者の53%がクイズに回答したことになる）。また、その前年には応募者総数が余りに多かったので賞品の獲得者を急遽40名から50名に増やしたとも記されその熱狂振りがうかがえる。

ところが、1926年を以ってクイズは中止された。「クイズの賞品だけが目当てでアルマナックを購入する人が余りに多い」という教育的理由からであった。

だが刊行当初の懸賞というところみはこのアルマナックに対する読者の関心と需要を高めるという点で直接の要因を作ったのであり、そのことをはずみとして前にも見た通りアルマナックの売上部数はその後も伸び続けたのである。

1930年代にこのアルマナックがどの程度売られていたのかは定かではない。ただ、理由は述べられていないが、1935年から再び「なぞなぞ遊び」が掲載されている。今度はクロスワードパズルで、賞金付きとされた。1等1,000フローリンから7等10フローリンまで合計3,500フローリンの賞金が懸けられていた。⁹⁾ ところでそれに対する回答者は1935年は約4万（内正答は約3万2千）、また1936年は約7万（内正答は約4万8千）と記録されている。仮に回答者

9) 1928年当時の通貨換算の比率がアルマナックに載せられているが、それによれば、当時1ドルが2.5フローリン、また1円は1.17フローリンであった。従って3,500フローリンといえは約3,000円。ちなみに1927年当時のわが国では、国産目覚まし時計が2円15銭、白米10kgが2円30銭、国産乗用車で1,650円程度であったから、バライプスタカの賞金は相当大きかったと考えることができる〔週間朝日1988〕。

の2倍の人々がアルマナックを購入していたとすれば、1935年当時で約8万、翌年は約14万に急上昇したことになるだろう。これらから窺えることは、1930年代前半は10万部未満で横ばいし、後半に入って、再び懸賞をはずみとして発売部数が伸び、10数万部に達していたのではないかということである。ちなみに、ムラユ語版自身の価格は1928年にそれまでの0.8フローリンから0.64フローリンに値下げされて以来、1940年迄一定であった。大変廉価であったといえる。政府がスポンサーであったこと、発売部数が多かったことに加えて、大量の広告が掲載され広告収入がもたらされたことがその理由であろう。

広告欄は1922年以来設けられ、年ごとに数を増していった。例えば1929年当時の版をみると、広告された件数は48件、広告欄ページ数は56ページに及びアルマナック全体の6分の1近く占めている。広告の内容もさまざまで、それぞれの時代にどのような賞品がさかんに宣伝されていたかということの一端をここから知ることができるが、それはさし当たり本稿の範囲外である。

(3) 読者層

それでは次にアルマナック・ムラユの読者層はどのような人々であったのだろうか。以下は上述の読者数の場合と同じく、ムラユ語版だけに限定できず、スンダ語版、ジャワ語版さらにマドゥラ語版のものを含めて読者層ということになるが、これについてはさし当たり次のように推察するしかない。

推察のわずかな手掛りは、懸賞当選者の発表欄でそこには氏名のほか住所と職業が略記されているからである。目下筆者の手許にあるのは、1923年、1924年、1926年、1936年から1940年までの各年に掲載された当選者のみである。読者層は時代によっても変化するだろうし、地域ごとに読者層が異なるということもあろう。しかしさし当たりそれらを考慮せず、ここにあげられた総計255名の人々について、その居住地域と職業を分類してみると次のような結果が得られる。

[居住地域]

スマトラ	58 (内訳 アチェ(6) 北スマトラ・メダン(12) 西スマトラ(11) リアウ諸島(3) それ以外のスマトラ諸地域(26))
ジャワ	112 (バタヴィア(12) 西ジャワ・バンドン(37) 中ジャワ・ジョクジャカルタ・スラカルタ(40) 東ジャワ(23))
カリマンタン	5 (バンジャルマシム ポンティアナックなど)
スラウェシ	5 (マカッサル メナドなど)
東インドネシア	4 (スンバワ アンボン タナ・メラ)

これらの合計が先の255名と比べて大幅に不足しているのは居住地を記していないもの、また、居住地が分類不能のものを含んでいるからである。先にも述べた通り、この分布をもって全体の読者層の地域分布に重ね合わせることは無理がある。ただ次のような傾向をある程度うかがうことはできよう。

①読者層は植民地の全域にわたってまんべんなく広がっていた。それはスマトラ西北端のアチェからイリアンのタナ・メラにまで及んでいた。それはバライプスタカのネットワークの広がりを示すとともに、郵便制度（郵便物の集配と輸送、送金）が全域にわたって円滑に作動していたことをうかがわせる。

②このうちスマトラ各地の読者は主としてムラユ語版を読み、ジャワ島中東部の読者はジャワ語版、ジャワ島西部の読者はスンダ語版の主たる読者層であったと想定すれば、ジャワ語版の読者層が断然多かったということになる。

③上に述べたことを裏打ちするように、アルマナック編集部は、各地の読者がこれを求めていることを再三誇らかに言明している。すでに1923年版序文中に、フォルクスアルマナックが「サバンからメラウケまで」広く知られているだけでなくオランダ領東インド以外からも注文がきていると記され翌24年版には同じことを「サバンからメラウケまでクタイからクパンまで」を読者とする方針がうたわれている。つまり、植民地領土の全域、スマトラのサバン（最西端）からイリアンのメラウケ（最東端）まで、カリマンタンのクタイ（最北端）からティムール島のクパン（最南端）まで、すべてをおおうということである。

④このことは1926年になると別の、しかし注目すべき言葉で表現されるようになる。その年の序文には「（このアルマナックが）インドネシアの住民によってますます好まれるようになってきている」[*Volksalmanak Melajoe (AMBP)* 1926: 1] というように「オランダ領東インド Hindia Belanda」でなく「インドネシア」という語が用いられているのである。同趣旨のことは1928年版序文にさらに明確に次のように述べられている。これはアルマナック刊行の趣旨をあらためて再確認したものである。

「フォルクスアルマナックは、インドネシアの全ての民族 (segala bangsa) にとって心臓に当たるものであるが、バライプスタカはたんにそれだけに満足しているのではない。さらに望むべきことは、すべてのインドネシア人 (semua orang Indonesia) がますます数多くのフォルクスアルマナックを読み、ひとりひとりがこれを知るようになることである」[*Volksalmanak Melajoe (AMBP)* 1928: 1]。くり返すまでもなく、ここでも「原住民」(bumi putra) という従来のそしてオフィシャルな呼称に代えて、インドネシアという語が用いられていることになる。

次に当選者として掲載された人々のうちその職業を記載されたものについて、分類をしてみると次のような結果がえられる。

〔職業別分類〕

生徒・学生	30 (中学生 高校生 師範学校生徒 その他の専門学校生徒等)
教師	44
校長・視学官	6
書記層	23 (各職域において書記 秘書 司書 会計係と記載されているもの)
政庁の役人	13 (各省庁を職業として記してあるもの 軍人 警官 ジャクジャカル タの王宮付き役人を含む)
村落レベルの役人・村長	18
公営質屋勤務	3
その他の役人	8 (電話局 電報局の勤務 港湾主任等)
年金生活者	1
会社員	4
企業主 農園主	3
商店主	4
商人	7 (本屋 衣服商 バザール商人)
その他の専門職	8 (運転手 自転車修理 ラボラトリウム 建築・設計技術者)
農民	3
主婦	1
無職	1

(なお、中国名を持つ者10名がこの中に含まれている。)

これから、読者層全体の性格を推察することはさらにむづかしいが、次のような傾向がうかがえるかもしれない。

①学校の教師、校長、学生生徒など教育関係者が全体の半ばに達している(上表に従えば、176人中80名がこれに該当する)。

②これにひき続いて教育職以外の公務員(中央・政府・村落レベルを含める)が多数を占める(上表では書記層から年金生活者までの66名がこれに当たる)。つまり、日常的に「書き言葉」(公文書、教科書、筆記、ノート等)にふれている人々、換言すれば公文書を扱うことを職業にする人々ないしその予備軍(学生生徒)がアルマナック読者層の大半を占めていることになる(上表に従って単純に考えれば176人中の144人、つまり82%がこれに当たる)。

③しかし、数は多くないものの読者層はさらに広くさまざまな人々を含んでいる。商店主(その多くは中国名を持つ人々)、運転手、商人などの個人業主がそれである。

(4) アルマナックの性格と機能

このようにして推察された読者層は、それでは何故かくも熱心にアルマナックを手にしたのだろうか。値段の安さや懸賞金付きであったこと、さらにさまざまな読者投書欄を設けていたなどが考えられよう。とくに投書欄についてみると、アルマナック編集部は当初から、投稿とくに写真の投稿をさかんに募っていた。これに対して多くの反応があり、また読者投稿の記事と写真が紙面を飾ることもしばしばあった。このような、読者と出版社との交流がアルマナックへの需要を高めていたことは想像にかたくない。

しかしより重要な理由は次のところにあったといえよう。それは一言でいえば、このアルマナックが、もはや本来のアルマナック（暦）としての機能や年報という機能よりも、当時の植民地社会において生活上役に立ちかつ公的に認められた知識を提供するという機能を果たしていたということである。

このように述べるためにはアルマナックの内容に触れてみなければならないだろう。それを逐一することは別の機会に譲るとして、少なくとも目次及びいくつかの掲載記事から窺えるのは、次のような特徴である。

何よりも先ず顕著なことはすでに再三述べてきたように、このアルマナックが生活上のマニュアル（手引き）としての性格を強く示していることである。それは、個人個人が生きていく上での主要な第一の関心を「日々の安穏な生活」を維持しさらには「よりよい生活」を実現することに向けているところで成立する。出産、育児、病気や怪我の治療、料理法、子弟の教育、衣服の裁断、家事、その他実に細部にまでわたる生活上の知恵（例えば1924年版の「家庭生活の必要」*Keperluan rumah tangga* の欄には、ランプの光を明るくする方法、ヤシ油の保管方法、白アリ駆除、玉子を落として割った時の処理、アイロンのかけ方、長く使わなかった布が黄ばんだ場合の手当て、ボールペンの保存、靴の手入れ、銀細工の手入れ、サビの取り方、等々が載せられている [*Volksalmanak Melajoe (AMBP)* 1924: III～IV]) についての記述がアルマナックの中心をなしている。それは厳密にプライバシーの空間であってそれをこちよく維持するための手引きが示されている。そこでは、「日常生活の必要」(*Keperluan sehari-hari*) という言葉がキーワードとして繰り返し用いられているのである。

次に、毎号多くのページを飾りしかも年ごとにその量を増やしていく広告欄が、このプライバシーの日常生活をより快適にするものとして展示されている。

このような生活上のマニュアルの延長として、社会生活上の知識が提供される。銀行、公営質屋、鉄道運賃表（旅客、貨物双方）、郵便に関するさまざまな情報に加えて、度量衡、通貨の交換比率などの一覧が表示される。これらもほとんど毎号のアルマナックに掲載されている。そこでは、値段表 (*tarif*) と計測単位 (*ukuran*) とが、繰り返し用いられるキーワードである。

やや図式的に言えば、このような日常生活、その延長としての社会生活のその外側にこれを取り巻くようにして、オランダ領東インド植民地政府が厳然として存在しているという構図が、アルマナックには明示されている。それは、各年度の巻頭に必ずおかれているウィルヘルミナ女王の肖像写真、王族の名鑑一覧とそれに関わる写真、植民地総督（写真付き）以下植民地高位高官、植民地各行政区の主要な官吏の人名録である。このような個々の人物名の次に、植民地政府の制定した主要な法律と条令が掲載され、併せて、税金支払いについての情報が毎号のように掲載されている。

このような構図には、植民地社会の安定性と不動性がゆくりなくも示されているといつてよいであろう。変わらざる王家と王族、政府の構成、ゆるぎない規則、それらを前提として交通と通信のネットワークが円滑に作動し、信用経済が成り立ち、生活の向上に資するさまざまな商品が市場に出まわる。そしてそういうものに取り囲まれて、安定した個々の家庭が無数に存在することになる。アルマナックは、このような個々人に有益な「知識」 *pengetahuan* と「技能」 *kepandaian* を提供することを主目的とするものである。だから、創刊以来の方針、「すべての人々に役立つこと」 [*Volksalmanak Melajoe (AMBP)* 1919: 1] また、すべてのインドネシアの人々が「もっと多くの知見 (*ilmu pengetahuan*) を持つこと」 [*AMBP* 1928: 1] は、各年度の編別構成とその内容とにおいて見事にいかされ、つらぬかれたといつてよい。

アルマナックそのものが植民地社会の「秩序と安定」のミニチュア版として作られているということを逆説的に示しているのは、ここにみられる徹底的な非政治性、非歴史性である。このアルマナックが出版されていた1919年頃から1940年頃までのインドネシアは、いうまでもなく、内に激しいナショナリズムと反植民地運動がもえさかり、スカルノ、タン・マラカ、ハッタ、シャフリル、チプト・マングンクスモをはじめとするすぐれた民族指導者が続々と登場し、そしてこれらの人々が次々と逮捕され流刑されていった時代であった。まだ国際的状況も第二次世界大戦へ向かって、とくに、日本の脅威が次第に深刻に感ぜられる時代であった。

しかし、アルマナックが出版されていた全期間にわたって、そのような動きに触れた記事はまったく見事なくらい、どこにも見当たらない。それは、KITLVに所蔵されている最後のアルマナックである1940年版においても同様である。

しかしながらそのことはアルマナックがナショナリストの政治運動に直接に敵対していたということではない。それはアルマナックの非政治的・非歴史的な性格を終始一貫示していたことであつたと述べてよいだろう。

アルマナックが何よりも目指したのは、既に述べた通り、生活の役に立つ「知識と技能」を読者に提供し伝達することであつた。そこに認められるのはすぐれた啓蒙主義的な性格であつた。ここでいう「知識と技術」とはたんに役に立つだけでなく、植民地社会の秩序と安定という観点からみて無難なもの、さらに「秩序と安定」に対する読者の志向性を強めるものであつ

た。いわば、公定で公認の「知識と技術」がそこに盛り込まれていたのである。

何よりも顕著であったのは、不安やおそれをかき立てるような記事や情報がまったく載せられていないことである。怪我や病気も、それらの応急処置が示され、それが治療されるのに必要な技術が手際よく示されているのであって、それ以上でもそれ以下でもない。いわば隈なく明るい透明な光の中にアルマナックのすべての記事が定置され、だから読者は、おそれやおのきとは無縁で、したがってまた楽しみやかなしみの心性とは無縁のところ、このアルマナックを読み、そこから知識や技能を学びとったのであろう。しかも又、生活の知恵が本来育くまれ引き継がれていく「語りの言葉の世界」から離れて、その一つ一つが「書き言葉」として表現され他のさまざまな情報と組み合わせられて提供されたのである。「知は力なり」という命題における〈知〉が、そこでは、文字を読むこと、学ぶことに結び付けられた。公定のそして消毒済みの知識をそのまま吸収しようとする優等生の群れがこのアルマナックの読者と二重映しになっていた。その限りで、バライプスタカのアルマナックは、植民地政府の文化政策の核心を示すもの、そして、文化事業（プロジェクト）という観点からして、みごとな成功を収めたものであったといえることができるであろう。

それでは、本来、暦を意味し転じて年報としても用いられるものとしてのアルマナックの機能はどういうことになるのか。

歴史意識の全き欠如ということがアルマナックにおいて示されるという矛盾をどう考えるべきなのだろうか。

ここで興味深いことは、非政治性、非歴史性ということが、アルマナックが本来もっている厳密な時間概念によってバランスをとられ、そこで二つが相殺されていることである。毎年のアルマナック編成はほとんど同一であり、しかも、そこに年々の時代の変化、世界の変化を示すものは皆無である。まるで時間そのものが停止しているかのような編成と内容であるのに対して、冒頭の数ページを埋める暦——キリスト暦、イスラム暦、中国暦によるそれぞれのカレンダー、それぞれの祝祭日、その年の日食の予告等が、きわめて厳密な、したがって無機質的な仕方で1年また1年と推移していることを告知している。

このような時の推移は、正確無比に記されているというまさにそのことによって、時の経過とはそもそも何を意味するかという、その意味を剝奪している。この無機性と、先にみたアルマナックそのものの非政治性・非歴史性とは、このようにして見事に互いに調和している。たしかに、年々の人口の変化、年々の法律条令の改訂や増加、郵便制度や鉄道の拡大等が時の変化とともに起き時とともに発展していることを示しているかのように見える。しかし、人事録、条文と数字（*peraturan, ukuran, tarif*）とは、いずれも文章としてでなく一覧表として示され、その提示のされ方は、カレンダーが示されるのと同じのスタイルである。だから、ともに、時が経過することの意味、変化や発展の相貌はひと言も示されないし、また示す必要もな

いことになる。

20年余りにわたって刊行され続けたこのアルマナックを通して、それにもかかわらず時が経過したことを実感させるものが一つだけある。それは、ほかならぬウィルヘルミナ女王の肖像写真である。毎年巻頭を飾る写真は、時々替えられている。その時々の変化は少なくとも、20有余年を経ると、1919年当時のまだキリリとした感じの若き女王（当時39歳）と1940年当時のふっくらとした威厳をたたえる女王（当時60歳）とは、たんに女王自身というよりも、一人の女性の上に流れていった歳月の長さを自から示している。そしてこのような変化だけが、このアルマナックにおける時の推移を感じさせるのである。

しかし、次にみるブニン社のアルマナック・ムラユは、それが時の変化を生き生きと示すという点において、バライプスタカのアルマナックからは大いにかけ離れていた。そこでⅢとⅣでは、何がどのように異なっていたのか、また何故そのような違いがこれら二つのアルマナックの間に認められるのかという点について検討してみたい。

Ⅲ ブニン社版ムラユ語アルマナック

以下にブニン社版のアルマナック・ムラユについてやや詳しくみていきたい。先ずⅢでは1880年から1912年にかけての編成が年ごとに概観され、このアルマナックの読者数、読者層、販売ネットワーク、販売政策などが考察される。また、アルマナックの出版とともに導入された時間概念について論ずる。

1. 体裁・内容の概観

ブニン社版ムラユ語アルマナックのうち KITLV に所蔵されているのは、1880年から1883年まで、1889年から1899年まで、1901年から1904年まで、1906年、1908年から1912年までの各年である。初期の3年間（1877年から79年まで）と中途の数年間（1884年から88年まで、1900年、1905年、1907年）は抜けているが、先にみたアルブレヒト版がわずか2年間分しか（1895年と96年）残されていなかったのに対して、比較的全体を通観することができる。

所蔵されているうちもっとも初期の1880年からみていこう。縦 15.5 cm, 横 12 cm の小型版で、表紙には、オランダ語を用いて「ムラユ語アルマナック (Maleische Almanak) 1880年 (第4年版)」と記され、そのすぐ下に「スラカルタの F.L. Winter 編, H. Buning (ジョクジャカルタ) の出版」と記されている。

編者として記載されている F.L. Winter の祖父は当時の著名なジャワ語学者、ジャワ学者であった。祖父は Carel Frederik Winter (1799-1859) といい、ジョクジャカルタで生まれスラカルタで生涯を閉じたユーラシアン（欧亜混血）であった。ジャワ語とオランダ語のバイリン

ガリストとして早くから認められ、オランダ人ジャワ学者 J.F.C. Gericke (1800-57) の片腕として、『ジャワ語＝オランダ語辞典』の編纂に大きな貢献をした [土屋 1984: 76-117]。

しかし孫の F.L. Winter がどのようにしてこのムラユ語アルマナックの編集にかかわるようになったのか、またとくにジョクジャカルタのブニン社とどのような関係を取り結んでいたのかを明かす手掛りはほとんどない。ただ、後にも述べる通り、F.L. Winter の名は1889年当時のアルマナックの表紙からは姿を消し、それに代って Tan Tjiook San という人物が編集を一手に引き受けるようになる。彼はおそらくごく初期の間だけこのアルマナックとかかわったのであろう。

それでは F.L. Winter 編のアルマナックはどのような編成をとっていたのであろうか。1880年のアルマナックから順次みていこう。

先ず暦の欄が冒頭の24ページにわたって掲載される。そこでは、中国年、Pramata Mangsa, Wuku, 1809年ジャワ暦の月、市場暦 (pasaran), 日 (Ari), オランダ暦の順序で、暦日が並べられている。¹⁰⁾

次は祝日一覧である。オランダ人 (bangsa Wolanda), イスラム (bangsa Islam), ジョクジャカルタとスラカルタ, 中国人 (bangsa Tjina) の順序で祝日が記載される。

その次に、官吏の氏名の後につけられている略号の説明欄が設けられている。その後120ページ以上にわたって、植民地政府の高位高官、原住民首長、中国人マイヨールとカピタン等の人名録が掲載され、分量的にみても、アルマナック全体の7割近くに達している。

その後には2編のシャイールが掲げられている。シャイール (Syair) とは、4行1連、各連ごとに各行が韻を踏んでいくという形式で、古典ムラユ文学の韻文の一形式である。長短はさまざまであるが、ここに載せられているのは、33ページ200連を越える長大なものである。

この詩編をもってアルマナックは終わるが、最終ページに1880年の食の予測が示されている。

1880年版のアルマナックのこのような編成の骨格はそれ以降も引き継がれていくが、年によって変化をみせる部分もある。そこで、それ以降についても以下にその編成を概観しておこう。

1881年版では、見開きページにオランダ王女の線描画が載せられている。以下は前年と同じ編成で、その後に、ナポレオンⅢ世についてのシャイールが載せられている。このシャイールは次年度への続き物である。さらにマルク諸島の人々のパントウン (伝統的な四行詩) が載せ

10) Pramata Mangsa はジャワの農事暦、Wuku は30日7回つまり210日を1単位とするジャワの編年システムで、Watu Gunung 王, Sinta 姫, Landep 姫及び王と Sinta 姫の間に生まれた27人の男児が、毎週7日ごとにひとりずつ天国に呼び寄せられるという『パララトン』中の物語に由来する [宮坂 1984: 36-37]。ジャワ暦は1633年以来スルタン・アグンによって採用されたもの、市場暦は1週5日の周期でくり返されるものである。

られている。

1882年も同様の編成である。見開きページの口絵には、中国の王（清朝）とトルコのスルタンの線描画が載せられている。四つの詩編が載せられているほか、ブニン社自身の出版物の広告欄が設けられている。

1883年も編成の骨格は前年までと同様である。口絵に描かれているのは、マンクヌガラ家の王子とパクアラム家の王子。一方はスラカルタ他方はジョクジャカルタに所在する小王家の第一王子がそれぞれ掲載されていることになる。この年は長編の詩が一編、これはアラブ文字からの翻訳であると記されている。また、前年にひき続いて出版広告が載せられている。12点すべてがブニン社の出版物で、薬、料理、暦日表、ワヤン物語、原住民用法律書に関する書物が含まれている。また、この内、薬・医療関係のものが4点と数の多いこと、8点はジャワ語（したがってジャワ文字）の書物であることが注目される。

さてブニン社版アルマナックはその後5年間（1884年から88年まで）が欠けているのでその間の変化は定かでないが、1889年以降についてみるといくつかの変化が示されている。

1889年（第13年次）の表紙には、先ずムラユ語で *Almanak Bahasa Melajoe* と記されその次にオランダ語による表示がくる。また、この年以來、F.L. Winter 編という記載は見当らない。その点が一番大きい変化である。それに代って、この年に掲載されたシャイール3編のうち最初のものである「シャイールで綴る」(*Syair yang mengarang*) 中に、Tan Tjiook San という人物名が記載されている。これは、ジャワの詩形式でいう *Sandiasma* によるもので、ひとつの詩の中に特定の人物名やことがらが織り込まれていくものである。19世紀のジャワの詩聖と謳われたロンゴワルシト(1802-73)が得意とした技法であった[土屋 1984: 125n]。

「シャイールで綴る」という10連から成る詩の各節の冒頭の文字を一語ずつとり出して綴り合わせていくと、“Tan Tjiook San Jang Mengarang Almanak Di Jokja”つまり「タン・チュック・サンがジョクジャカルタでアルマナックを綴ります」という文章になる。だからこの号を以て、タン・チュック・サンがアルマナックの編纂を引き受けることが、シャイールの形式で明示されたことになる。事実この翌年の1890年以降1904年に至るまで、毎号の表紙に Tan Tjiook San の名が記された。彼はこの15年近くの間このアルマナックにかかわる最も重要な人物となった。

さて、タン・チュック・サンとはいかなる人物であったのだろうか。プラナカン（インドネシア化した中国人）であることは確かだが、それ以上のことは今のところ筆者には判然としない。したがって、さし当りはこのアルマナックをひもときながら推察せざるをえない。

先に述べたシャイールは、タン・チュック・サンとアルマナックとの関係をおぼろげではあるが次のように伝えている。

タン・チュック・サンがいまからアルマナック・ムラユを綴る。彼は又ジャワ語版も綴る。そのためにすでに2年間仕事をしてきた。これまで読者は沢山の誤りがあるので読むのも一苦勞であったが、これからは誤りを正し、批判されることのないようにしたい。実際のところ余りの誤りの多さにもう発行をやめようということになったが、編者を代えることで刊行を続ける結果となった。とはいえ新しい編者もまだ慣れぬことが多い。神 (Allah Tuhan Yang Maha Kwasa) の援けを得て、読者が読むに楽しく、お金の損をしたことにならぬようにしたい。

このアルマナックが買われ、そして楽しく読めますように、読者にご挨拶を申し上げます、誤りはどしどし指摘されるよう願う次第である。

シャイールの上に Sandiasma の形式を踏んでいるから内容に無理や歪みが生じていることはやむをえない。しかし、上に書かれた内容はほぼ事実を伝えていると考えてよいであろう。とすると、タン・チュック・サンはこれまでのアルマナックの質の向上を図るために、ブニン社から請われて編集の仕事に携わるようになったということになるだろう。ただ、それが前任者の F.L. Winter との交代なのか、また仮りにそうだとすると、アルマナックの質の悪さがその交代の理由なのか否かということになると定かではない。しかし、このシャイールが示しているのは、F.L. Winter の時代とは異なってもっと高いレベルのアルマナックを作ることに対する満々たる自信である。そしてそれ以降のアルマナックは、彼のそのような自信が決定的外れではないということを示していた。その点についてはⅣで詳しく述べることにして、さし当りは年々のアルマナックの概要を追っていくことにしよう。

タン・チュック・サンが編集するようになって以降も、編成の基本型は従来とは変わらなかった。1889年についてみれば、それまで巻末におかれていた日食の予告が冒頭のページに移ったほかは不変で、その後は、オランダ、中国、ジャワの暦、祭日の一覧が続き、それから200ページ余りにわたって、植民地政府にかかわる人名録が掲載された。先ず、官吏に冠せられるさまざまなタイトルの解説があり、ついで総督以下の高位高官、全ジャワの裁判官、ジャワ及びマドゥラのウェダナ（郡長）、外島（具体的な地域は、スマトラ、ポンチアナック、バンジャルマシ、マカッサル、アンボイナ）、中ジャワ四侯国の王・王族・軍人・高官、中国人マイヨールとカピタン、外島各地域のラジャ（土着首長）、これらの人名が記載された。

そのあとに、先に述べられたものを含めて3編のシャイールが載せられていた。巻末の数ページはブニン社の出版広告で18点の書籍が広告されていた。この内ジャワ語の書物が14点、ロンゴワルシトの作品2点が含まれていた。なお、広告欄には「迅速出版の H. Buning, ジョクジャカルタ」とあり、つづいて「上記の出版社では、オフィス用のさまざまな事務用品、書物その他を販売するほか、以下のようなジャワ語及びムラユ語の本の印刷を行っております」

とあり、出版とともに書籍文房具の販売も扱っていたことが知られる。

なお、それまで掲載されていた口絵はひき続き見開きページを飾った。この年1889年には、ジョクジャカルタ王家スルタン・ハマンクブオノ8世の写真が掲載された。

1890年。この年から表紙の体裁が少し変化する。オランダ語の表記が消え、*Almanak Bahasa Melajoe* という表記だけとなる。また第14年度版という表記もオランダ語からムラユ語へと変り、その下に「タン・チュック・サンによって綴られた」とムラユ語で記されている。表紙の一番下は、「ジョクジャカルタの H. Buning 氏の印刷所で出版される」とこれもムラユ語で表記されている。つまり、表紙から一切のオランダ語表記が消えムラユ語表記に統一されたのである。

この年の内容は人名録の部分までは前年と同様であるが、その後にジャワ及びマドゥラの鉄道時刻表と鉄道運賃が32ページにわたって掲載されている。1890年当時のジャワ島は、さかんに鉄道建設がすすめられていた時期であり、鉄道延長キロ数にして約 900 km 程度が開通していた（鉄道は1867年営業を開始した）。また、1890年当時にこの鉄道を利用した旅客のべ数は約600万人であった。これらは植民地時代の鉄道網の完成する1924年当時の鉄道延長キロ数 4,200 km、また1920年当時の旅客のべ数7,200万人に比べるとまだはるかに僅かであったが、しかし、このアルマナックはいち早く、鉄道情報を提供したことになる [土屋 1988: 159-162]。

このあとにシャイール3編が掲載され巻末にはブニン社刊行の出版広告が載せられる。書物は14点、半ばはジャワ語で記されたものであるが広告欄はすべてラテン文字が使われるようになっている。これは前年まで、ジャワ語の本はジャワ文字で広告されていたのに比して新しい変化である。

なお本号の裏表紙にはブニン社が扱っている次の品目への注文広告が載せられている。それらは、領収書、請求書、招待状、質草帳、名刺、住所入り封筒、各種のノート（注文に応じてどの様式でも可）、各サイズ各色の用紙、ペンとインクなどの筆記用具などであり、ここからブニン社が出版以外に各種の事務用品の製造と販売を営んでいたことが分る。

1891年。編成は前年と同様。口絵にはジョクジャカルタ・ハマンクブオノ7世の王子の写真が掲げられている。鉄道時刻表も前年と同様で、そのあとに4編のシャイールが載せられる。このうち最後の1編は混載詩で短い詩5編が含まれている。ブニン社の本の広告27点と事務用品の注文制作の広告も前年と同様である。

1892年。口絵はボロブドゥル寺院の写真、人物以外が用いられるのはこれが最初である。以下の編成は前年と同様、ブニン社の本の広告、事務用品の注文の勧誘がその後に続き、鉄道時刻・料金表はその後にくる。これは1890年12月15日現在のものと注記されている。全部で40ページに及び鉄道のネットワークが次第に拡大していく状況が反映されている。巻末に長編のシャイール1編が38ページにわたって載せられている。

1893年。口絵はオランダのウィルヘルミナ王女と覚しき人の写真。以下の編成は前年と同様、ただ最後にジャワのレジデンシー（州）の区分とそれぞれの人口が掲載される。シャイール3編が載せられ、広告欄があり、巻末に鉄道時刻・料金表が載せられている。なお本の価格は値下げしたと述べられている。実際料理の本が4フローリンから3フローリンへ下がっているのを始め軒並み2割以上価格が低下している。

なおこの年から表紙下段の H. Buning 社の前に付されていた tuan（氏）がとれて firma（商会）に変わり、「Firma H. Buning の印刷所出版」と表示されるようになった。¹¹⁾

1894年。口絵の写真はスラカルタ王家の当主ススフナン10世が載せられている。10世が1893年に即位したことを記念して掲載したものであろう。実際、アルマナック中には黒わく広告で1893年3月17日午前7時にススフナン9世が65歳で逝去したことが示され、それを悼むシャイールが載せられるとともに、ほどなくして3月30日に挙行された新王の即位式の華やぎを歌ったシャイールも併せて載せられている。

なおそれ以外の情報は前年と同様である。巻末にすでに述べたシャイールを含めて3編の詩が載せられている。

1895年。編成は前年と同様。口絵写真はスラカルタのクラトン（王宮）と思われる。鉄道案内は掲載されず、シャイール2編が載せられている。その内「ロンボック戦争のシャイール」は47ページに及ぶ長編詩である。ブニン社出版の書籍27点が巻末に広告されている。

1896年。口絵写真は植民地総督ファンデル・ヴェイク（van der Wijck, 在任1893-99）。以下の編成は前年と同じ。巻末6ページにわたってブニン社の出版広告と営業品目の紹介、これも例年通りである。44ページにわたる長編のシャイールが掲載されている。

1897年。口絵写真は「シャム国王殿下」チュラロンコン、これはチュラロンコン王が1896年にジョクジャカルタを訪問したことと関連して載せられたと考えられる。事実その訪問の様子を伝えるシャイールが掲載されている。以下の編成は前年と同じ。シャイールは上に述べたものを含めて2編が掲載されている。

1898年。口絵写真はウィルヘルミナ女王。この年に即位式が行われた。女王を讃えるシャイールほか1編が掲載されている。以下の編成は前年と同じである。

1899年。口絵写真はジョクジャカルタ王家の王子。以下の編成は前年と同じ。シャイール2編が掲載されている。

1900年。欠号。

1901年。口絵写真は総督ローゼボーム（Roseboom, 在任1899-1904）。以下の編成は1899年

11) Buning 社がジョクジャカルタの有力な出版社であったことはその多様な出版物からみても十分に窺える。しかしこの出版社の由来などは不明な点が多い。Buning が個人企業として行っていたものが、1893年当時に彼が死去したか何か別の理由によって経営主体から退き、それとともに商会形式をとるようになったことも考えられるであろう。

のものと同様。長編詩1編が掲載されている。

1902年。口絵写真はウィルヘルミナ女王とヘンドリック殿下がそれぞれ左右1ページずつに掲載。以下の編成は前年と同様。長編詩1編（前年来のつづき物）の完結編が掲載されている。巻末にジャワ語の本の広告のほか、金銀細工（バタヴィア及びスラバヤ）と薬品（スマラン製）の広告が載せられている。ブニン社以外の広告が初めて現れるようになる。

1903年。口絵写真はジョクジャカルタ王家の王子。以下の編成は前年と同様。シャイール1編が掲載されている。巻末にはブニン社に新しい活字版と6台の印刷機が購入されたことが広告されている。

1904年。口絵写真はジョクジャカルタ王家の王子。以下の編成は前年と同様、シャイール1編が掲載されている。他にスマラン製のタバコの宣伝、ブニン社自身の広告が載せられている。

この年の巻末にはそれ以外になお二つの注目すべき広告が現れている。

ひとつは、『レトノドゥミラ』（Retnodhoemilah）の購入を勧誘するものである。この新聞は1895年に創刊されたがその当時の編集者は F.L. Winter であった [Nagazumi 1972: 179n]。ところが1901年以降は、後年（1908年）ブディ・ウトモを設立してインドネシア民族覚醒の父と仰がれることになるワヒディン・スディロフソド (M. Ng. Wahidin Sudirohusodo, 1857-1916) が、編集長をつとめることになった [ibid.: 26]。

さてこの広告欄には次のようにみえている。「『レトノドゥミラ』を読もう。美しい装丁と楽しいよみ物。2ページ立てで、ジャワ語とムラユ語並置の新聞。ジョクジャカルタとスラカルタの王宮の中でも読まれている。購読料は3カ月につき3フローリンで前払い。毎週、祝日以外の火曜日と金曜日に発売。広告掲載料も廉価。編集長スディロフソド。発行はジョクジャカルタ H. Buning 商会」。

このような記述から、ブニンが一方でタン・チュック・サンというプラナカンを編集者としてアルマナックを刊行し、他方ではジャワ貴族の末端に連なるワヒディン・スディロフソドを編集長として『レトノドゥミラ』紙を刊行していたことが分かる。それは民族意識の先覚者が先ず出版社と結びついて活動していたこと、さらに、彼とプラナカンとが出版活動の場を共有することで、間接的・直接的に結び付いていたことを示している。

さて1904年版に載せられた広告でもう一つ注目すべきものは最終ページの「宝くじ」(Loterij) である。そこには次のようにある。

くじ番号 6437。ジョクジャカルタブニン商会刊行のアルマナック・ジャワもしくはアルマナック・ムラユを購入したものは宝くじを1枚を得ることができます。賞品は下の通りで、1904年4月1日に抽選を行います。

宝くじの賞品

1 等金時計（価格50フローリン）、2 等銀時計（価格20フローリン）、3 等銀時計（価格12フローリン）、4 等目覚まし時計（価格10フローリン）、5 等ペン立てセット（価格7.5フローリン）、6 等ペン（価格5フローリン）、7 等ペン立て（価格5フローリン）、8 等1 ダースの紙及び封筒（価格2.5フローリン）、9 等『クヒヌール』（Kitab Koehinoer）全2巻。

抽選の結果は追って『レトノドゥミラ』紙上で発表します。また、当選者・当選番号を知りたい方は、切手同封の上お申し込み下さい。

さらにこの年のブニン社刊の書物の広告中には、従来からくり返し広告されてきた料理の本、薬の本、政府の主要な条令のムラユ語訳、ジャワの年代記と歴史物語のほか、F.L. Winter 著『オランダ人のしきたりと礼儀』（1フローリン）、F. Schulze 著『ロンボク戦争』のムラユ語訳（2フローリン）などの広告がみられる。このうち、前者は後年、1908年及び1909年にあらためてアルマナックに転載されたと考えられる（後述）。

ひき続いてブニン社アルマナックの概要をみていこう。

1905年。欠号。

1906年。口絵写真は、植民地総督ファン・ヒューツ J.B. van Heutsz (1851-1924)。彼はアチェを征服後総督に就任（1904-09）した。ちなみに写真に付された称号は Sri Paduka Yang Dipertuan Besar J.B. van Heutsz, Gouverneur-Generaal di Hindia-Nederland（オランダ領東インド総督 J.B. ファン・ヒューツ大官閣下殿）とあって大仰である。

次にこの年の表紙からタン・チュック・サンの名前がなくなり、その部分には「御総督府（Kandjeng Gouvernement）刊行のアルマナックにもとづく」と記されている。さらに Buning から商会（firma）の名が消え株式会社（N.V. voorheen Buning）に代った。

目次より前の見開き部分に、1905年の宝くじの当選者10名が発表され、次回（1906年）の当選者も追って『レトノドゥミラ』紙上に掲載予定とある（これについては後述）。

さてそれ以下の内容もそれまでと比べて多少変化してきている。例えば1904年版では従来通り、日食の予告、祝日、西暦（オランダ）、中国、ジャワのカレンダー、星の名前と意味、その後に植民地政府の人名録が続いていた。それに対し1906年版では、日食の予告、祝日のあとに、ポンチョ・スド（pontjo-sudo）、チョンドロ・ウク（tjondro wuku）など、占いと日の良し悪しに関する情報が載せられている。しかしそれ以後の編成は従来と同様である。そのあとにシャイール1編が掲げられている。

巻末部分は従来通り広告欄に充てられている。自社出版の書物、事務用品、『レトノドゥミラ』の広告のほか、バンジャルヌガラにブニン社の代理店が開設され、ブニン社の商品のほか

各種のアルコール類の販売も行っている旨が広告されている。

最終ページは、1904年のものと同様に「宝くじ」の広告が載せられている。賞品が少し変化したし、1等は宝石（価格75フローリン）で以下12等（2フローリン）まで、賞品の価値と賞品数がともに少し増したことが知られる。

1907年。欠号。

1908年。口絵写真はジョクジャカルタのパク・アラム王家7世。目次内容は前年と同様で、日の占いや吉凶が示され、そのあとに大量の人名録が載せられている。

しかし、この年のアルマナックにはいくつかの変化がみられる。

第一は宝くじの景品がさらに増えて読者の射幸心を煽るようになっていることである。裏表紙の広告によれば、1等賞はガメラン（楽器）1セット（価格500フローリン）ととびぬけて豪華となり、2等はグラムフォン（「話す機械」と注釈が付されている。70フローリン）、以下宝石や金時計やブニン社刊行の『プスタカラジャ』全10巻など、24等までさまざまに魅力のある賞品が並べられている。なお1907年の宝くじの当選者も最終ページに載せられている（これについては後述する）。

第二の変化はこの頃からアルマナックの広告欄が大いに増加したことである。それはブニン社関係の広告が増えたこととそれ以外の各種の広告がともに増えたことによる。ブニン社刊の出版では、ジャワの物語集成である『プスタカラジャ』（ジャワ語）全10巻が完成し全巻割引き20フローリン（各巻別では2.5フローリン）で発売する旨の1ページ大の広告が載せられている。ちなみにこの販売方法で興味深いことは、全巻購読者に対して福引きくじを設けたことである。1等ダイヤモンドカット（200フローリン）、2等自転車（100フローリン）以下7等まで賞が揃えられている。ただし、このくじ引きは全巻250セットが販売された場合とするという但し書きが付されている。販売促進とくじとを巧みに結び付けていることがよく分かる。

ブニン社以外の広告で興味深いのはサングラスの広告でニッケル製3.5フローリンから14金22.5フローリンに至るまで各種のグラスがとり揃えられている。販売店はジョクジャカルタの薬局店である。賞品の中に自転車が入っていたことを合わせて、ジョクジャカルタの街に次第に新しい商品が日常化してくる状況がうかがえる。

なおもう一つ、生命保険の広告が目をはく。これはハーグに本店をもつ保険会社の支社がスラバヤに開設されたことを伝える広告である。

第三の、そして最も大きな変化は、これまでアルマナックの最終部分に必ず掲載されていたシャイールが、少なくとも筆者の手許にある1912年迄の分についてみる限り、この1908年を以って姿を消したことである。とはいえ、アルマナックから読み物欄がまったく姿を消したわけではない。シャイールに代って通常の散文が載せられるようになったのである。1908年には、「オランダ人のしきたりと礼儀」と題する一文が載せられた。筆者は F.L. Winter で長さは

88ページ、これはおそらく1904年の書籍広告中にあった同名の本（定価1フローリン）を、アルマナックの方へ転載したものであろう。これは、翌年も連載され2年で完結した。

1909年。口絵写真はジョクジャカルタ王家の王子の結婚（1907年8月16日）時のもの。以下表紙とそれにつづく編成も1908年のものを踏襲。

前年にひき続いて広告欄が増加し、各種の売薬、洗髪剤（ふけ取り）、サングラス等が広告されている。このうちサングラスは利用者からの「賞讃のことば」が載せられて品質保証をしている（プロボリング、マゲラン、スラカルタ、ボンドウォソの利用者）。

また前年にひき続いて「オランダ人のしきたりと礼儀」が載せられ、これとは別に、パウコン（Pawukon）、すなわちジャワの210日のサイクル（7曜×30日）のそれぞれについての吉凶の解説の連載が始まっている。

1910年。口絵写真はウィルヘルミナ女王の夫君と子供たち。以下の編成は1909年と同様。前号にひき続きパウコンの解説、別に「プルギオ物語」（Hikayat Pergiwa）が掲載されている。これはワヤンで演ぜられる物語である。

ところでこの年広告欄に現れた商品は次のようなものであった。万年筆ケース、印字セット、ゴム印、インク消し、各種の薬（ペカロンガン）、バティック（ペカロンガン）、自動車・自転車、白髪染め、香水、サングラス、時計・宝石・銀細工、メガネケース、整髪剤、避妊薬、しみ・そばかす取りクリーム、せき止め、塗布油、各種の書物（料理、薬、ムラユ語＝オランダ語、オランダ語＝ムラユ語辞典等）

なお1910年版の巻末部分には、「商人リスト」が載せられている。どのような基準で選ばれているのか判然としないが、ジャワ島から46名、外島から9名の名が挙げられている。氏名はすべて中国名である。

また1909年の「宝くじ」の当選者一覧が掲げられている。これによれば、当選者は100名に増えている（これについては後述）。なお当選者の掲示のあとに次のような興味深い「お願い」が記されている。

このたびの1909年版アルマナックの賞品をまだ受け取っていない方は、至急申し込んでください。1910年1月1日までに受け取られない場合には、賞品の一部を、ジョクジャカルタのブディ・ウトモ本部並びに中華会館（Tiong Hoa Hwee Koan）に寄付致します。ブニン株式会社。

そしてこれに呼応するようにして、裏表紙の「宝くじ」の欄外にも、1910年用のものについて同趣旨の告示がなされている。なおこの時点での賞品は100人に対して総額2,000フローリンに達していた。

さらにこの年初めてごく簡単なブニン社の由来が広告された。それによればブニン社は(1910年から数えて)45年前に設立された印刷所で、1883年のアムステルダム万国博で表彰された実績をもつ。ジャワのプリアイと植民地政府をお得意様としている。スタンプのことなどのような相談にも応じるのでご愛顧願いたい、とのことであった。

1911年。口絵写真は植民地総督イデンプルフ、この人は1909年に総督に就任した。それに続く編成は前年と同様であるが、新たに「ジャワ医学校」(Doktor Jawa)の卒業生名簿が記載されている。連載物としてパウコンのほか「スルヤウィセソ物語」が載せられている。

前年にひき続き「商人名鑑」として22名の名前があげられている。すべて中国名でジャワの各地に在住する者が含まれている。そして標題が「商人にしてこのアルマナックの販売代理人」とされているので、これらの人々がブニン社のネットワークを作り上げていた人々であることがわかる。おそらく1910年の「商人リスト」も同趣旨のものであろう。とすると中国系商人がその当時作り上げていた緊密なネットワークの具体例を知るための良い手掛りとなるだろう。

この年も多様な広告が載せられている。ブニン社製のさまざまな事務用品(製図用具、文箱、名刺、招待状、スタンプ、インク等)と書籍のほか、ブニン社で販売する中国茶の広告が載せられている。中国茶の広告は他にもいくつか出ているがいずれも「にせ物」に注意されたいと記されている。

1910年用の宝くじの当選者100名の名前も発表され(後述)、又、賞品を受け取らない場合にはブディ・ウトモ及び中華会館への寄付にまわすという公告も前年通りである。

1912年。口絵はスラカルタ王家のパクブオノ10世。内容構成は前年と同じ。「プラボクスモ物語」とパウコンの連載という形式も、1908年以来不変である。

広告欄はブニン社の事務用品と書籍を中心とする。書物のバラエティーが増え、各種の辞典、オランダ語教本、さまざまな翻訳物(『ドンジュアン物語』、『モンテクリスト伯』、『千夜一夜物語』等)に及んでいた。

この年度のアルマナックも宝くじの当選者100名を巻末に発表している。

以上が1880年から1912年まで30数年間にわたるブニン社版アルマナック・ムラユの概要である。次には、ここから知られる限りにおいて、アルマナックの読者、スポンサー、販売政策等について考察してみよう。

2. 読者、スポンサー、販売政策

上に概観してきたブニン社版アルマナック・ムラユを成立させていた背景はどのようなものであったのだろうか。アルマナックをみる限りではそれを窺わせる手がかりはきわめて少ない。また、その手がかりにしても、推察の域を出ないおそれもある。しかし、一応次のことが

らを手がかりとしてみることができるだろう。

- (a) ブニン社自身の性格，広告主
- (b) ブニン社の販売代理店のネットワーク
- (c) 宝くじの当選者名簿

(1) ブニン社の性格と広告主

先に述べられているところに従えば，ブニン社は1865年当時にジョクジャカルタに設立された [AMB 1910]。Buning とはこの設立者にして経営者の名前ではなかったかと思われるが，もしそうだとするとどのような人物なのかは不分明である。プラナカン（インドネシア化した中国人）ではなく，オランダ人が欧亜混血の何れかであった。おそらく欧亜混血ではなかったであろうか。

ブニン社は早くから印刷機械を導入するとともに，各種の文房具，事務用品の販売で成功していたと思われる。1883年のアムステルダム博覧会で表彰されたというから，ヨーロッパとのネットワークもできていたらしい。しかしこのブニン社（のちに商会さらに株式会社となる）の主要な活動はジョクジャカルタであり，中でもジョクジャカルタやスラカルタの王宮（クラトン）や植民地政府などの御用商人としての地位を固めていたと推察される。

それと関連して，ブニン社が1878年以来アルマナック・ムラユを，さらに1895年以来『レトノドゥミラ』を刊行出版したことは興味深い。まず，アルマナック・ムラユ及び『レトノドゥミラ』の当初の編集責任者は F.L. Winter で，この人は，オランダのジャワ学形成に多くの貢献をなした C.F. Winter の直系の孫であった。先に述べた通り，C.F. Winter は彼自身欧亜混血で，19世紀半ばのジャワにあって，一方ではオランダ人ジャワ学者 Gerick と緊密に手を携えてジャワ古典文学・言語研究の基礎を固めた。その貢献の大きさから生前「オランダ王立アカデミーのジャワ研究にとっての栄養源」と言われるほどであった。さらに，C.F. Winter の父親もまたオランダ語＝ジャワ語通訳官を勤めていた。そのため C.F. Winter は子供の頃からジャワ人社会とくに王宮によく通じなかでもスラカルタ王家付きのプジャンガ（詩人）として誉れの高かったロンゴワルシトとは生涯にわたって深い親交を重ねていた。ジャワ語・ジャワ文学についてこの詩人から知識を得る一方，生活上の援助を含めてさまざまな相談にも乗っていたらしい。この意味で，C.F. Winter は，オランダ語とジャワ語という二つの言語をつなぎその間を自在に往来することのできる人であった [土屋 1984: 76-96]。

さて，F.L. Winter はその直系の孫として Winter 家の少なくとも四代にわたる職業を継いだことになる（なお，F.L. Winter の父と叔父も，C.F. Winter の仕事を継いで通訳官ないし語学教師として活躍していた）。すなわち一方でオランダ社会に通じて，既に述べた『オランダ人のしきたりと礼儀』を著す一方，自らはジャワに居て，アルマナックや新聞の編集に携っ

ていたのである。ただ、祖父の世代（C.F. Winter は1859年に死去している）と異なるのは、F.L. Winter が活躍する19世紀末から20世紀の初めになると、ジャワ語だけでなくムラユ語が次第に大きな役割りをしめるようになってきたということである。それは、中ジャワの文化的中心であるジョクジャカルタやスラカルタにおいても、ムラユ語版のアルマナックが出版され、また、つい一世代前ならジャワ語の新聞だけが刊行されていた——例えばスラカルタで刊行された『ジュルマルタニ』、『プロマルタニ』という新聞はいずれもジャワ語版であった——のに対し、『レトノドゥミラ』のようにジャワ語・ムラユ語併用の新聞が刊行される時期であった。ブニン社と F.L. Winter の結び付きには、ジョクジャカルタにおいて出版言語としてのムラユ語が浸潤し始める状況が示されている、とあってよいであろう。

次に注目されるのは、タン・チュック・サンがある時期にアルマナック・ムラユの編集を委託されそれを取り仕切ったことである。少なくとも彼の名が最初に現れる1889年からその名前の消える1906年までの18年間、ブニン社刊のアルマナック・ムラユはタン・チュック・サンとともにあったとあってよいだろう。

タン・チュック・サンがどのような人物であったのかは、F.L. Winter の場合よりもさらに定かでない。先にみたように、1887年当時からアルマナックの編集とかかわり、それを本格的に委せられたのが89年以降であること、そして前任者との交代の理由が、本人の述べるところに従えば、ムラユ語の誤りや編集ミスを正すためであることが窺えるのみである。

しかし、この交代によってもたらされたのは、アルマナックの中に、同時代の時代状況とくにその当時のジョクジャカルタに住む人々が共通に経験したことを詩形式で表現し掲載していくという、まことに斬新なスタイルであった。これについては章をあらためて詳説してみたい。

ブニン社がタン・チュック・サンを編集者として据えたのは、そのような意味で成功を収めただけでなく、当時の植民地社会とくに中ジャワの中国系住民（プラナカン）とブニン社との関係を一層強めたことであろう。その点は、20世紀になると具体的にはっきりと示される（本章（3）で述べる）。

さて、ブニン社のもう一つの特徴は、すでにみた通り、『レトノドゥミラ』という週2回の新聞を併せて発行し、その編集には当初は F.L. Winter, 1901年以來はワヒディン・スディロフソドが当たったことである。ワヒディンは永積が見事に説き明かしているように、ジャワのプリアイ（貴族）の末端に連なって王宮世界への大いなる崇敬の念を示しながら、聡明で勤勉な少年としてオランダ語教育を受けて医師の資格を得るという点で、19世紀末の時代の先端に立つエリートでもあった。彼は、さらに多くのすぐれた資質のジャワ人少年たちに勉学の機会を与えようと考え、そのための奨学金制度を作り上げようと努力した。1905年からは特に活発になり、『レトノドゥミラ』紙上にもしばしばそのためのキャンペーンが載せられた。このよう

な活動の成果が、1908年に至ってブディ・ウトモを生み出していくことになる [永積 1980: 99-134]。

そのようなワヒディンがブニン社と深い関わりをもっていたことは興味深い。つまり、ワヒディンにおいてもブニンにおいても、まことに多重な言語空間と文化空間とが幾重にも重ね合わされ、その重なり合いのところで互いに手を携えている状況がうかがえるからである。それらは、ジョクジャカルタやスラカルタの王宮、これに系譜上つながるジャワ人貴族、そこを往来するプラナカンや欧亚混血の御用商人、植民地教育制度の中で育ちつつあるエリート、植民地制度を担う官吏らの世界が、出版を通して幾重にも重なり合っているのである。

1910年当時から、宝くじの賞品の一部を引き取り手がない場合に、ジョクジャカルタのブディ・ウトモ本部及び中華会館へ寄付すると公告されているのは、ブニン社とこのアルマナックのもつネットワークの重層性をはからずも示していたということができよう。

(2) 販売ネットワーク

それではブニン社のアルマナック・ムラユの販売はどのように行われていたのであろうか。¹²⁾ 直接店頭で購入する場合と郵送する場合があった。ところで、肝心のアルマナックの価格であるが、筆者の知る限り不明である。

店頭購入について参考になるのは、先にも述べた、1910年と1911年の両年にわたって掲載されている「商店リスト」である。このリストのうち1911年のものは「アルマナック」販売代理店を兼ねると明記されているので、それを1910年についても適用して考えてみると、その当時の販売取り扱い店、換言すればブニン社が有していたネットワークの様相が知られるであろう。

以下に両年にわたって示された商店名の地域と商店の種類をまとめてみよう。なお、商店(商人)名はすべて中国名であり、両年の合計は69店である(但し両年にわたって掲載されている5つの商店は除く)。

[地域]

ジャワ島 (合計 61店)

ジョクジャカルタ 1店

中ジャワ 38店

スラカルタ(4) スラゲン(6) マゲラン(6) パチタン(1) ウォノギリ(1) バタン(1) クドゥス(2) ペカロンガン(2) テガル(3) クルトソノ(1) バニユ

12) 以下の記述も、注8)で述べたことと同様にブニン社刊行のアルマナックのうち、ムラユ語版とジャワ語版の双方を念頭においている。ただし、筆者が当面目にしているのはいうまでもなくムラユ語版のものだけであるから、これを通して全体を推測するということになる。

マス(2) ジェパラ(1) カランガニャール(1) ボヨラリ(1) クトアルジョ(2)
トゥマンゲン(2) ラッセム(1) チェリボン(1)

東ジャワ 17店

クディリ(3) トルンアゲン(2) シンゴサリ(1) クパンジェン(1) マディウン
(1) ジョンバン(2) プロボリンゴ(1) スラバヤ(1) ボジョネゴロ(1) パ
ティ(2) シドアルジョ(1) ポロン(1)

西ジャワ 5店

バタヴィア(1) バンドン(1) ボゴール(2) インドラマユ(1)

ジャワ島外(合計 8店)

トゥルクブトン(スマトラ) パダン(スマトラ 2店) ポンチアナック(カリマンタ
ン) クタイ(カリマンタン) タンジュンピナン(リアウ諸島)
(他にカリマンタン島に2つの代理店がある)

これらの一覧が示している通り、アルマナックの販売網はジャワ島各地域の大小の都市にわたってひろがっていた。また、一部はスマトラやカリマンタンにまで及んでいた。その全てが中国系の名前を冠する商店であり、この販売網が華商のネットワークであることを示していた。

一方、このアルマナックの代理販売店が実際に営んでいる営業品目もきわめて多様であった。その主なものを拾い上げてみると次の通りである。

タバコ商、葉巻商、薬品業、雑貨、布地、文房具、貿易、パン食品、家具、バティック布地、書籍、ヤシ酒販売、飲料販売、印刷所、パサールの雑貨商、等。

このようなさまざまな商品を取り扱う華商が、アルマナック・ムラユの代理店も兼ねるところに彼らのネットワークの広さとその商業活動の自在さが窺えるであろう。

(3) アルマナックの読者層(宝くじの当選者)

ブニン社版のアルマナックを購入し購読していた読者はどのような人々であったのだろうか。また、その数はどの程度に達していたのであろうか。

それを探るための一つの手がかりとして、1906年、1910年、1911年、1912年のアルマナックに発表されている宝くじの当選者名簿を用いてみよう。そこには当選順位に従って、氏名、「アルマナック番号」、場合によっては当選者の職業が記されている。掲載の時点でまだアルマナック編集部と連絡のない者は空白とされているので、当選者全員が記載されているわけではない。記載者数は、それぞれ、1906年版に22名、10年版に84名、11年版に74名、12年版に91名の合計271名である。

このわずか271名を通して、アルマナック全体の読者像を探ることはもちろんできない。た

かだかある種のイメージがつかめるという程度であろう。しかしさし当りはそれによってイメージを描き出してみよう。

〔地域別分布〕

当選者の住所を地域別に分けてみると次のようになる。

ジャワ島（合計 207名）

ジョクジャカルタ 24名

中ジャワ 95名

東ジャワ 63名

西ジャワ 17名

バタヴィア 8名

ジャワ島外（合計 27名）

これらの人々の居住地を示すと次の通りである。

マドゥラ島 6名

スマトラ島 10名

パレンバン(3) コタラジャ（アチェ州） シグリ（アチェ州） ディリ

パダン(2) パダン・シデンプアン バンカ島

その他の諸地域 11名

バリ島 ポンチアナック スラウェシ島(2) ロンボク島(2) マカッサル(3)

マナド バンジャルマシ

これらの分布がアルマナックの現実の読者層の所在地をある程度にせよ反映していると仮定すれば、次のような傾向を認めることができよう。

- ①読者は植民地の全域に及んでいる。西はスマトラのアチェから東はスラウェシ島のマナドまで広範囲にわたっている。
- ②ジャワ島、とくにジョクジャカルタと中ジャワに集中している。それに次いで東ジャワが多く、中東部ジャワで全体の8割弱を占めている。
- ③これらの住所を個別にみていくと、都市部が圧倒的に多い。しかし、大都市に加えて中小都市、とくに、県庁所在地、郡庁所在地のような都市も散見される。

なお、1912年版には同じアルマナック・ムラユについて、別の会社（ジョクジャカルタの J. van Gorkom 薬局）がスポンサーとなって24名に銀時計及びニッケル時計が賞品として出されている。それを地域別にみると次の通りである。

ジョクジャカルタ 1, 中ジャワ 6, 東ジャワ 2, 西ジャワ 1, マドゥラ島（バンカラ

ン) 1, ロンボク島 (マタラム) 1, イリアン (マノクワリ) 1, スラウェシ島 (バラニ
 パ) 1, スマトラ (ブキテンギ, ケタウン) 2, バンカ島 (ムントク) 1

これをみると全体の傾向は先と同じく、インドネシア全域に及んでいる。イリアン、バンカ
 島、スマトラベンクルー地方 (ケタウン)、ロンボク島など思わぬ地域からの当選者も散見さ
 れる。

〔職業別分布〕

次に当選者とともに記された職業をもとにそれを集計してみると次のような結果が得られ
 る。なお、すべてについて職業が記載されているわけではない。また、集計中には、J. van
 Gorkom 薬局をスポンサーとする当選者も含まれている。中国名をもつ者が27名ある (これ
 らのほとんどは職業の記載がなく、記載されている場合も商人 *berdagang* ないし *handelaar*
 とあるにすぎない。これらのほとんどが商業従事者と考えてよいだろう。但しひとりだけ
wijkmeester (中国人居住区差配人) がみられる)。他に G.E.V. von Mauw というドイツ人
 風の名を持つ者1名が記載され、職業はクラークとある。

それ以外の人々についての職業は多岐にわたっているので、具体的なイメージを得るため
 に、複数回出てくるものから順に掲げ、次いでそれをカテゴリー別にまとめてみよう。

記載された職業一覧 (数字は人数、記載されない場合は1名、なお必要に応じて原語を挿
 入した)

副郡長 10, 郡役所勤務 8, 原住民書記官 7, 測量師 7, 郡長 5, 原住民巡査部長
 (*inlandsche sergent*) 5, 副郡長書記 5, アヘン局助手 (*helper Opiumregie*) 5, 助教師
 5, 村長 4, アヘン局役人 (*mantri*) 4, 村の水利役人 (*mantri ulu-ulu*) 4, 地方裁判所
 書記 3, 下級役人 (*mantri*) 3, 原住民車掌 3, 副県長付き役人 (*juru patih*) 3, 公営
 質屋勤務 3, 苦力頭 (*mandor*) 3, 公営質屋書記 2, 警察署勤務 2, 教師 2, 村役
 人 (*bekel*) 2, アヘン販売役人 (*mantripenjual candu*) 2, 郵便配達人 2, 年金生活者
 2, (元県長及び郡長), 監督官 (コントロール) 付き役人 2, 県長, 副県長, ジョクジャ
 カルタ王家付, パクアラム王家付, マンクヌガラ王家付, ラボラトリウム勤務, 師範学校
 教師, 検察局書記, 眼科医, バティック販売業者, 医師養成学校 (STOVIA) 学生, 県知
 事付き役人, 徴税人, カンポン長, 県知事書記, 砂糖工場金庫番, 鍵番 (*juru kunci*), 村
 の書記, 電話局勤務, 鉄道書記, 職長, コーヒー園書記, 刑務所看守, 村長付き書記

さて上に掲げた職業の一覧から浮かび上ってくる当選者 (そしてそれを拡大した読者) の像
 は次のようなものである。

- ①郡長 wedana 及び副郡長，郡役所勤務など，郡レベルに関わるインドネシア人役人の数が顕著である。(28名)
- ②さまざまな職域の書記層が数多く含まれている。(17名)
- ③アヘン局にかかわる人々が11名みられる。
- ④それ以外にも，各種の下級役人が相当数含まれている。
- ⑤村落レベルの役職者（村長，水利役人等）も10人程度みられる。
- ⑥測量士，教師，眼科医等の専門職，ジョクジャカルタの各王家の関係者，年金生活者なども含まれている。

上に掲げた人々には，現実のアルマナック・ムラユの読者層を多少なりとも反映しているであろう。

華人（多分プラナカン）は全体の2割程度でそれ以外はインドネシア人からなる。このアルマナックの刊行や販売の過程で華人の商業ネットワークが存分に活用される一方，現実の読者の圧倒的多数はインドネシア人自身であったことを示している。

これらのインドネシア人読者は，原住民エリートの中間層もしくはやや下層を構成する人々であった。また，大都市に居住する官吏よりも，中小都市の中下層役人の方が多くみられた。

そこから窺えるのは，次第に裾野を広げていく植民地行政のネットワークにおいてその末端を担うインドネシア人の俸給生活者の間に，このようなアルマナックが次第に浸透していく状況であろう。

それではジャワの各地でアルマナックを読んでいた人々はどのくらいの数に達していたのであろうか。その手掛りを与えていると思われるのは，ほかならぬ宝くじの当選番号である。これらの番号は，1冊1冊のアルマナックに付されたものである。もしこれを1冊目から始まる通し番号であると想定すれば，各年の当選者番号のうちもっとも高位のものがその年の販売部数の近似値を示していると考えてよいだろう。

そこで上に述べてきた各年の当選番号のうち最小のものと最大のものを示すと次のようになる。

年	最小番号	最大番号
1906	3,425	7,630
1909	753	39,115
1910	6	45,600
1911	79	51,742

ここに示されるように，最小当選番号として1桁台，10桁台，100桁台があることは，これ

らの番号が1から始まる通し番号であったことを十分に予想させる。とすれば、1909年当時においては、少なくとも39,115部以上は販売されていたこと、同様に1910年には45,600部以上、1911年には51,742部以上が販売されていたと想定することができよう。

これらの販売部数はおどろくほど大きな数字である。先にみた、バライプスタカ版のアルマナックと比しても、販売部数においてひけを取らない。

これが示しているのは、ブニン社のアルマナックが出版産業として大成功を収めていたこと、営業的にみて大いにもうかるものであったということであろう。ブニン社のアルマナックが、原住民の官吏層を中心に全国各地で読まれ、その読者数も数万人に達していたことには、いくつかの理由が考えられる。

すでに見たように販売ネットワークが広範囲にでき上っていて入手しやすかったこと、宝くじのような営業政策が成功を収めたことが先ず考えられよう。

しかしもっと基本的な理由は、このアルマナックが毎年便利で役に立つ情報を盛り込んでいたということに尽きる。

第一はいうまでもなく暦と年間行事にかかわるさまざまな情報である。

第二はアルマナックの中心部分をなす人名録の有用性である。

これら二つの情報が読者の役に立つものであったことはいうまでもない。しかしそれに加えて、アルマナックに付録のように付されていた読み物欄も読者の興味を喚起したことであろう。以下はこれらの点について述べてみたい。そのうち、筆者の関心は最後の点、特にタン・チュック・サンが編集を担当した時期に掲載されたさまざまなシャイールにあるので、その点を特に論じてみたい。

しかしⅣでそれを論ずるに先立って、このアルマナックで示されている「暦」のありようを紹介し、「暦」をめぐる時間と空間の意味について考察しておきたい。

3. アルマナックをめぐる時間と空間

(1) 時間の区分と並列——カレンダーの意味論

本稿のⅠ、Ⅱですでにみたのと同様に、ブニン社アルマナックも冒頭部分はその本来の機能、とくにカレンダーに充てられている。

いま1903年についてその部分をみると次のようになっている。この編成は他の年においても同様である。

1903年における日・月食

1903年には4回にわたって日食・月食があるが、ジャワ島とマドゥラ島からは二度だけが観察される。

1. 部分月食。4月12日ポンの日曜日、早朝5時42分。
2. 部分月食。10月6日クリオンの火曜日、夕8時48分から12時2分まで。¹³⁾
時間はすべてバタヴィア時間による。

次に祝祭日の一覧が次の通り示される。

- オランダ人祝祭日。1月1日の新年、8月2日のエンマ王女の誕生日、8月31日のウイヘルミナ女王の誕生日、これ以外はすべてキリスト教の祝祭日（4月10日、12日、5月21日、31日、12月25日）
- イスラム人 (bangsa Islam) の祝祭日。
イスラムの祝祭日（年間6日）が掲示。
- スラカルタ及びジョクジャカルタ王家の誕生日と即位日。
スラカルタ王家のパクブオノ10世の誕生日及び即位日、ジョクジャカルタ王家のハマंकブオノ7世の誕生日及び即位日、同じくジョクジャカルタ王家王子ハマंकヌゴロの誕生日及び即位日、スラカルタのマंकヌゴロ王家7世の誕生日と即位日とが、この順序で掲載されている。従って、カレンダーの順序とは異なっている。
- 中国人祝祭日。年間12日の祝祭日が記載されている。

これらのうち、イスラム、ジャワ（スラカルタ及びジョクジャカルタ）、中国の祝祭日はそれぞれの暦日（イスラム暦、ジャワ暦、中国暦）で記されているので、それぞれが西暦の何月何日に当たるのかが末尾に示されている。つまり、西暦を基準にしてそれぞれ異なる四つの暦日が結びつけられていることになる。

西暦を基準にして異なる暦を並列するところにアルマナックの第一の意義があった。

そのことは、祝祭日に続いて示されている月ごとのカレンダーにおいても同様である。表2に示したのは、1903年1月のカレンダーである。

ここから知られるように、Januari 1903（1903年1月）という枠が先ず決められる。一番左端の欄はその月の1日から31日までであるが、それは「オランダの日付け」（tanggal Ollanda）と記されていることに注目されたい。つまり、この日付けを基準単位にして、ジャワやムラユの七曜、ジャワの市場暦、ジャワの占いのサイクル、中国暦、ジャワ暦、イスラム暦が比較対照されるとともに、一枚の紙の上に横並びにして並置され、それが一目瞭然のうちに見通されるようになるのである。換言すれば、それぞれ別の暦、したがって別の時間区分に従って生きてきた人々の時間が、西暦（つまりはオランダ人の暦）によって結合される。それは別の世界を流れていた時間が、一定の換算率で換算されて均質化されることである。このような時間の

13) ポン及びクリオンはジャワの5日制市場暦の名称。これは次の5日をもって構成される。Wagé, Kliwon, Legi, Paing, Pon。

表2 1903年1月のカレンダー

Tanggal Ollanda.	Gambar boelan.	Hari.	Pasaran.	Wokee.	Taoen Tjina Djiem-Ien 2453. Maha Radja Kongsoe XXVIII.	Taoen Djawa Bé 1832. Taoen. Arab 1320.	Pranoto Mongso taoen 60.			
1*	☾ ○ ☾ ●	Kemis	Paing	Tambir	3	Tjap djie-Gwee (30)	1*	Sawal (29)	11	VII (43)
2		Djoemahat	Pon		4		2		12	
3		Saptoe	Wagé		5		3		13	
4		Minggoe	Kliwon		6		4		14	
5		Senèn	Legi		7		5		15	
6		Slasa	Paing	8	6	16				
7		Rebo	Pon	9	7	17				
8		Kemis	Wagé	10	8	18				
9		Djoemahat	Kliwon	11	9	19				
10		Saptoe	Legi	12	10	20				
11		Minggoe	Paing	13	11	21				
12		Senèn	Pon	14	12	22				
13		Slasa	Wagé	15	13	23				
14		Rebo	Kliwon	16	14	24				
15		Kemis	Legi	17	15	25				
16		Djoemahat	Paing	18	16	26				
17		Saptoe	Pon	19	17	27				
18		Minggoe	Wagé	20	18	28				
19		Senèn	Kliwon	21	19	29				
20		Slasa	Legi	22	20	30				
21		Rebo	Paing	23	21	31				
22		Kemis	Pon	24	22	32				
23		Djoemahat	Wagé	25	23	33				
24		Saptoe	Kliwon	26	24	34				
25		Minggoe	Legi	27	25	35				
26		Senèn	Paing	28	26	36				
27		Slasa	Pon	29*	27	37				
28		Rebo	Wagé	30	28	38				
29		Kemis	Kliwon	1*	Tjia-Gwee	29	Doelkai dah (30)	39		
30		Djoemahat	Legi	2		1		40		
31		Saptoe	Paing	3		2		41		

出典：[AMB 1903]

均質化が、植民地支配の均質的な拡大と深化、とりわけて植民地官僚制の拡大と深化によって必須の条件であったことはいうまでもないだろう。人々が同一のタイムスケジュールによって生活を区切っていくことは、官僚制が作動する上で最も重要なことだからである。このことは又、等質で一律な公文書が公共性を持つ上での必須条件でもあったから、時間の均質化ということは、そこで均質な公文書が還流するということと分ち難く結び付いていたであろう。

アルマナック・ムラユの「アルマナック」が示すのは、時間の均質化と等質な公文書の還流という19世紀末頃から次第に顕著になっていく状況であったといえることができるであろう。

(2) 官僚共同体の時間と空間

アルマナックが上に述べたような均質化・等質化と結びつく以上、アルマナックが植民地官僚制の担い手たちに何よりも先ず用いられたこともまた、理の当然であった。

すでに再三みてきた通り、アルマナックの本体部分、全体の8割近くは植民地政府の行政とそれを担う人々の人名録で占められていた。

1903年版アルマナックについてその編成をやや詳しくみると次の通りである。

人名録の部分は、39ページから257ページまで220ページに及びこの年の全ページ数の81%に達している。人名録はオランダ本国植民大臣、植民地総督以下の次の職域に及び、それぞれについてその就任年月日が末尾に記されている。それらの職域は次の通りである。

◎オランダ中央政府

◎オランダ領東インド中央政府

総督

東インド会議 (Raad van Hindia-Nederland)

陸軍

海軍

◎ジャワ及びマドゥラ政府

バンテン州（セラン、アニャル、パンデグラ、チャリンギン、レバックの各県）長官、副理事官、県長、副県長、郡長の名を掲載。この内、県長以下はインドネシア人。その人数は合計で26名、各県平均5名のインドネシア人名が記載されている。

以下バンテン州とほぼ同様の編成で各州の人名録が掲載される。それらを州ごとに記載すると次の通りである。なお末尾に付した数字は、オランダ人名を除く名前を数え上げた人数、カッコ内はその内、中国名やアラブ系住民として記載された数を集計したものである。

この内、中国名は中国人居住区のマイヨール、カピタンなど、アラブ名はアラブ人居住区の通訳官、代理官などとして記載されている人々である。

〈各州別の人名録記載人数〉

バタヴィア州（バタヴィア、メステル・コルネリス、タンゲラン、ボゴール、クラワンの各県） 77(33)

プリアンガン州（バンドゥン、チアンジュル、スカブミ、スメダン、ガルート、スカプラの各県） 71(3)

チェリボン州（チェリボン、インドラマユ、マジヤレンカ、クニンガン、チアミスの

各県) 47(10)

ペカロンガン州 (ペカロンガン, バタン, テガル, プマラン, プレベスの各県) 48
(9)

スマラン州 (スマラン, サラティガ, ケンダル, デマック, グロボガン, パティ, ク
ドゥス, ジュパラの各県) 74(22)

レンバン州 (レンバン, トゥバン, ボジョネゴロ, ブローラの各県) 38(8)

スラバヤ州 (スラバヤ, シドアルジョ, モジョクルト, ジョンバン, グレシック, シ
ダユ, ラモンガンの各県) 56(16)

マドゥラ州 (パメカサン, スメネップ, バンカラン, サムパンの各県) 35(7)

パスルアン州 (パスルアン, バンギル, マラン, プロボリング, クラクサアン, ルマ
ジャンの各県) 49(11)

ブスキ州 (ボンドウオソ, ジュンブル, パナルカン, バニェワンギの各県) 27(3)

バニェマス州 (バニェマス, プルオクルト, プルボリング, バンジャルネガラ, チラ
チャップの各県) 31(1)

ケドゥ州 (マゲラン, デマングン, プルオルジョ, クトアルジョ, クブメン, カラン
ガニヤール, ウォノソボの各県) 54(8)

ジョクジャカルタ州 4(3)

スラカルタ州 12(6)

マディウン州 (マディウン, ガウイ, マゲタン, ポノロゴ, パチタンの各県) 31(3)

クディリ州 (クディリ, トゥルンアゲン, トゥレンガレック, ガンジュック, プリタ
ルの各県) 42(4)

以上がジャワ及びマドゥラ政府として記載された内容の概要である。このうち、ジョク
ジャカルタ, スラカルタの2州については、相当に詳しい人名録がアルマナックの後半部
分に掲載されている (後述)。

ひき続いて人名録は次の構成で掲載されている。

◎ジャワ及びマドゥラ島のコントローラー (監督官)

合計164名の監督官及び33名の監督官候補 (Aspirant-Controleur) の氏名。これらはすべ
てオランダ人である。

◎オランダ領東インド最高裁判所

◎ジャワ司法会議 (Raad van Justice)

これらの二つはいずれも植民地司法制度の中樞を担う人々で、すべてオランダ人であ
る。

◎ジャワの弁護士及び訴訟代理人

54名の名簿で、すべてオランダ人である。

◎ジャワ及びマドゥラの地方裁判所 (Landraad)

これら各州の各県ごとに設けられている裁判所で、裁判長、検事、宗教裁判官 (Penghulu)、裁判官付書記 (Griffier) 等の名が記載されている。裁判長と裁判官付書記はオランダ人、それ以外はインドネシア人であり、また、オランダ人はいくつかの裁判所を兼務する場合も多い。これらの裁判所は原住民裁判所と呼ばれたもので、通常の裁判 (民法、イスラム法等) はここで取り扱われた。以下に各州ごとに、記載されたインドネシア人を集計してみよう。

バンテン州 9, バタヴィア州 12, プリアンガン州 17, チェリボン州 10, ペカロンガン州 15, スマラン州 26, レンバン州 12, スラバヤ州 21, マドゥラ州 16, パスルアン州 16, ブスキ州 12, バニュマス州 15, ケドゥ州 19, マディウン州 12, クディリ州 14。

ジョクジャカルタとスラカルタの二州は州裁判所扱いとされ、5名のインドネシア人名が載せられている。

これらの地方裁判所関係者のうちインドネシア名の総数は231名となる。

人名録はひき続いて「外領」(ジャワ及びマドゥラ以外の植民地領土)の地方行政組織が取り扱われる。こちらは、記載方式がジャワに比べて簡単であり、又、中国人やアラブ人の名が多くなる。それは、中国人居住区の長、アラブ人社会の長の名がそれぞれの行政区ごとに必ず記載されているからである。その概要を以下に記そう。カッコ内は先と同じく中国名、アラブ名の数を示す。

◎外領植民地政府

西スマトラ州政府 (Gouvernement) すべてオランダ人、パダン低地 10(9), パダン高地州 (Residentie) 1(1), タパヌリ州 4(4), ベンクルー州 2(2), ランボン州 2(1), パレンバン州 8(7), スマトラ東沿岸州 21(19), アチェ及び周辺政府 (Gouvernement) 3(3), リアウ及び周辺州 (Residentie) 13(13), バンカ及び周辺州 18(12), ビリトン副州 (Assistent-Residentie) 8(5), 西ボルネオ州 20(17), 南及び東ボルネオ州 35(11), メナド州 38(6), セレベス及び周辺政府 (Gouvernement) 83(13), テルナテ州 7(4), バリ及びロンボック州 51(6)

これらの外領の政府機構に関わる人名録中原住民合計は324名、内中国名・アラブ名の者は133名である。

これにひき続いて外領の司法制度の名鑑が掲げられる。

◎原住民裁判所の関係者は223名、中国名の者7名を含んでいる。

次は視学官、各地の師範学校の学校長、教務主任等の主たる教育関係者の名簿が掲げられる。

◎原住民教育関係 合計 32名

この後に、マドゥラ島の軍組織と将校団39名（すべてインドネシア人）及び、名誉将校として将校位を得たスラカルタとジョクジャカルタの王族たち17名の名前が記されている。

さて、この後はスラカルタ、マンクヌガラ、ジョクジャカルタ、パクアラムのそれぞれの王家の王族、王宮役人、所領地の官吏、王宮付き裁判所関係者、王宮付き軍隊の将校、警官等の名前が逐一記載され、その数は次の通り多数に及んでいる。各王家ごとに一括してその数を示すと次の通りである。

スラカルタ王家	289名
マンクヌガラ王家	110名
ジョクジャカルタ王家	374名
パクアラム王家	32名

これらの合計数は805名、そのいずれもがさまざまなランクの貴族称号をもつジャワ人である。

これをもって長大な人名録は終るが、なお末尾に、この1年間の変更の補遺として65名の人物の名が載せられている。内1名は中国名を有している。

以上に示した人名録についてそこに掲載されたインドネシア人の総数は、2,419名。このうち中国系、アラブ系の人々の数は288名である。これらに加えてオランダ人の官吏名が示されている。その概数は400名程度であるから、およそ、3,000名の官吏がこのアルマナックに載せられていたことになる。

このうち、オランダ人（各種の中樞官僚と監督官など）がこのアルマナック・ムラユを座右に置いていたとは考えられない。何故ならば別にオランダ語版のアルマナックが刊行されていてはるかに詳細な名簿が掲載されていたからである。

こうしてみると、およそ2,500名程度の原住民官吏とこれらの官吏の毎年の変動（人事異動）に関心を寄せる人々が、このアルマナックの第一の読者層であったことになるだろう。先にも述べた通り、1910年当時において6万部ものアルマナックが販売されていたとすれば、それは年々増大する植民地官吏そのものがアルマナックへの強い関心をもち続けたことを示す。

それは、アルマナックに掲載された人名録の全体の中に自分自身や親族関係であれ単なる利害からであれ自分の関係者の相対的な位置を見い出し、それぞれに「所を得ている」ことを了解し（満足すると不満であるとを問わず）、それを通して、「官僚共同体」の存在とそれへの帰属意識とを確認する場であった。

アルマナックはその意味で植民地政府の姿と形を官僚名簿という具体によって示すものであった。その示し方は、一冊の本のうちに「書き言葉」を通して行われた。オランダ国旗（三色旗）や豪壮な総督官邸が植民地国家の共同性をシンボルとして示すものであったのに対し、こちらは同じ共同性を具体的な人の名前の連なりとそのピラミッド構造によって示していた。共同性はこのようにして植民地をおおい始めていたのである。

Ⅳ シャイールとその時代

次のことに先ず留意しておきたい。それは、今まで述べてきたようにアルマナックがたんに官僚とこれを取りまくエリートたちの人名録であるだけなら、おそらくこれほどに販売はされなかったであろうということである。ブニン社版のアルマナック・ムラユを特徴づけこれに読み物としての魅力を与えていたのは、巻末部分を飾っていたシャイールないし物語形式の散文であった。

それはブニン社のアルマナック・ムラユだけでなく、アルブレヒト版、バライプスタカ版のいずれにも掲載されていた。それらの一覧を表3に掲げよう。

ここに掲げられた作品群のうち、量的に多いだけでなく読み物としてももっとも興味深いのは、1889年から1904年にかけてブニン社版アルマナックに掲載されていた30数編のシャイールであった。

そこで、Ⅳではこれらのシャイールについて論じてみたい。

1. タン・チュック・サンのシャイール

これらのシャイールは、タン・チュック・サンが編集に携わって以来登場し、彼が編集から退くとともに姿を消す。そして、すでにみたようにタン・チュック・サンはその登場とともに、自らの自信を披瀝するように一編のシャイールを編んでいた。それは、これらのシャイールがすべて彼自身の手によって編まれたことを強く示唆している。その一つ一つを詳しく論ずることは後日に譲るとして、ここでは先ず、その主要なものについて、シャイールの主題を概観しておこう。

1889年

- Sjaïr jang mengarang (「シャイールで綴る」) は、「タン・チュック・サンがジョクジャ（カルタ）でアルマナックを綴る」を Sandiasma の形式で織り込んだもの。その内容についてはすでにⅢ-1 で見た通りである。
- Sjaïr hal adanja ... (「ジョクジャカルタの強盗団の悪業についてのシャイール」) は、タイトルの通りかつてこの街を跳梁跋扈した強盗団についてのシャイールである。

表3 「マルマナック・ムラユ」に掲載されたシャイール等の一覧

Almanak-Melajoe (Albrecht & Rusche, Batavia-Solo)

1896

1897

Sjair Djoerangan Boediman Alias Djohor Ma-anikam dengan Sultan Jahja (Terpetik dari boekoe sjair hoeroef Arab) Terkarang oleh "Boeli-Boeli." pp. 1-80

Almanak Bahasa Melajoe. Maleische Almanak (H. Buning, Djokjakarta)

1880

Sair tjeritera Sech Frits di Owenwar. pp. 140-172.

Ibaratnja tjerita dimoeaka dengan penghadjaran peningat baik. pp. 173-177.

1881

Tjerita dari perhal lelakoenna Eugenie Permeisoeri Sri Baginda Maha Radja Napoleon III di tanah karadjaän di Frankrijk. pp. 142-169.

1882

Tjerita Sri Maha Radja Watoe Goenoeng. pp. 164-169. (sair)

Tjeritanja anak miskin. pp. 169-173. (sair)

Tjeritanja tempat jang dinamakan kedoeng Pengaten di negeri Soerakarta. pp. 173-175.

Kiriman. pp. 176-183. (sair)

1883

Sair Sakintinboean, Tersalien dari pada aksara Arab kepada aksara Wolanda, oleh A. Frans. pp. 157-181.

1889

Sjair jang mengarang. pp. 255-256.

Sjair hal adanya doerhaka ketjoe di Djokjakarta. pp. 257-273.

Sjair Tan Sha-Go Nio. 274-319.

1890

Sair Kembang boeat mengiboerkan ati. pp. 1-19.

Sair Komedi Djepang. pp. 21-28.

Sair toegoeran, koetika Sri Padoeka Kandjeng Sultan di Djokjakarta merajaken hari islamnja Poetranda Kandjeng Goesti Pangeran Adipati Anom Hamangkoe Negero Soedibjo Rodjo Poetro Narendro Mataram (Kroonprins di Djokjakarta). pp. 29-43.

1891

Sair Ballon. pp. 237-254.

Sair katjintaän. pp. 255-263.

Sair Balesan Soerat. pp. 263-267.

Tjampoer bawoer (terkarang oleh pembantoe J.W.J.), Sewaktu bini moeda jang tida setia pada lakinja. pp. 268-269.

goena-goena. pp. 270-273.

permainan. pp. 273-280.

kapertjaja-an. pp. 277-283.

1892

Sair Songlò. pp. 220-257.

1893

Sair Nasehat baik. pp. 238-256.

Sair Komedi Stamboel. pp. 256-273.

Pantoen penghiboeran. pp. 273-280.

表3 つづき

1894	Sair mangkatnja Keizer Solo. pp. 1-15. Sair berdirinja Keizer Solo. pp. 15-22. Pontoen balapan Koeda di Djokjakarta. pp. 23-34.
1895	Sair Perang di Lombok. pp. 1-46. Sair aken goena peringetan pada sekalian hamba Allah, terkarang oleh pembantoe di Madioen Tio Kiat Ging. pp. 47-52.
1896	Sair Hongkiau-Lietan. pp. 243(1)-44.
1897	Hoeboengannja sjair Hongkiau-Lietan. pp. 51-52. Sair kadatengannja Sri Bagenda Radja Siam di negri Jogjakarta, koetika pada hari Djomahat 26 Juni 1896. pp. 53-64.
1898	Sair aken perpoedjian dan kahormatan bagei Sri Baginda Maha Radja WILHELMINA, jang hendak di permakotaken dan tersilakan di atas tachta karadjaän di negri Nederland. pp. 259(1)-24. Pantoen Penghiboeran. pp. 1-6.
1899	Sair Katjintaän (Dari pembantoe). pp. 269-277. Pantoen Penghiboeran. pp. 278-280.
1900	lacking
1901	Hubungan Sair Ow-Pek Tjoa. pp. 260-275.
1902	Tamatnja Sair Ow-Pek Tjoa. pp. 260-317.
1903	Sair Minoeman Keras. pp. 258-272.
1904	Sair Madat. pp. 262-288.
1905	lacking
1906	Sjair Tauladan. pp. 267-299.
1907	lacking
1908	(Pri halnja adat sopan dan lembaga dari bangsa Wolanda) pp. 1-88. (karangan)
1909	(Pri halnja adat sopan dan lembaga dari bangsa Wolanda) pp. 89-145.
1910	(Hikajat Pergiwa) pp. 80(1)-66. (karangan)
1911	(Hikajat Soerjawisésa) pp. 106(1)-65. (karangan)
1912	(Hikajat Prabakoesoema) pp. 1-72. (karangan)

表3 つづき

Volksalmanak Melajoe (Balai Poestaka, Batavia- C)

1919	Sja'ir gerétan api. pp. 167-168.
1920	
1921	
1922	
1923	Sja'ir pertimbangan Tjintailah tanah air dan tjintailah bangsa. pp. 220-234.
1924	Kenang-kenangan pada tahoen doea poeloe empat (1924), Djaini, Balikpapan. pp. 164-165. Sja'ir Volksalmanak. (iriman Tani-Widjaja, klerk Adv. en Proc. Batavia) pp. 166-168. Volksalmanak Keloearan Balai Poestaka (Boechari, Pino.) pp. 168-173. Djawaban Teka-teki Volksalamanak 1923. pp. 173-176.
1925	Salatiga, demikianlah djawaban taka-teki Volksalmanak tahoen doea poeloe empat (1924)
1926	Postspaarbank (iriman kadiroen, Weltevreden) pp. 40-45. Sja'ir tiga sedjalan. pp. 231-232. Pantoen Kerontjong. pp. 232-236. (St. P.B.) Theorie dan praktijk. pp. 236-237.
1927	Ontwikkeld (St. P.B.) pp. 206-210.
1928	Sja'ir berkirim soerat. pp.31-35.
1929	Sja'ir J.M. Dr. Tagore sampai kepoelau Djawa. pp. 122-127. Sja'ir Balasan. pp. 131-134.
1930	Rindoe kan Madjoe, O, Soematra Tanah Airkoe! oleh Or. Dt. R. Mandank. pp. 204-205. Aksinja Kasim Baba. (S. Haroen, çbalai Poestaka) pp. 207-218.
1931	
1932	
1933	
1934 & 1935	lacking
1936	Sjair Lahmoe'ddin mendjoeal iboe bapanja. pp. 239-314.
1937	
1938	
1939	
1940	

(注) *Almanak-Melajoe* (Albrecht 版), *Almanak Bahasa Melajoe* (Buning 版) [AMB], *Volksalmanak Melajoe* (Balai Poestaka 版) の各号より作成。

- 年度が空白のものは、シャイール等が一切掲載されていないことを示す。
- lacking とあるのは、その年度の Almanak が欠号のため未見であることを示す。
- (題名) (karangan) とあるのは、シャイールないしパントウンの詩形式でなくて散文体であることを示す。
- 1896年のシャイール掲載のページが243(1)-44とあるのは243ページ目から新しいページが始まって44ページまで掲載されたことを示す。他の年度についても同様である。

そこで語られているのはおおよそ次のようなことである。

かつてジョクジャカルタの街には強盗団が跳梁していた。悪行の限りを尽くして金持ちの家を襲い人を殺し火を放った。大胆不敵でわがもの顔、しまいには強盗へ入る予告文をあらかじめその家へ放り込み、その通り押し入って金品を強奪したために街の金持ちは夜になると息をひそめ夜の街にはひと一人出歩かないようになった。狙われた家はこれを防ぎ抵抗する術とてなく、それはあたかもはやり病いのひろがるのにも似ていた。

強盗団はいくつもくり返して現れた。一つの強盗団が捕まえられ姿を消すや、たちまち別の強盗団が跳梁した。現れては消えまた立ち現れるさまは、ちょうど火事がくり返し街を焼くのに似ていた。

なかでもジョヨ・ユドを首領とする強盗団の極悪非道振りはすさまじかった。役人と追っ手とをいくたびも煙に巻き、くり返しくり返し街を襲った。ついにオランダの官憲がこれを捕えるために街に現れた。さすがにオランダの大官たちの力の前にはこの一味も抗し難くすべて捕えられた。首領ユドは王宮前の広場で公開の絞首刑とされることになった。朝6時牢獄から出されたユドは6時半柱にゆわえられた。その直前ユドは絞首台を目にして不敵な笑いを浮かべた。大勢の見物人とオランダ人をはじめとする高位高官が見守るなか、朝7時にユドを乗せていた床が落ち、たちまち宙づりとなって息絶えた。

こうして街を不安と恐怖におとし入れていた強盗団は根絶やしにされた。闇の世が終わり光が訪れたのである。

- Syair Tan Sha-Go Nio (「タン・シャとゴ・ニオのシャイール」) は福建省出身の青年タン・シャと娘ゴ・ニオが国を出てからさまざまな苦勞に出会い、最後に結ばれるまでの長編の恋愛詩である (本稿では、詳細は省略する)。

1890年

この年は3編のシャイールが載せられている。

- Sair Kembang (「心楽しませる花々のシャイール」) は題名通りさまざまな花を讃えるシャイールである。ここには、ジャスミン、ラン、バラ、チェンパカなどジャワ人に親しい花だけでなく、牡丹のように中国にあってジャワでは見られない花々を含めてそのかぐわしい香りやあざやかな色を一つ一つほめ讃えている。
- Sair Komedi Djepang (「日本からきた演劇団のシャイール」) も、タイトル通りその当時ジョクジャカルタを訪れた劇団についてのシャイールである。

日本から歌劇団 (コメディ) がやってきた。興行主は福山といい、横浜からきた。王宮前の広場にテントをはって日夜興行を続けた。ジャワ人はもちろん中国人、インド人、オランダ人の老若男女がひきもきらずに見物に訪れ、興行成績も大変よさそうだ。この歌劇

団はいろいろな町の広場で興行を続けながらジョクジャカルタまでやってきたものだ。こ
こへ来たのは9月14日のことであった。

その舞い方はとても見事で曲芸にすぐれ大きなハシゴを片足で上げ、また小さな子供が
ハシゴをするする昇って舞いを舞う巧みさは息をのむほどだ。また女劇団員はこの上なく
美しい。

こうして12日間興行を続けやがて別の国へと旅立っていった。

○ Sair toegoeran (「ジョクジャカルタのスルタンが王子の割礼儀式を祝うシャイール」)

これは1889年9月16日に始まって9月30日迄2週間にわたって続いた、割礼の儀式にとも
なう王宮前広場の賑わいを綴ったものである。ちょうどその頃、先にみた日本の歌舞団も興
行中で、広場はランプの光とガメランの調べと屋台と見物人たちで連夜みたされた。王子は
当時16歳、何十年に一度の大きな祝祭の催しであったと述べられている。

1891年

○ Sair Ballon (「気球のシャイール」)

これは当時ジョクジャカルタでアドバルーンの興行が人気を集めていたことを歌ったシャ
イールである。

ジョクジャカルタにあるパク・アラム王家の王宮前広場で、巨大な風船が揚げられた。
これに乗って雲まで上るのは、Gladijs van Tassel 嬢である。この興行は8月31日に行わ
れ、切符はすべて売り切れた。広場には、ジャワの貴族と庶民、オランダ人の高位高官、
中国人をはじめすべての民族が見物にやってきた。切符は1等から3等まで分かれ、いよ
いよ気球が上る頃には、楽団が景気付けの演奏をくり返した。

「雲でのコメディ」(Komedi awan) ともいべきこの興行のクライマックスは、およ
そ、3,000フィートも上ったかと思われるその高みから、Gladijs 嬢がパラシュート(原文
では傘 payung と表現されている)で地上へ舞い降りるところであった。

この一部始終はおおよそ20分間、1,300フローリンの収入がこの1回の興行であったとい
う。Gladijs 嬢はその翌日、次の興行地シンガポールへと出発したが、そのあとしばらく
ジョクジャカルタの街では、子供たちが風船作りに熱中したことであった。

○ Sair Katjintaän (「恋のシャイール」) と Sair Balesan Soerat (「返し文のシャイール」)

これらの二つのシャイールは、付け文とその返し文という関係で二つで一本のシャイール
をなしている。そしてそれぞれが、恋文のサンプルをなしている。ある少女に恋い焦がれた
若者からの恋文と、それに心を動かされた少女の返信である。

○ Tjampur bawoer (「混載」)。ここには、いくつかの短いシャイールが混載されている。なお
これらのシャイールについては、J.W.J. なる人物の助けを得て創られたという但し書きが

付されている。

このうち「夫に従わない妻」は、夫が働きに出ている間、浮気に身をやつして夫をないがしろにする妻の話。「グナグナ」(秘薬)は、夫を妻の意のままにする秘薬の物語。¹⁴⁾「カード遊び」は、オランダ人、ジャワ人、中国人を問わずに熱中し、大金を賭けるカード遊びを歌ったもの。「信仰」は神を信ずる人々についての話、また最後の「教訓」は、サタンの甘い誘いに欺かれてはならないこと、神を信ずべきことについての教訓のシャイール。

1892年

この年は Sair Songlò (「ソングロのシャイール」) という長編が一つだけ掲載されている。

○ Sair Songlò

このシャイールは中国から題材をとる。Songliem と Aijgiok の間に生まれた Songlò という男の子が、父亡きあと次第に出世していく物語。生みの母と育ての母との間の孝養を軸に展開されていく。

なお、このシャイールの冒頭に、シャイール中の綴り字などに間違いがあっても、読者で判断して意図を読みとってほしい、これからも読者の楽しみのためにシャイールを綴っていく、という趣旨の詩句がみられる。作者タン・チュック・サンが次第に自信を深めている様子がうかがえる。また、綴り字が当時まだ安定していない状況がここには同時に反映されている。

1893年

この年は三編のシャイールが掲載されている。それぞれに以下のようなテーマが扱われている。

○ Sair Nasehat baik (「良き忠告のシャイール」)

これは、子供の躾のために読んで聞かせることを意図して書かれたシャイール。良い友達を選びなさいという忠告にはじまって、この世でアッラーの代りにになっているものは両親であること、だから必ず孝養を尽くさなければならないこと、早起きをし、いつも身だしなみを整え、歯みがきをおこたらず、衣服をいつも洗濯すること、学校へは一番に出かけてよく学び、帰りも道くさを喰わずにまっすぐに家に帰り、帰ったら先ず両親に挨拶をし、読み書き計算の復習をするといった徳目が具体的に記されている。それが、教育のために出してもらったお金を無駄にしないことであり、後の日肉体労働者として苦勞しなくてすむことでも

14) グナグナは、当時のニヤイ小説の中にしばしば登場し、ニヤイ(現地妻)がトゥアン(旦那)を意のままに操るための秘薬とされた。例えば「ニヤイ・グシマ物語」(1896年作)は、グナグナをめぐる世界のおどろおどろしさをよく伝えている [土屋 1987]。

あると述べられている。さらに、成人したら親への恩返しをし、礼儀正しくし、老父母を養うことが説かれている。

○ Sair Komedi Stamboel (「コメディ・スタンプルのシャイール」)

これは先の「気球のシャイール」や「日本歌舞団のシャイール」と同じように、当時のジョクジャカルタで興行したコメディ・スタンプルの様子をシャイール形式で綴ったものである。

なお、コメディ・スタンプルは1891年にスラバヤで結成された歌劇団。劇団の中心人物は、マヒューというフランス人の血筋を引くユーラシアンとヤップ・ゴアンタイというスラバヤ生まれのプラナカンであったという。スタンプルという劇団名はイスタンブールに由来するとされ、舞台の上ではエキゾチズムにみちた衣裳や装置とともに、東西古今の人気の高い物語が自在にアレンジされてくりひろげられた。また、バックミュージックとして当時バタヴィアなどの大都市で流行しはじめていたクロンチョンが用いられ、コメディ・スタンプルの興行とともにクロンチョンも各地にひろまっていったといわれる [土屋 1988: 170-173]。

このシャイールは1892年当時ジョクジャカルタへきたこの劇団のことを歌っているの、結成のその翌年、まさにごく初期の地方興行の様子を窺うことができる。シャイールはその様子をおおよそ次のように述べている。

現代風のコメディがジョクジャカルタへやってきた。コメディ・スタンプルといい、スラバヤのヤップ・ゴアンタイが設立した。舞台主任はマヒューですべての演目を取り仕切り、別に、ファンデルラーン (van der Laan) も舞台監督をつとめている。

演ずるのは男女の芸人、いずれも演技にすぐれ見た目もうるわしい。8月4日に舞台作りが始まり、王宮前広場の一角が柵で囲われ大テントが張られた。座席がしつらえられてチケットも用意された。チケットは値段によって等級が分けられた。

初演の夜、舞台の始まる前に音楽が奏でられた。これはオランダ風の音楽とは別でイタリアの音楽であった。舞台上の演目は千夜一夜物語を題材としたものでこのジョクジャカルタではもちろん初演であった。物語はシティ・スニンバル姫をめぐって展開された。(このあと、シティ・スニンバル姫の物語のあらすじが記される。タミール王の姫として生まれたヒロインが、悪魔の誘いを断るが奸計にはまって森をさまよう。苦難の末アッラーの慈悲をえて、ペルシャのスルタンと結ばれる。シャイールはなおおおよそ次のように続けられる。)

演目は毎晩変わり、見物人も毎夜ひきも切らずやってきた。コメディ・スタンプルはムラユのコメディで多くの美女がこれに加わった。なかでもシティ・スマンダリを演じたのはとりわけ美しく、このためかある夜ふつつり姿を消し二度と姿を現さなかった。これと

は別に中国人の楽団員がひとりこの期間中に死亡してスタンブル劇団は大きな損失をこうむった。でもジョクジャカルタでの興行は20日間に及び劇団は大きな利益をあげたことであった。

ジョクジャカルタでの興行を終えてのち、劇団はスマランへ向い、さらにバタヴィアへと向かうことになっている。また来年もぜひこの街へ戻ってきてほしい。

スタンブル劇団は立ち去ったけれども人々はいつまでも興行を忘れず、舞台上で歌われたスタンブルの歌を人々はいつまでも口ずさんだ。歌は甘美で、多くの人々に愛唱された。スタンブルはオランダ人を含めてあらゆる人々に愛好されすすんで金を払って見物に訪れた。これらがスタンブルのシャイールである。(なおここに述べられているスタンブルの歌とは、スタンブル劇団によって作られていったクロンチョン、つまりクロンチョン・スタンブルのことであろう。)

○ Pantoen penghiboeran (「こころ楽しませるパントウン」)

ここでは、シャイールに代えてムラユ世界の伝統的な詩形式パントウンが用いられている。それは、四行一連の韻の踏み方において、第一行と第三行、第二行と第四行がそれぞれ韻を踏むものである。

パントウンの内容は軽いことば遊びで、一行目と二行目で歌われたことを三行目と四行目が展開するものである。内容は男と女の心理のやりとりや軽い警句などから成り立っているが、当時の食生活の変化を反映させるような品々が所々に織り込まれている。コーヒー、ミルク、チーズ、パンなどがそれである。

1894年

この年には2編のシャイールと1編のパントウンが掲載されたが、そのいずれもがその当時のジョクジャカルタでおきた出来事を題材としている。

○ Sair mangkatnja Keizer Solo (「ソロのカイゼル崩御のシャイール」)

このシャイールは1893年3月に逝去したソロ王家のパクブウォノ9世(在位1861年-93年)を追悼するもので、それをめぐる情景はおおよそ次のように述べられている。

パクブウォノ9世が病いに倒れた時、多くの治療師と医師が祈りを捧げ手を尽くしたが病いは篤かった。王子と王女も日夜快癒を祈った。しかし、3月17日金曜日朝、9世は御年65歳にして神に召された。在位の間正義の心で国を治められた王は天国へ昇ったが、後に残された者たちの悲しみは尋常ではなかった。王宮に悲しみがみち人々のすすり泣きがつづいた。民もまた王の死を悼んだ。

太陽もこの正義の王の死を悼んで雲にかくれたために昼もなお夜のように暗く、冷たい風が吹きつづいた。街の人通りも絶えた。

総督府もまたカイゼル閣下 (Keizer Radja) の死を悼み生前の功績を称えた。カイゼルは生前から多くの勲章をオランダ総督府から授与されていたのである。

翌土曜日は葬礼の日、王の棺は王子と高位高官によって担われ、人民たち (rajat-rajatnja) も葬列に加わった。衛兵が列をなし礼砲がひびき数百人ものハジが付き従って祈りを捧げた。それを見守る人々は数千人、ために道路は埃に包まれまるで戦場の煙のようであった。しかしあたりは悲しみに包まれ涙を浮かべる者も数知れずあった。マンクヌガラ王家の前にさしかかると王家付きの軍隊が現れ、礼砲を鳴らして軍隊式の弔意を表した。

葬列が駅へ到着するとそこでも数千人もの人々が最後の別れのために集まっていた。特別列車が用意され棺はこれからジョクジャカルタへと向かうのである。列車は10数台、先頭車両に遺骸が安置され、お付きの人々が後部車両をみたしていた。

葬列の列車は出発したちまちスピードを上げて西に向った。途中クラテン駅 (スラカルタとジョクジャカルタの中間駅) に停車するとそこでも数百人もの人々が哀悼の意を捧げるべく集まっていた。やがてジョクジャカルタへ着くと数千人からの人々がこれを出迎えていた。これらの人々でトゥグ駅 (ジョクジャカルタ中央駅の別称) は一杯であった。

ジョクジャカルタ王家のスルタンもカイゼル逝去の報に接してただちに弔意を表し、人民に命じて遺体を駅まで出迎えるようにせしめた。列車から下ろされた遺体は衛兵に守られるなか、カンボン・チナからカマルボラを通りそこから東へ向って直進した。道の両側は街の人々で埋まり、物売りまで現れていた。遺体はその夜コタ・グデ (ジョクジャカルタ東南方7kmのところにあるマタラム王国ゆかりの古都) のメスジッドで一夜を過ごした。

翌朝、先王たちの眠るイモギリの丘へと到着した (イモギリはマタラム王国ゆかりの墓地、ジョクジャカルタ、スラカルタの両王家ともこのマタラム王国から分立したものである)。丘の頂きまでは傾斜がきつく難渋したが、12時には遺体はついに頂上まで運び上げられた。ハジたちの祈りを受けイスラムの導師たちによって、古式にのっとって無事に埋葬されたのである。

○ Sair berdirinja Keizer Solo (「ソロのカイゼル即位のシャイール」)

これはタイトルのようにスラカルタ (ソロ) に新しい王 (ここでもカイゼルという語が用いられている) が即位する状況を述べたもので、前のシャイールと一つになって、1893年3月当時のスラカルタをめぐる一連の物語となっている。即位の様子はおよそ次のように歌われている。

ソロの大王が逝去して以来街は静寂に包まれたままだ。13日間にわたってガメランの響きもまるでない。だが慈悲深いアラーは人民の悲しみをみて、再びよろこびを与え給う

た。

新王の即位式は日柄もよい3月30日木曜日と定められ、人民はその日に向けてよろこびを取り戻し始めた。日もまた光を増して雲にさえぎられず、即位式のために多くの人々がスラカルタへやってきた。それは数十年に一度という慶事であった。

すでに早朝から人々が街に溢れ中でもアルンアルン（王宮前広場）は人の群れで埋め尽くされた。衛兵はすでに勢揃いをして銃剣を掲げ旗を上げ、ガメランの演奏がくり返された。

昼近く理事官閣下（Kandjeng Resident）がその日王位に就くカイザルに挨拶を送り、カイザルもまた答礼をした。その後新王は馬車に乗り、その後を王族、高官、オランダ人の役人たちが続いた。見物の人たちで埋まる中を行くと、祝砲が打たれガメラン音楽がひきも切らずに鳴り響いた。馬車の列は街中をゆっくりと行き、大勢の見物人の目を楽しませた。こうしてすべての人々が新王に対する神の加護と末長い健康とを祈った。

この新王は第10代のカイゼル（パクブウォノ10世であるという意味）で、ほっそりとした身体に気品をたたえた表情、正装をして、理事官閣下とともに馬車で進まれた。道々に歓呼の声とガメランの響くなか、昼下がりに至って馬車は次々と王宮内に入っていく、招待客も帰り始めたが人民はなお留まって新王への祝いを表していた。

こうして、知恵と正義の並ぶことなきジャワの大王がここに新しく誕生したのである。



写真1 スラカルタパクブウォノ10世と理事官 De Vogel (1897年)
([Briton de Nijs 1973] より)

なおここにくり返し登場する理事官閣下とは、当時のスラカルタ王侯領理事官 De Vogel のことを指すであろう。

この理事官と新王とが、1897年当時、腕を組み合っている有名な写真がある（写真1を参照）。なお、このシャイールの最後に示されている「知恵にみち高慢でない」（*bidjak... tida djoemawa*）とは、のちこのパクブウォノ10世（在位1893年-1939年）に奉られた別称で、王は「知恵ある王」（*ratu wicaksana*）とも称され、半世紀近くにわたってスラカルタ王宮の安寧を実現した。しかしその背後にオランダ植民地政府がぴったりと付き、王宮は植民地政府に支えられながらこれと協働してスラカルタの秩序を作り上げたのである。即位式における理事官に腕をとられた写真は、両者のこうした関係を象徴的に示すものであったといえよう。

○ *Pantoen balapan Koeda*（「ジョクジャカルタの競馬についてのパントウン」）

パントウンの形式でうたわれたものだが、先のパントウンが特に何かを物語ることがなかったのに対し、こちらは当時のジョクジャカルタで見られた新しい出来事、すなわち競馬の状況を伝えたものである。その内容も興味深いのであらましを以下に述べておこう。

競馬はスラカルタでいち早く始められたがジョクジャカルタでもその例にならい、もっと良いものを作ろうとした。こちらではスラカルタよりも3年遅れたが、会員が募られ資金が集まって、デマンガ村近くに馬場が造成された。元は水田であったが見事な競馬場になり、「マタラム競馬会」（*Wedloop-Societeit Mataram*）と命名された。

最初の競技会の日は三日間と定められて準備が進んだ。それは1893年10月28日の土曜日から30日の月曜日にかけての三日間であった。

街もこの話題でもち切りとなった。スルタンも持ち馬を出走させることに決めたほどで、王族、高官も開催を待ち遠しく思っていた。

土曜日は朝から大勢の人々が見物にやってきた。デマンガ村は街から20パール（1パールは約1,500 m）ほど離れていたがある者は馬車で別の者は歩いてそこに集まった。王宮も街もこの日はひっそりとし、店もすべて閉めて、街中が競馬の見物に出かけたようであった。また役所も閉められ役人たちでさえ見物に行ってしまった。

スルタンは軍服姿で乗りつけ、王族貴族も一斉にひき続いた。馬車の後ろには数百もの乗馬隊が続いた。ジョクジャカルタの理事官閣下はもちろん、スラカルタからも理事官閣下が王子とともにやってきた。デマンガの村にオランダの大官、王と王族、貴族と従者、人民が集まり、鮮やかな色彩と華やぎに包まれて、まるでそこに一つの国ができたかのようにであった。

オランダ人、王族らはそれぞれに出走馬を連れてきていた。また見物人もすべての民族からなっていた。ガメランが響き歌声が高く流れた。

9 時頃に第 1 レースが始まった。出走馬は 5 頭で飛ぶように走り、優勝馬にはスルタンからの賞金 200 (ルピア) が与えられた。優勝馬は Beauty で、次の Nelly には 50 ルピアが与えられた。以下、第 2 レースは 4 頭が出走、Carmen が優勝して 400 ルピアを得、Mascotte には 80 ルピアのプレミアが付けられた。以下第 3 レースは 9 頭で勝ち馬は Gay-time、賞金は 500 ルピア、Kiah Saroe Tomo にプレミア 100 ルピア、第 4 レースは 5 頭出走で勝ち馬は Karel、賞金は 250 ルピア、Naughty にプレミアがついて 50 ルピア、第 5 レースは 10 頭出走で勝ち馬は Herman、賞金は 250 ルピア、二着は Andjani で 50 ルピア、第 6 レースは 5 頭出走で勝ち馬は Esclarmonde、賞金 500 ルピア、Arlequim にプレミアが付いて 100 ルピア、第 7 レースは Aleida が勝ち 300 ルピアの賞金を得、Parasiet にプレミアが付いて 60 ルピア、第 8 レースは勝ち馬に 75 ルピア、プレミアが 25 ルピアであった。賞金にはスポンサーがつきスルタンをはじめ、栽培会社や有力貴族が賞金を出した。

この日はこれで終り、来賓も一般の観客も満足して帰っていった。翌日も翌々日も競馬が行われ、毎夜街では祝宴が張られ、電灯 (lampoe electrics) の光に照らされて街は明るく輝いていた。

1895年

この年は 2 編のシャイールが掲載されている。

○ Sair Perang di Lombok (「ロンボック戦争のシャイール」)

これは、ロンボックをオランダが征服するまでの長大な叙事詩で 46 ページに及んでいる。物語はロンボック島に住むササク族が悪虐なロンボック王に反乱を起したことに始まり、ササク族を助けようとするオランダ、バリの諸王と結んでこれに対抗するロンボックの王、王の再三にわたるオランダに対する裏切り。そしてオランダが神の援けを得てロンボックの首都マタラムを攻めこれを制圧するまでを、綴ったものである。

オランダによるロンボックへの干渉は 19 世紀半ばから始まっていたが、このシャイールは 1894 年のロンボック出征を題材にしたものと思われる。¹⁵⁾

○ Sair aken goena . . . (「アッラーの僕に役立つシャイール」)

このシャイールはマディウンの Tio Kiat Ging の援けを得て綴られたと注記されている。

1896年

この年は長編のシャイール 1 編が掲載されている。すなわち Sair Hongkiau-w-Lietan (「ホンキウ-リタンのシャイール」) である。中国の物語に由来するが、本稿では詳細は省略する。

15) このシャイールはのちにブニン社から 1 巻本として刊行された。
Tjerita Pakerdjään Prang Lombok. Yogyakarta, Buning. (1906?)

1897年

この年は前年に掲載されたシャイールの続編のほか、当時のジョクジャカルタでの出来事を綴ったシャイール1編が掲げられている。

○Hoeboenggannja Sjair Hongkiauw-Lietan (「ホンキヤウ-リタンのシャイール」続編)

これは文字通り前年のシャイールの続きである。

○Sjair kadatengannya Sri Bagenda Radja Siam... (「シャム国国王のジョクジャカルタ訪問のシャイール」)

シャムの国王チュラロンコン大王(在位1868年-1910年)は、15歳で父王モンクットの後を継いだ。ジャワ、シンガポール、インド、ビルマを旅行し植民地統治の実情を視察し近代西欧文明の吸収につとめたという。ジャワを訪れたのは1896年6月のことで当時チュラロンコンは53歳の働き盛りであった。このシャイールは、国王がバタヴィアからさらにジョクジャカルタへまで足を伸ばされた時の様子を、ほぼ次のように述べている。なおこのシャイールの全体のタイトルは次の通りかなり長いものである。

「1896年6月26日金曜日、ジョクジャカルタを訪問されたシャム国国王陛下のシャイール」

冒頭に国王の正式の称号と誕生日、王妃の名と誕生日、第一王子の名と誕生日が記される。

ジョクジャカルタ御訪問の知らせはすでに数週間前から届いていた。御宿泊所と定められたトゥグ駅の迎賓館は美しく飾り立てられ、オランダ国旗とシャム国旗が掲げられた。シャム国旗は白象をシンボルとしていた[現在のタイ国旗とは別]。

旗はシャム国旗が真中にオランダ国旗が左右に立てられ、それぞれ客と主人であることを示していた。館の中もすばらしい家具で飾られ賓客の訪問を待っていた。金曜日の夕方4時になると数千もの人々がトゥグ駅に集まってきた。老若男女すべての民族が王を一目見ようというのであった。お迎えするのは、副理事官閣下と監督官閣下ですでにトゥグ駅に控えておられた。

お召列車も美しく飾られ、シャムの音楽が絶え間なく奏された。王と王妃が列車より降り立つと、少女が二人花を献げた。それから王と王妃は馬車に乗った。副理事官閣下が向い合わせに座った。王様は洋装で表情に輝きがあり沿道の歓呼を受けていた。王妃も洋装でダイヤのネックレスが光っていた。

トゥグ駅の館には理事官閣下、師団長閣下、ジョクジャカルタ王家の王子、マンプミ王子、パクアラム王子らが出迎えに上っていた。馬車がお着きになるとまず理事官閣下がご挨拶された。王はことのほかごきげんうるわしくお出迎えのひとりひとりに返礼をなされた。

翌日は土曜日、理事官閣下が先ず館にこられ、程なくしてスルタンもお出になられた。スルタンのお出ましはお客に対する最大の表敬、やがて王はクラトン（王宮）へと案内された。

シャム王の乗られる馬車は四頭立て、王はいたく満足されて沿道の歓呼に笑顔で応えておられた。王宮ではスルタン自らが案内に立ち一つ一つ宝物をお見せした。そのあと王はパクアラム家へも訪れ（両王家の間の距離はわずか1km 足らず）、そこでも王宮内を案内された。その夜はその後「Rumah bola」（宴会の館）で大宴会が続けられた。スルタンもパクアラムも理事官閣下もこの宴に加わり、シャム王がお戻りになったのはもう明け方近くになってからのことであった。

シャム王が街に滞在中はいつも見物の人々が絶えず王のおよろこびの様子もひとしおであった。王はボロブドゥルとプランバナンの両寺院、それにタマンサリ（ジョクジャカルタの最初の王宮、水の宮殿と呼ばれ地下道が巧みに作られている）も訪れ、地下の建築物を一つ一つご覧になられた。

シャム王とジョクジャカルタの王族との間にはさまざまな記念品がやり取りされ、又、シャム王は王族にシャムの勲章を賜った。日はたちまち過ぎ王がお発ちになる日、スルタンは駅までお見送りになり、握手をされて旅の無事を祈られた。

1898年

この年はシャイール1編とパントウン1編が掲載されている。

- Sair aken perpoedjian...（「オランダ王国の玉座へお就きになられるウィルヘルミナ女王陛下を敬い称えるシャイール」）

このシャイールはタイトルの通りウィルヘルミナ女王への頌詞である。ウィルヘルミナ（1880-1962年）は、1890年に王位を継いだが母親エンマの摂政期を経て1898年に正式に即位しその後1948年迄王位に就いていた。オランダ植民地支配の最後の時代と重なった女王であった。従ってこのシャイールは、この年正式な即位が予定されていたウィヘルミナに献じたのである。

頌詞は、もし卑俗なムラユ語や市場用ムラユ語（melajoe pasar）が交ってしまいましたら何とぞお許しあれ、という断り書きから始まる。そのあとで、ウィルヘルミナの生い立ちが述べられ、その女王たるにふさわしい資質が並べたてられる。賢くこころやさしく外国の言葉もよく理解され正義に厚くヨーロッパの王室王族のおもてなしにも欠くところなくというように美点と美德がうたわれる（賢く聡明な、pandai dan bidjaksana という語がリフレインされる）。

続いてこの年（1898年）8月31日、18歳の誕生日に挙行される即位式についてその様子を

あらかじめうたい上げる。即位式の衣裳については、この年のアルマナックの見開きに掲げられたウィルヘルミナ女王の写真によってどうか想像されたいと述べている。

また即位式にはヨーロッパ各地の王族が列席すること、このオランダ領東インドからも、ボルネオはクタイのスルタン、スマトラはシアック・スリ・インドラプラのスルタン、ソロのスナン、マタラム（ジョクジャカルタ）のスルタンらの諸王、陸海軍の将校すべてがお祝いに参上することがうたわれる。だが追って沙汰があり、総督のおられるバタヴィアにいくだけで十分とのこと、そこで東インド各地の王族大官がその日はバタヴィアに集まるようになるかも知れない、もう少し様子をみてみようということで、このシャイールはとじられている。

○ Pantoen Penghiboeran (「こころ楽しませるパントウン」)

これはパントウン形式で兵士の位が上ってついにオランダ領東インドの総督に至りそこで活躍する様子を軽妙に綴ったものである。

1899年

この年は、比較的短かいシャイール1編とわずか3ページたらずのパントウン1編とが掲載されているに過ぎない。

○ Sjair Katjintaän (「恋のシャイール」)

このシャイールは別の者の援けを得て綴られたと注記されている。その別の者が綴ったシャイールはある美少女を見初めたものであるが、作者が特異な立場にあることが興味深い。内容はおおよそ次の通りである。

私 [シャイールの作者] は T.K.G. といい、もう長いこと M 町に住んでいる。家は市場の北側の侘しい貸し家で、今は職もない。前はアヘン請負の使い走りになりわいとしていた。金はなくても気分は王様、それではつれづれにシャイールを綴りましょう。

ある日散歩をしていて中国人街に足を入れたところ一人の少女を見かけた。ほっそりとした美少女で顔かたちは人形のように、歯は白くかがやき肌は白く黒目が深く澄み、どこの国にもこれほど美しい娘がいようとも思われない。髪の毛、指輪、何もかもが私の心をかき立てそれからというもの片時もその面影が離れない。どうかその娘がわが家を訪れるようにと神に祈り、祈祷師をやとったが詮ないことであった。そこで一通の手紙を書き届けることとした。もう一週間、夜も眠れず食事ものどを通らず身はやせ細るばかり、どうか哀れとおぼしめして返事をください、それが恋文の趣旨であった。

[これに対して次のような返信が、パントウンの形式で綴られてきた。]

あなたの手紙が本当ならどうか身をもって示して下さい。それなら私もそれにお応えして、朝に夕べにあなたの来るのをお待ちしておきましょう。

○ Pantoen Penghiboeran (「こころ楽しませるパントウン」)

17連からなる短かいパントウンで言葉遊び以上のものではない。ただ最後の連に、スマランから汽車に乗って塩魚が運ばれてくると述べられ、列車がまさに人や貨物を運び始めた時代の一端がはからずも窺える。

1900年

この年は欠号。

1901年

この年は、Sair Ow-Pek Tjoa 1 編のみが載せられているが、これは続編とされている。そこで、このシャイールが1900年以来連載されていたことがわかる。

1902年

この年も、Sair Ow-Pek Tjoa 1 編のみが載せられている。完結編であり、3年続きの長編のシャイールであった。

1903年

この年はシャイール 1 編だけが掲載されている。

○ Sair Minoeman Keras (「酒を飲むシャイール」)

これは15ページにわたって酒を飲むことの功罪を綴ったもの。罪を述べるのはともかく功についても仔細に述べ、最後にはいくつかのブランドを並べ立てて宣伝までしているところが、まことにユニークである。このシャイールの内容はおおよそ次の通りである。

酒を飲むことを厳しく禁じている宗教もある。しかし酒が好きな者は少なからずいる。それが現代というものだ。酒を飲んでも酔ったり怒ったりしてはならない。それは争いの因になる。酒は飲み方一つで毒にもなれば薬にもなる、友ともなれば敵ともなる。専門の医者も同じことを言っている。酒が寿命を縮めるという医者もいれば、酒は体をさっぱりさせ恐れを取り去り寿命を伸ばすという医者もいる。

医者ですら見解が定まらないのだから筆者もどちらとも言いかねる。ただ、いつも酒を飲む者にとって酒の功罪は何かを綴ろう。酒の好きな者は性格が悪くなり体もおかされる。酒で顔を赤くし大声を出し周りの人の悪口をいい争いごとをひきおこす。金を使い尽くし妻に当り散らす。酒を飲んで笑いころげるようであればそれはもう神をおそれぬしるしである。酒が度をすぎれば、話し始めてとどまることなくまた支離滅裂となる。まことに酒は邪悪なものである。

それでは酒の効能は何であろうか。酒はほどほどに飲み酔うこともなければ、人から怖れを取り去る。だからオランダ (Kompeni) も兵士の勇気を増すために酒を用いた。戦闘の際には酒が嫌いでも無理に飲ませて士気を高めた。ひとたび飲めば進んで戦場へ出、死をも怖れずに敵と闘った。

酒はまた客のおもてなしにも欠かせない。とくに祝い事の時に酒はつきもので、これなしでは大勢人が集まっても宴会は寂しいものになってしまう。さらにまた話し合いの時には酒があれば、話がはずみよい考えも得られる。

医者もいうように、健康になりたければ、酒も決して悪くない [「ただし金曜日は除く」と但し書きがある]。毎日適度に飲んで食欲を増そう。適量ならば昼間から飲んでも構わない。ヨーロッパ人もしていることだから。食事の前にジュネヴァ [オランダ風ジン] を飲んで魚を食べれば、気分爽快になること請け合いである。ジュネヴァはどれでもよいのではなく、値段は高くても A.V.H. 印を選ぼう。また、ブランディならば「三つの樽」(tong tiga) がよろしい。

これで終えよう [先に「こんなお酒のシャイールなどめったに綴られることもない」と記されている]。これは人を教え訓すのではなく、「現在行われていることをありのままにに物語っただけである (Kami tjerita teroes dan terang, Jang terlakoe zaman sekarang)」。

1904年

この年も前年にひき続いてシャイール1編だけが掲載されている。

○ Sair Madat (「アヘンのシャイール」)

前年にひき続いて「めったに綴られることもない」シャイールである。このシャイール1編を以って、タン・チュック・サンの名はアルマナック・ムラユ (ブニン社版) からはふつりと姿を消している。1905年が欠号なので、もう一年何らかのシャイールが彼によって綴られた可能性は残されているにしても、さし当りこのシャイールを以ってタン・チュック・サンの執筆活動は終わったと考えてよいだろう。これもさることながら、内容もまことにユニークである。そのあらましを以下に述べよう。

アヘンのシャイールを綴るのはそれを命じる者また禁ずる者が居るからではなく、「現代のありよう」(adanja zaman sekarang) を読者にはっきりと知ってもらうためである。どうぞ最後までお読み頂きたい。

さてアヘンは国の禁ずるところとなり、ぼう大な利潤は政府の独占となった。これまで請負権 (pacht) は中国人の手中にあり、大金持ちが生まれていた。政府が警戒していても請負権が売買されさらに何倍もの利潤が生み出された。

バリ島からは闇のアヘンが流れ込んで正規 (asli) のアヘンと混ぜ合わされ、街に出

廻っては巨大なもうけとなった。そこで闇のルートを監視すべく警察はスパイを放ったが摘発はまるで成功しなかった。スパイはあらゆるところに入りこんだが専売業者はもっとすばやくこれに対抗したからである。政府はこれがうまくゆかないと知るや方針を変え、政府自身が専売業者になることに決めた。こうしてアヘン取締局 (Opiumregie) が設置された。それ以降アヘンの専売は政府の独占となる。政府は人民の苦しみに意を払い、中国人だけがもうけを得るのを防ごうと考えた。

この結果、政府のアヘン関係役人がもうけを得るようになった。一方、それ以来中国人は苦況に陥り、失業し没落する者が相次いだ。村へ入ることを禁ぜられ通行制限を受けたちまち蓄えも尽きてしまった。もし落ちついて考えるならば、「お上」 (Kandjeng Gouvernement) は大変残酷だ。アヘン条例によってよろこぶ者もいたが不幸になった者もいるのだから。ひとりを助ければひとり死ぬという諺の通りだが、まことに中国人はこの条例によって辛酸の極みに立っている。しかし嘆いたとして益もない、これも定めなのだろうから。

同じ国民なのに土地の子 (bumi poetra) はもっぱら愛され中国人はまるでま子のように憎まれている。

政府がアヘン専売を始めてから密輸業者は恐れたが、やがて大胆となり警察の目をかすめて密輸を続けた。捕まるのは小物ばかりで、大物は悠々と仕事を続けた。アヘン条例が政府に損失をもたらしていることは明らかだ。お上の目的は、アヘンから利潤を上げること、人民が吸いすぎないように防ぐことであつたのに、アヘン吸飲者によれば政府公認のアヘンは味がおいしくなっていて、今までよりも吸飲量が増えたという。また、密輸は益々横行している。これはいずれもお上の意に反したことである。

アヘンはどの民族も好むが、中でも中国人とジャワ人は老若を問わずとりわけアヘンの好きな民族だ。どんなに高くてもこれを手に入れて薬の代りとする。アヘンの効用は大きいから、これを禁じても吸飲はなくなるらない。

アヘンを吸うと白い煙が上り、それで金がなくなっても、心は満たされる。アヘンを吸えば病は消える。嫌なことは忘れころははばたく。アヘンは高価だからめったに買えない。人はそれぞれ制禦してこれを吸引すればよい。

アヘンの害を言う人もいる。これをやると顔は青白く体は痩せこけ寿命が縮まり生きる屍のようになるという。これはアヘンを憎み悪口を言い続けてきた者たちの言葉だ。その人たちはしかし黒と白の区別が付かず、よってきたところが正確に分っていないのだ。アヘンを売る家 (アヘン窟) は柱も壁も清潔だ。アヘンを攻撃するのは愚かな考えである。

アヘンの効用といえばヨーロッパでは太りすぎた人は痩せるためにアヘンを吸飲すると

いう。一体アヘンを吸うことのどこが悪いというのか。アヘンを吸うか否かはそれぞれの選択にまかされていることなのだ。

アヘンを吸えば早く死ぬという非難も正しくない。人は誰でも死ぬのであるし、死は身分の上下なくすべての者の上に必ず訪れる。問題は十分な資金もないのにアヘンを吸い続けることだ。前借りをして借金に苦しんだり、金欲しさに強盗や殺人に走ったりすることになる。これに対して十分な資金を持つ場合にはこのような問題は生じない。

そうであるとはいえ、まだ若い人々はアヘンをやめるべきであろう。もし吸っているならばその量を減らすべきである。お上は人民がアヘンを吸いすぎないようにと、アヘン条例を制定し、人民を借金から解放しようとした。条令によりアヘンに薬が混ぜられてペルシャのアヘンとは異なるものとなり、又、薬にかかわる医者たちは収入を得ることとなった。

さて、現にアヘンを吸っている者はそれを味わうのもよいし、吸飲量が増えないように気を付ければよい。また、お上は人民に慈悲をかけておられるのであるから、アヘンがもとで問題を起こしている場合には、アヘン吸飲は罪悪であってただちにこれを止めるべきである。

アヘンのシャイールはここまでにしよう。作者は何も忠告を与えようなどと大それたことを思っているわけではない。読者 (toewan dan baba) に平安がありますよう。それから、もしこのシャイールに誤りがあったり不足のところがあれば、どうぞ読者自身で直したりつけ加えたりしてくれるようにお願いします。

前にも述べた通り、この1904年版のアルマナックをもってタン・チュック・サンの名前は姿を消す。1年おいた1906年版のアルマナックは表紙に「このアルマナックは植民地政府のアルマナックに従う」とのみ記されているだけで編者の名はまったくみられなくなるのである。しかもまた1906年にシャイール1編が載せられているが、それ以降はシャイールそのものがアルマナックに載せられなくなる。従って1904年はブニン社版アルマナック・ムラユにとって大きな転機となったと述べてよいだろう。また、タン・チュック・サン自身にとってみれば、「アヘンのシャイール」は彼の最後の作品となったと考えてよい。あるいは逆に、このシャイールを記したからかあるいは別の理由があつてのことかはともかく1904年以後タン・チュック・サンがアルマナックの編集から手を引くかそこから立ち去らざるをえない何らかの事情があつたのかも知れない。

このことを含めて、これまでに概観してきたシャイールについてどのような特質を指摘することができるであろうか。以下にそれをまとめてみたい。

2. シャイールの時代

(1) 同時代性

これまでに概観してきたシャイールはそのテーマに従って次の三つに大別することができる。

第一は外国とりわけ中国に素材を求めそれをムラユ語でうたったもので、長編のものが多い。

第二は恋歌、花、カード遊び、人生の知恵などをうたったシャイールもしくはパントウンで、比較的各年にわたって掲載されている。

第三は、その年ごとにジョクジャカルタの街で経験された出来事をシャイールの形式でうたったもので、これは数も多くほとんど各年にわたっている。この第三のシャイールこそ、ブニン社版アルマナックを特徴づけこれに読み物としての魅力を与えていたといっていよう。

すでに見てきた通り、タン・チュック・サンは1889年にアルマナックの編集に携わるさいに自らの登場をシャイールに綴り、それ以後次々と同時代のジョクジャカルタの街そのものをシャイールで表現してきた。それらは、先ず何よりも、日本人歌劇団の興行、気球の一大ショー、コメディ・スタンブルの大興行、三日間にわたる競馬の競技会のように、その当時ジョクジャカルタの街の人々がいずれも初めて見聞した出来事、つまり時代の先端にある風物を綴っていた。これらを通じて、19世紀の終ろうとする頃、ほとんど毎年のように街の空気を浮き立たせしばらくの間ひとしきり人々の共通の話題になっていたことがらがジョクジャカルタを訪れていたことが知られるのである。

これと並んでジョクジャカルタがジャワの王都でもあるということをおのずと浮かび上がらせるようなシャイールも精力的に綴られていた。東隣りに接しているスラカルタ王家の当主の逝去と新しい王の即位式、そしてそれがジョクジャカルタの街でどのように見られていたのかという様子、シャム王チュラロンコンのジョクジャカルタ訪問、ジョクジャカルタ王家で行われた割礼の大祭礼、ウィルヘルミナ女王への頌詞などがそれである。これらはいずれも、その年ごとに起きていた王と王族たちの重要儀礼であり、王家や植民地政府の威光と栄華を称えるものであるとともに、それがどのようにしてとり行われたのかを「街の風景」として綴ったものであった。

またロンボック戦争のシャイールも植民地政府の「正義の闘い」が植民地の秩序と安寧をもたらすに至るまでについて、逐一うたい上げたものであった。秩序と安寧の回復という点でいえば、1889年に綴ったジョクジャカルタの強盗団についてのシャイールも同様の主題を扱っていた。

これらはテーマそのものが同時代性を示し新しい風俗をうたうことで、アルマナックのアル

マナックたるゆえん、すなわち、年々歳々の人々の生活を彩りこれに区切りを与えている事象をもっともよく提示するものであったといえよう。アルマナックの冒頭におかれたカレンダーが無機質的に時間を分割し、唯一の普遍的な時間の単位にそれぞれ個別の暦を変換してしまう、つまり、西暦（これはわざわざオランダ暦と命名されていた）を基準として他の暦が位置づけられ、まるで一本の棒が同じ速さで無限に伸び続けるように時間を定位するのに対し、アルマナックの巻末におかれたこれらのシャイル群こそは、この棒のように伸びる時間に、歳時記としての区切りと意味を与えるものであったといえることができるだろう。暦がジョクジャカルタの街の人々の共通の経験と結びつき、生活暦としての性格が示されていたといってもよい。

これらのシャイルが個々具体的に示している事象をつらぬくのは、王宮と王宮前広場（アルンアルン）、イモギリの聖地、水の宮殿など、ジョクジャカルタを一つの都として作り上げる上での中枢である。しかし、その上に重なり合うようにして、汽車、トゥグ駅、迎賓館、競馬場、クラテン駅など、まさに当時の最先端の技術と文明の装置がくり返し語られる。ソロの王の棺を運ぶのも、シャム王をジョクジャカルタまで運ぶのも、当時開通されたばかりの鉄道であり、それなくしてこれらの巨大な出来事がジョクジャカルタの街にやってくることはありえない。王宮前広場の大天幕、高く上がる気球、そこから舞い下りてくるパラシュート、異国（日本）の不思議な見世物、聞き慣れぬしかし何やらハイカラな名を付けられて疾駆する馬、スラバヤで結成されたばかりのハイカラな歌劇団の華やぎ、それらのいかにも心の浮き立つような物珍しく新しい事象が街でおきる。一年経てば何か新奇なことが必ずおきる、という時代の賑わいと華やぎとを、これらのシャイルは見事に伝えている。しかもそれは、そもそも同時代性をうたうことをテーマとしない恋歌や忠告のシャイルの片々にも、おのずから示される。例えばそれらは、スマランから貨車で魚が運ばれることであったり、コーヒーやミルクのような飲み物であったり、チーズやパンのような洋風の食べ物であったり、子供が毎日通う学校であったり、そこで用いる読本であったりする。

またこのような出来事がそれぞれに華やぎをもつのは出来事自体のはなやかさに加えて、実に多くの見物人が街に溢れ出てそれを目にしていたということによる。それぞれのシャイルは、見物人や観客が老若男女道路を埋めたり新設の駅前広場に集まったり、王宮前広場に溢れたりしている様子を克明に表現している。時として、シャイルの主人公は観客自身にほかならないことが示される。

それとともに注目すべきことは、これらの観客、見物人がつねに多数の（というよりも当時のジョクジャカルタの街を構成していたすべての）民族集団から成り立っていたことが示されていることである。王族と人民（rakjat の語が頻用されている）として表現されているジャワ人、中国人、オランダ人はもとより、Kodja 人として示されるタミール人、アラブ人もその都

度シャイールの中に登場する。それは、これらの事象が民族や階層の差異を越えて共通の話題となっていたことを示しているであろう。

別言すればこれらのシャイールは、当時の人々の話題が年ごとに新しくなる状況、そしてその話題がジョクジャカルタという狭い範囲を越えて広がるものであった状況を示している。それはまた、人々の「話し言葉」(lisan)の世界をシャイールという「書き言葉」(tulisan)によって定位していく営みであった。

しかし、人々の話題の中心はつねに華やかな出来事、「近代」の到来を告げる新しい技術や演芸の世界にかかわるものだけであったとは限らない。日常生活にもっと密着したところでは別のことがらも話題とされていたにちがいない。それは、生き生きと語り合うよりもひそかに噂話として広がっていく場合が多かったであろう。そしてこちらの方に噂話としての迫真性と現実性はより高かったということもできる。それをよく示すのは、1889年の強盗団についてのシャイールである。そこでの強盗団はたんに悪虐非道の徒としてうたわれているだけではない。誰でもがそれに襲われるという不可抗力性、誰でもがそれに対して身をさらけ出しているというおそれとおののき、ひとたび狙いを定められたらそれに抗するすべもそれから逃れるすべも無いというまったく無力性、だからシャイールの中ではこの強盗団は「はやり病い」として語られまたくり返し「街を焼く火」として語られる。それは、比喩として語られるのではなく、のがれられない災禍としてそれらと等置されている。遂にジョヨ・ユドは逮捕され絞首刑に処せられるが、その直前に至ってなおこの首領は不敵な笑いを浮かべている。ユドが逮捕され、オランダの力によって秩序がもたらされた、闇が尽きて光がやってきた（「闇から光へ」という倫理植民地政策のイデオロギーが、その政策が唱道される20世紀以前、10年以上も前にこのシャイールで用いられていることに注目されたい）と述べてこのシャイールは終るが、それにもかかわらず、ユドの不敵な笑いは、シャイールのそのような結語がいつかまたもろくも崩れることを予告している。火と病いは必ずまた起きてくると予告している。何故ならば、このシャイール全編を通じて、ただユドひとりだけが「笑う」ことのできる主体だからである。

このシャイールには、ジャワにおけるおそれとおののきの原形質が見事に示されていると思われる。「おそれとおののき」(ketakutan)は、抗しがたい力で外から闇の中からやってくる。「ユド」以外は誰一人として ketakutan から逃れることはできない。それは抗しようのない災禍、人智を越えた定めとして了解される。ひとはわずか壁一枚でこの力の前に身をさらされている。壁は薄くはなくていつでも打ち破られてしまう。「おそれとおののき」をめぐる原形質とはおおよそそのようなものである。このようなおそれをテーマとする作品は、その後、シャイールのみならず短編の物語や実話小説の形式で書き継がれていった。それはたんに大衆文芸のみならず、「純文学」の作品の中にもしばしば認められる主要なテーマの一つであった。19世紀以降のムラユ語、のちのインドネシア語文芸作品の最大のテーマは実は「おそれとおのの

き」に関わるものであったといっていよいだろう。この「強盗団のシャイール」は『シ・チョナット物語』や『ニヤイ・ダシマ物語』を経、『シティ・ヌルバヤ』から現代の怪盗クスニ・カストットの物語やプラムディアの諸作品に至るそのようなテーマを扱った最も初期の作品であった。¹⁶⁾

(2) 闇の世界のかがやき

「強盗団のシャイール」が示すこのようなテーマは、タン・チュック・サンのシャイールのもう一つの特色と関連している。上に見た通り、ジョヨ・ユドをうたったシャイールは「現に起きた出来事」(jang terlakoe zaman sekarang)をテーマにしたさまざまな華やかなシャイールといささか趣向を異にしていた。それは、華やかで祝福された世界と隣り合わせの陰の世界をめぐるシャイールであった。そのような「うさんくさい世界」は、アルマナック・ムラユのシャイールがうたったもう一つの主要な題材であった。ここに「うさんくささ」とは、まっとうな社会道德という普遍的基準、また植民地政府の秩序と安寧という観点からみてそれを危うくするという意味であるが、これらのシャイールがかかれていたまさにその時代こそは、「まっとうな」社会道德と植民地政府の秩序と安寧とが確立していく時代であった〔土屋 1986: 226-234〕。

あらためていうまでもなく、タン・チュック・サンのシャイール中、このようなテーマを直接扱ったものが3編ある。一つはいま述べた「強盗団のシャイール」であり、後の二つは「酒のシャイール」及び「アヘンのシャイール」である。強盗団についてのシャイールはその後もしばしばうたわれたり、他の文学形式(短編物語や演芸)で扱われたが、アルコールやアヘンについてのシャイールは大変珍しい。況んやここで歌われているような姿勢、つまりアルコールやアヘンについてその功罪を半ばずつ論ずるだけでなく、その効用についてむしろ積極的に論ずるという姿勢は、ムラユ語のシャイールとしては稀有のものであろう。

これに関して次の二つの点を指摘することができるであろう。

第一はこれらのシャイールが、当時の時代風俗のリアリティを反映しているという点である。それは、汽車や気球やコメディ・スタンブルが時代の風物詩であったこととは異なる局面で、しかもなお時代のありようを示していた。

先ず、植民地都市の複合性ということである。ジョクジャカルタは王都であって王と王宮(クラトン)があり王宮の南北にはそれぞれ広大な広場(アルンアルン)があって王と人民と

16) それらのタイトルを示せば次の通りであるが、ほかにもこの種の作品は膨大な数に及んでいる。
 Pangemanann F.D.J. 1900. *Tjerita Si Tjonat*. Batavia.
 Francis G. 1895. *Tjerita Njai Dasima*. Batavia.
 Rusli, Mh. 1922. *Sitti Nurbaya*. Batavia, Balai Pustaka.
 Pramoedya Ananta Toer. 1950. *Keluarga Gerilya*. Jakarta, Pembangunan. (押川典昭(訳). 1983. 『ゲリラの家族』めこん)
 Parakitri. 1979. *Kusni Kasdut*. Jakarta, PT Gramedia.

を結ぶ空間を形成していた。しかし同時にまたこの街もオランダ植民地支配の下にかっちりとおかれ、オランダ女王、バタヴィア総督府から連なる権威の体系が確立していた。理事官、副理事官、監督官とその夫人と家族たち、かれらが街の一角に広大な館を構え、目も彩な生活をしてきた。それは、この街に汽車が通じ郵便や電信のネットワークが開かれ、自転車が登場し車が走り始めるようになるとともに一層顕著になった。これらはすべて、19世紀末から20世紀初めにかけてこの街で起きたことであった。

王と王宮がありオランダ人の高位高官が威を誇るという状況を取り巻いて、他のさまざまな社会集団が存在していた。王族とこれに系譜上つらなる多くのジャワ人貴族たちは、王宮の一角に溢れんばかりになっていたし、その一部はそこから出てオランダ式の教育を受け、植民地の原住民官僚となりつつあった。もう少し下のランクの村落に在住する貴族層の中からは、先にみたワヒディン・スディロフソドの例が示すように、あるいは医師としてあるいは当時しだいに開設されつつあった原住民学校の教師として専門職の道を進む者も現れ始めていた。そしてこれら貴族層（プリアイ）の外側には、膨大な数の人民（ラヤット）がひろがっていた。

商業活動のネットワークはほとんど東洋系外国人、とりわけ中国系住民に握られていた。彼らは現地化しつつある人々つまりプラナカンであって、ムラユ語を話しイスラム化し現地女性との通婚を重ねていた。そのネットワークは植民地領土の全域だけでなく海外にも及んでいた。これらのプラナカンはその一方で、1900年に中華会館を設立して中国人としての自らのアイデンティティをとり戻そうとしていた。その背景には同じ東洋系外国人である日本人が1899年以来ヨーロッパ人と同格の法的地位を与えられていたこと、中国人の旅行と居住の制限が強化されたことなどに対する反発があった。

さらに、欧亜混血（ユーラシアン）のグループが居た。このグループは一部は都市に一部は農村にいて、オランダ風と現地風の奇妙な混合・混在した生活様式を作り上げていた。

それではこのようなさまざまな社会集団、文化集団は、植民地都市においてファニーバルのいう「複合社会」すなわち同じ空間に存在しながら言語的にも文化的にも交流し融合することのない社会、つまり共通意思の存在しない社会を作り出していたのであろうか。そこでは、貨幣以外にこれらの社会集団を還流するものは何もないとされていたのであるが、上に示したシャイールはこれらのさまざまな社会集団が、いくつかのことがらに強い関心を共通に寄せていたことを示している。そしてその関心事の中には時代の進歩を映す華やかな催し事だけでなく、むしろ多分にうさんくさいものも又包み込まれていた。

このような関心のありようについて、アントニイ・デイは「カエロアン」という概念を提出して興味深い議論を展開している。カエロアン (kaelokan) は、「エロック」(elok) から派生した抽象名詞（ジャワ語）である。エロックは「尋常でない」、「珍しい」、「不思議な」などを意味し、カエロアンはその抽象形「不可解なこと」、「謎めいたこと」を意味している。さてデイ

によれば、19世紀半ばのスラカルタで刊行されたジャワ語紙『ブラマルタニ』には「カエロアン」という欄が設けられ、「街よりも田舎でおきた幽霊の話、奇形の人や動物の話、霊のたたりやこれに題する出来事」がしばしば掲載されていたという。デイはこのことを当時の新聞の読者たちの心理状況と結びつけて次のように結論している。すなわち、当時スラカルタで新聞の編集に携わったりその読者であった人々、オランダ人、ユーラシアン、ジャワ人のエリート、プラナカンなどが、ジャワの「汎神論的世界観」と「西欧的近代世界」のはざまにおかれていたこと、そのはざまの状況にあってその何れにも完全に帰属しえないという「無能性」や「(相互の)人種的・階層的違和感と偏見」がこのカエロアンの世界（つまり「おどろおどろしい世界」）へと、彼らをひきつけていったのである [Day 1981: 262-264]。

ここで言われている『ブラマルタニ』紙の「カエロアン」欄は1870年代のものであったという。とすれば、同じ中ジャワの王都でスラカルタと隣り合わせのジョクジャカルタにおいても、新聞の読者（ないし潜在的な読者層）は、ジャワの「汎神論的世界観」と「西欧近代世界」のはざまにおかれていたであろう。しかも、19世紀末から20世紀初めへと時代が移れば移るほどそのはざまは深いものとなっていったことだろう。

オランダ的な小市民の道德観は、1870年代以降スエズ運河の開通にともなって家族連れのオランダ人の数が増すのと軌を一にして、次第に植民地社会に根付いていたし、ウィルヘルミナ女王の即位式を機に「植民地に新しい倫理的方向を」というスローガンが唱えられたことで「倫理政策」という新しい近代化政策が政策目標として掲げられるようになった。鉄道や電信、電話、また近代学校制度や植民地行政の再編成のような一連の近代化がそれに重なり合って進められた。時まさに、アチェ戦争の長い闘いに決着がつき、いく度かのバリ戦争でバリ島を服属せしめ、あわせてロンボック島への支配権も確立して「サバンからメラウケに至る」広大な領土をもつオランダ領東インドという植民地国家が確立しつつあった。

このような時期、それまでの植民地社会にあまねく広がっていたいくつかの風俗や慣行は、「進歩と倫理」に反するものとして否定されもしくは特定の空間に囲い込まれるようになっていった。それらの風俗や慣行は、ある特定の社会集団だけでなく複数の社会集団にわたって共通にみられた現象であり、それゆえにこれらの社会集団を相互につなぎとめさらに融合させる役割りを果たすものであった。さまざまな賭博、アヘン吸飲、現地妻（ニヤイ）などはその典型であった。しかるに19世紀末以来、そのあるものは公然と禁止され、あるものは非公然化されて次第に社会の裏側へと姿を隠すようになった。つまり先の言葉を用いれば、これらの事象は次第に「カエロアン」の世界、何やらおどろおどろしくいかげわしいもの、「健全な社会生活」から逸脱したものとみなされるようになっていったのである。それだから、当時の「ニヤイ小説」の流行にみられるように、それは好奇の対象となり、また、犯罪に結びつくものとして語られるようになった。ニヤイの物語が実話の物語化でありそれがまた犯罪をめぐる物語で

あり（しばしば）被虐の物語であるという定式化がそこではみられたのである。

このような当時の時代風潮にてらしてみる時、タン・チュック・サンの一連のシャイールは、ジョクジャカルタという街における「はざま」の時代のありようを見事に浮かび上がらせていたとすることができるだろう。すなわち、一方で「進歩の時代」の事象が年ごとの風物として描かれ、他方ではやがて時代の裏面から消えてゆく、ニヤイや強盗団やアヘンやアルコールにかかわる世界が歌われる。このうち、ニヤイについて付言すれば、先にみたシャイールのうち「愛の歌、恋の歌」などは単に相聞歌の手引きであるだけでなく、ニヤイとなるべき女性を探す状況として読みとることができるし、「混載詩」にしばしば現れる旦那とかグナグナ（秘薬）とかは、そのままニヤイの世界を歌ったものである。ここではグナグナはまさに「カエロアン」の世界のシンボルとして描かれているといえよう。スタンブル劇団の美女がまた夕暮れにふいに姿を消すのもまた、このような世界のありようを示している。

このようにタン・チュック・サンの綴ったシャイールの顕著な特徴は、そこで「カエロアン」の世界が歌われていたこと、しかも、そのリアルなありようが歌われていたところにあった。そしてここで併せて注目すべきことは、これらの「カエロアン」のシャイールにおいても「時代の進歩」（クマジュアン）のシャイールと同様に、すべての社会集団、文化集団がこれにかかわるものとしてうたわれていることである。アルコールのシャイールにしてもアヘンのシャイールにしても、そこに登場するのはオランダ植民地政府とその代理人、兵士、ジャワの貴族と人民、プラナカンなどの社会集団である。というよりも、「強盗団のシャイール」においてそれが「はやり病」と「くり返し襲う火事」にたとえられていたように、社会集団、文化集団の観念を横断しその上を一様におおうものとして、強盗団もアルコールもアヘンもニヤイもグナグナも定位されていたのである。病も火事も人為ではなく自然に属することがらであり、それゆえに、毎年アルマナックの冒頭にその年の日食月食の予告が必ずなされるのと同じようにして、火事も病も強盗団も必ずすべての人々の上をおおう。ニヤイもグナグナもアルコールもアヘンも、すべての人々の上をおおい、すべての人々の心をそれらに結びつけるのである。

このようにしてみると、タン・チュック・サンのシャイールは、19世紀末の植民地都市のダイナミクス、とくに、それが複合社会として成立していたのではなく、混沌・融和のダイナミクスで働いていたことをよく示していた。それは、わずか四半世紀後に政府公定のバライプスタカ版のアルマナックが、一貫した秩序を示し、ページのすみずみまで近代知の優位性がゆきわたり、したがって、「カエロアン」の世界はもはやその痕跡すら留めていない状況と比較すると、ことごとく対照的であったといえよう。

(3) タン・チュック・サンの時代

第二に論ずるべきことは、タン・チュック・サンとはいかなる人物であったかということで

ある。この人物の由来来歴については今のところ筆者には分っていない。さし当たり推測せざるをえないのであるが、その手がかりは彼自身の手になるシャイールだけである。しかしシャイールをみていくと、この人の人物像だけでなく彼が何故1906年以降にアルマナック・ムラユの編集から手を引いたのかという理由も浮かび上がってくると思われる。そこで以下にその点について述べてみたい。

重要なのは、彼の最晩期の二つの作品、「アルコールのシャイール」(1903年)と「アヘンのシャイール」(1904年)である。これらの作品はすでにみたそのあらましからも知られる通り、酒とアヘンが健康を損ない道徳的に堕落させ頹廢の氣風をもたらすことを主張しているのではまったくない。あえていえば、むしろそれと逆のこと、つまり功罪あい半ばすると述べながらもそれぞれの効能を巧みに述べたてている。アルコールの場合は、オランダ人社会での飲まれ方が一つの手本として示され、最後にはいくつかのブランド品を推賞することでシャイールを終えている。まことに巧みな筋立てとなっている。

アヘンの場合にはその述べ方はもう少し微妙で複雑である。それは、二つのテーマが一編のシャイールの中に決してなじみ合わないままに、混在しているからである。一つはいうまでもなくアヘン吸飲は是か非かというテーマであり、是とも非とも断じていないが経済的に余裕があって自制できる者ならば結構であるとその効能を述べる一方、ヨーロッパでも用いていることを巧みに織り込んでその効能を裏書している。

もう一つのテーマはアヘン条令をめぐる政府批判で、こちらの方こそこのシャイールが作られたそもそもの動機であったと考えられる。先に紹介したところからも明らかなように、アヘン販売を植民地政府が独占したことについての、華人(プラナカン)の側からの嘆きと恨みとが執拗にくり返され、また屈折した形で表現されている。「お上」はアヘン密輸を取り締まりアヘン吸飲に由来する人民の困窮を救うためにアヘンを政府専売とすることにした。しかし密輸は決してなくなっていないし、政府が薬を混入した結果アヘンの味そのもののおいしくなって人民の吸飲量は却って増加した。また政府専売以来、それまで販売にかかわっていた華人は悲嘆の底に沈んだ。これらのことについて事実を述べたり嘆きの声を発したり「お上」の措置を評価するかにみせてそれを皮肉ってみたり、面従腹背の姿勢があらわに示されている。

このような屈折した状況の背後には、アヘンの利権をめぐる植民地政府と華人とが利害を異にするという時代の展開があった。アヘンは19世紀のジャワにひろくゆき渡っていたが、1808年以来植民地政府はその加工販売を請負制とした。入札によって独占的販売権を手にしたのはほとんど華僑であった。また、公認の販売ルートに乗らないアヘン密売をどのようにして取り締まるのかということが、植民地政府と公認のアヘン業者の双方にとって最大の課題となっていた[白石 1992: 161-168]。

19世紀の末年に至って、このまことに儲けの多い事業について変化が生ずる。一つは1890年

当時、深刻な財政難に陥っていた政府がアヘンの利潤を直接手にしようとしたことであり、もう一つはアヘン吸飲に対する人道主義的批判がようやく高まってきたことである。その両方に対応するため政府は華人の販売権をとり上げて専管事業としそのためにアヘン取締局 (Opiumregie) を設置することとした。取締局は先ず、1894年にマドゥラ島を対象に設置され次いで1896年に東ジャワにそして1898年までに植民地全域に設置されて政府の一元的な管轄下におかれた [Williams 1961: 35-42]。また、この取締局には新たに多くの原住民官僚が登用されることとなった。

このような時代背景にてらしてみると、タン・チュック・サンがアルマナック・ムラユの編集に携わり始めた1880年代の末はアヘンをめぐって政府と華人のアヘン専売業者との関係が劇的に変化を始める時代であった。そして「アヘンのシャイール」は政府がアヘンを専管事業として以来の約8年間の状況を綴ったものであった。そこに示されたのは、「時代の風物詩」というわくをはるかにこえた生々しい声、アヘンをめぐる華人の側の肉声そのものであり、タン・チュック・サンは自らあたかもその専売権を剥奪されたかつてのアヘン業者であるかのようにして、このシャイールを綴っているといってもよいのである。タン・チュック・サンのシャイールのなかでこの「アヘンのシャイール」だけが、奇妙に粘着的で内向性の響きを伝えてくるのも、たんにアヘンというテーマに由来するだけではなく、それをうたう視点のありようと深く結びつけているからであろう。

それについては後でさらに論ずるとして、アヘンをめぐる時代状況についてなお二つのことに留意しておきたい。一つは先にも触れた通り、アヘン専売権を取り上げられたことを理由の一つとして華人が自らの利益団体「中華会館」を1900年に設立したことである。この「中華会館」がアルマナック・ムラユの出版元であるブニン社と結び付いていたことは、先にみた通り受け取り手のない「宝くじ」の賞品が「中華会館」に寄贈されると述べられているところから窺える。さて、このような賞品の寄贈先として「中華会館」とともに指定されていたのはブディ・ウトモのジョクジャカルタ本部であった。そして、このブディ・ウトモがアヘンをめぐって「中華会館」とは対極的なかわり方をする。それがアヘンをめぐって留意すべきもう一つの時代状況である。

ブディ・ウトモは1908年5月に設立されるが、この組織ではアヘン吸飲の悪習を廃止することがくり返し議論されていた。永積昭によればその直接の発端は、オランダ人のジャワ通知識人で植民地の神智学協会 (Theosophical Society) の中心的人物であったヒンローペン・ラッベルトン (D. van Hinloopen Labberton) の働きかけによる。ジャワ人から「キアイ・サントリ」の称号を奉られるほどジャワの文物に通じていたラッベルトンは、1909年1月16日ブディ・ウトモの会員を前にムラユ語で演説をしその中で原住民はすべてmの頭文字で始まる次の七つの悪徳から身を遠ざけるように自己規律をはからなければならないと強調した。それらは、

main (遊び), madon (性的快楽), minum (アルコール), madat (アヘン吸飲), maling (盗み), mada (悪口), mangani (大食) であり、このような巧みな「言葉合わせ」による禁欲のすすめは強い説得力をもっていた。そしてこれを受けて翌月の1909年2月には「七つのM」という名の矯風運動がボゴールで設立された [Nagazumi 1972: 71-73]。「七つのM」運動がその後どのように展開していったのかは定かではないが、ここには明らかに倫理植民地政策が原住民の道徳的向上ということがらに結びついていたこと、そしてブディ・ウトモを始めとする組織がその政策に呼応しようとしていたことが窺える。アヘンの販売はなお続いたが、その専売権を奪われた華人たちはやがて砂糖のプランテーションをはじめとして新しい経済分野に進出することになっていた。

このことは、ブディ・ウトモも「中華会館」も20世紀の倫理政策とそれぞれに対応していたことを示している。ブディ・ウトモは自らの地位の向上と道徳向上運動を担い、「中華会館」は自らの経済活動に加えられた制限の撤廃を目指していた。そのなかで、アヘンとアヘン吸飲は次第に否定されるべき対象となっていった。ラッペルトンが演説した1909年にオランダは上海で開かれた国際アヘン会議に代表団を送っていた。この会議は医療用のものを除いてすべてのアヘンを禁止しようとするもので、アヘンの禁止は国際的な流れとしても強まりつつあった。

アヘンの専売権を得て富を築いてきた華人たちは、これに代わる新しい活動領域と新しいネットワークの形成を必要としていたのである。そのような背景の中でもう一度、先のアヘンのシャイールとその作者であるタン・チュック・サンのことを考えてみると、タンは19世紀末の今やとり残されつつある華人のグループの心情と利害とをまさに代弁していたということになるだろう。さらにいえば、タンという姓は、スマランに本拠をおいた財閥パー・タン公司との関係を窺わせる。このうちタン家の方は、タン・ビンがジャワへきて成功し、その子タン・ティアン・ティン以来アヘン請負で財をなし、タン・ホン・ヤンの代には中部ジャワの全理事州のアヘン請負権を手中に収めた。タン・ホン・ヤンは1840年代には新興のアヘン請負業者パー・イン・チュウとともにパー・タン公司を設立、両家の縁組によってその紐帯をさらに深めた。タン・チュック・サンがこのタン家と血統上結びついていた可能性もあり、少なくともシャイール作者の背後にアヘン請負業者とそのネットワークが存在していたことは十分予想されることなのである [白石 1992: 165-166; Rush 1990: 83-107]。

お わ り に

上に述べてきた通り、タン・チュック・サンのシャイールは、一方で19世紀末から20世紀はじめにかけてのジョクジャカルタの街のその生きて動いている姿を描き出すとともに、他方

で、その当時のさまざまな社会集団・文化集団が一つの混在と融合の状況から次第にそれぞれの社会集団・文化集団として区別され「複合社会」の成立をみるに至るその文化的なプロセスを描き出していたといえよう。いまやまったく忘れ去られどこにもその記録が留めおかれることもないひとりの華人作家と彼の遺したシャイールとは、歴史の薄明に沈んでいる一つの時代の一つの街の姿を思いがけぬほどの新鮮さで伝えているのであり、これらのシャイールの一編一編のうちに「アルマナック」という無機質の一本の棒のように伸びていく時間の流れが、実際にはどのように流れていたのかあるいは淀んでいたのかというその時間のありようが、示されているのである。

タン・チュック・サンの名は1904年の「アヘンのシャイール」をもってブニン社版のアルマナック・ムラユから忽然として姿を消した。その理由も推察するよりほかない。「アヘンのシャイール」における政府批判が不興を買い、このシャイールが直接の原因となって身を引くことになったのかも知れない。アヘン請負業者のネットワークに支えられていたのが、政府専管以後崩れてタン自身がもっと身入りのよい別の仕事に鞍替えせざるをえなくなったのかもしれない。もっと端的に病気になったか死亡したということかも知れない。1906年以降のアルマナックはそれについては何も語っていない。だから、まさに忽然と姿を消したとしか云い様がないのであるが、上のいずれかであったにせよ又さらに別の理由であったにせよ、一つの時代からもう一つの時代への橋渡しの役目を終えた以上、やはりそこから立ち去るのはいかにも合点のいくことであった。それはくり返して述べれば、19世紀から20世紀への橋渡しであり、諸民族の融合の時代から「複合社会」の形成される時代への橋渡しであり、「ヤミからヒカリへ」をイデオロギーとする倫理政策の時代の訪れであり、そこで次々と近代的な諸団体、中華会館やブディ・ウトモやイスラム同盟の生まれる時代の到来である。そういう二つの時代のはざま、もしくは新しい時代の訪れるその直前の薄明の時代をタン・チュック・サンは描き出してたちまち消えていったのである。タンがアルマナックから姿を消した1904年は、時あたかもカルティニがこの世を去った年でもあった。カルティニはタンとは別のやり方で、このはざまの時代を生きその時代を描き出しそしてあわただしく駆け抜け駆け去っていった女性である〔土屋 1991〕が、両者はまったく異なる世界に生きながら、はからずもそれぞれに「はざまの時代」の時代相を描き出したのである。

謝 辞

本稿の成るに当たっては、日ごろ薫陶を賜わっている京都大学東南アジア研究センターの同僚諸兄をはじめ以下の方々の御助力を得た。本稿の文責は筆者が負うべきことはもちろんであるが記して謝意を表する次第である。押川典昭氏、柏村彰夫氏、北野正徳氏、深見純生氏。とくに五十嵐忠孝氏にはアルマナック・スング等をみせて頂いたほか懇切なコメントを頂いた。さらに人文科学研究所の研究会「文学から何が見えてくるか」（飛鳥井雅道教授主宰）で報告の機会を得、懇切周到なコメントを頂いた。資料の蒐集

に当たっては、オランダ王立言語民族文化研究所 (KITLV) の図書室の好意をえた。また、本稿は文部省科学研究費補助金海外学術調査「東南アジア型都市文明の形成」(1987-89年。研究代表者 坪内良博) 及び「東南アジア海域世界の動態に関する総合的研究」(1990-91年。研究代表者 土屋健治) の援助を得て行われた。

引用文献

- Almanak dengan tafel pembijtaraan Elkitab, jang toenjoek sasahari nats bagi tahoen 1891-96 & 1898-1901.* Batavia.
- Almanak (Javaansche) Serat panenggalan ingkang kaping 5-19, kangge ing tahoen Walandi 1889-1903, ka-anggit dening Tan Tjiook San.* Yogyakarta.
- Almanak (Javaansche) voor 1865-71, 78-79, 81-85, 87-89, 1891-1901, 1903-05 (12-18, 25-26, 28-32, 34-36, 38-48, 50-52 tahoen) onder redactie van A.B. Cohen Stuart.* Semarang: van Dorp.
- Almanak (Maleische) 4-7 Jaargang (1880-83) onder redactie van F.L. Winter 13-23 (1889-99) en 25-27 (1901-03) samen gesteld door Tan Tjiook San Yogyakarta (1879-1902), 28-36 (1904-12).* Yogyakarta: Buning. [AMB]
- Almanak Melajoe, akan goena tahoen 1896-97 tahoen ke 1-2.* Batavia-Solo: Albrecht.
- Almanak (Ned.-Chin.) 1861-1920.* 1908. Batavia.
- Almanak Orang Masehi pada tahoen 1881.*
- Almanak (Soendaneesche) voor 1900, 1903.*
- Almanak (Takwin) hitoengan hari, boelan, tahoen orang Masehi.* 1877.
- Almanak tani.* 1925-33.
- Almanak tani Djawa.* 1929-30.
- Almanak van het Indologische studentencorps voor 1898-99.* 1898. Delft.
- Breton de Nijs. 1973. *Tempo Doeloe Fotografische Documenten uit het Oude Indië, 1870-1914.* Amsterdam: Em. Querido's Uitgeverij B.V.
- Day, Anthony. 1981. *Meanings of Change in the Poetry of Nineteenth-Century Java.* Ph. D. Dissertation, Cornell University.
- Francis G. 1895. *Tjerita Njai Dasima.* Batavia.
- 小島麗逸; 大岩川嫩 (編). 1987. 「『こよみ』と『くらし』——第三世界の労働リズム——」. アジア経済研究所.
- 宮坂正昭. 1984/6. 「『ジャワ年代記』の時空性——分裂王国マタラム宮廷作家の世界像——」. 『東南アジア研究』22(1).
- Nagazumi, Akira. 1972. *The Dawn of Indonesian Nationalism: The Early Years of the Budi Utomo, 1908-1918.* Tokyo: Institute of Developing Economies.
- 永積 昭. 1980. 「インドネシア民族意識の形成」. 東京大学出版会.
- 押川典昭. 1986. 「『インドネシアの紅はこべ』とタン・マラカ——大衆小説と革命家伝説——」. 『上智アジア学』4. 上智大学アジア文化研究所.
- Pangemanann F.D.J. 1900. *Tjerita Si Tjonat.* Batavia.
- Parakitri. 1979. *Kusni Kasdut.* Jakarta: PT Gramedia.
- Pramoedya Ananta Toer. 1950. *Keluarga Gerilya.* Jakarta: Pembangunan. (プラムディア・アナンタ・トゥール. 1983. 『ゲリラの家族』押川典昭 (訳) めこん.)
- , ed. 1982. *Tempo Doeloe, Antologi Sastra Pra-Indonesia.* Jakarta: Hasta Mitra.
- Regeringsa (manakken) voor Nederlandsch-Indie. 1735-1942.* Batavia.
- Rush, James R. 1990. *Opium to Java: Revenue Farming and Chinese Enterprise in Colonial Indonesia. 1860-1910.* Cornell University Press.
- Rusli, Mh. 1922. *Sitti Nurbaya.* Batavia: Balai Pustaka.
- Salmon, Claudine. *Literature in Malay by the Chinese of Indonesia: A Provisional Annotated Bibliography.* Paris: Editions de la Maison des Sciences de l'Homme.
- 白石 隆. 1992. 「インドネシア——国家と政治——」リポート.
- 週刊朝日 (編). 1988. 「値段史年表——明治, 大正, 昭和——」朝日新聞社.
- Sumardjo, Jakob. 1992. *Lintasan Sastra Indonesia Modern, Jilid 1.* Penerbit PT. Citra Aditya Bakti. Bandung.
- Taylor, Jean Gelman. 1983. *The Social World of Batavia: European and Eurasian in Dutch Asia.* The

University of Wisconsin Press.

土屋健治. 1984. 「19世紀ジャワ文化論序説——ジャワ学とロンゴワルシトの時代」『東南アジアの政治と文化』土屋健治；白石 隆（編）所収. 東京大学出版会.

———. 1986. 「カルティニ再論——19世紀ジャワ文化論への一視角——」『オランダとインドネシア』栗原福也；永積 昭（編）所収. 山川出版社.

———. 1987. 「『ニヤイ・ダシマ物語』論」. 『東洋文化』67. 東京大学東洋文化研究所.

———. 1988. 「インドネシアの社会統合」『アジアにおける国民統合——歴史・文化・国際関係——』平野健一郎；山影 進；岡部達味；土屋健治. 東京大学出版会.

———. 1991. 『カルティニの風景』めこん.

Volksalmanak Djawi. (1919, 1921-26, 1928-33, 1935-39). Batavia: Balai Poestaka.

Volksalmanak Melajoe [AMBP]. (1919-1933, 1936-1940). Batavia: Balai Poestaka.

Volksalmanak Soenda. (1919, 1921-25, 1927-33, 1935-39). Batavia: Balai Poestaka.

Williams, Lea E. The Ethical Program and the Chinese of Indonesia. *Journal of Southeast Asian History* 2.